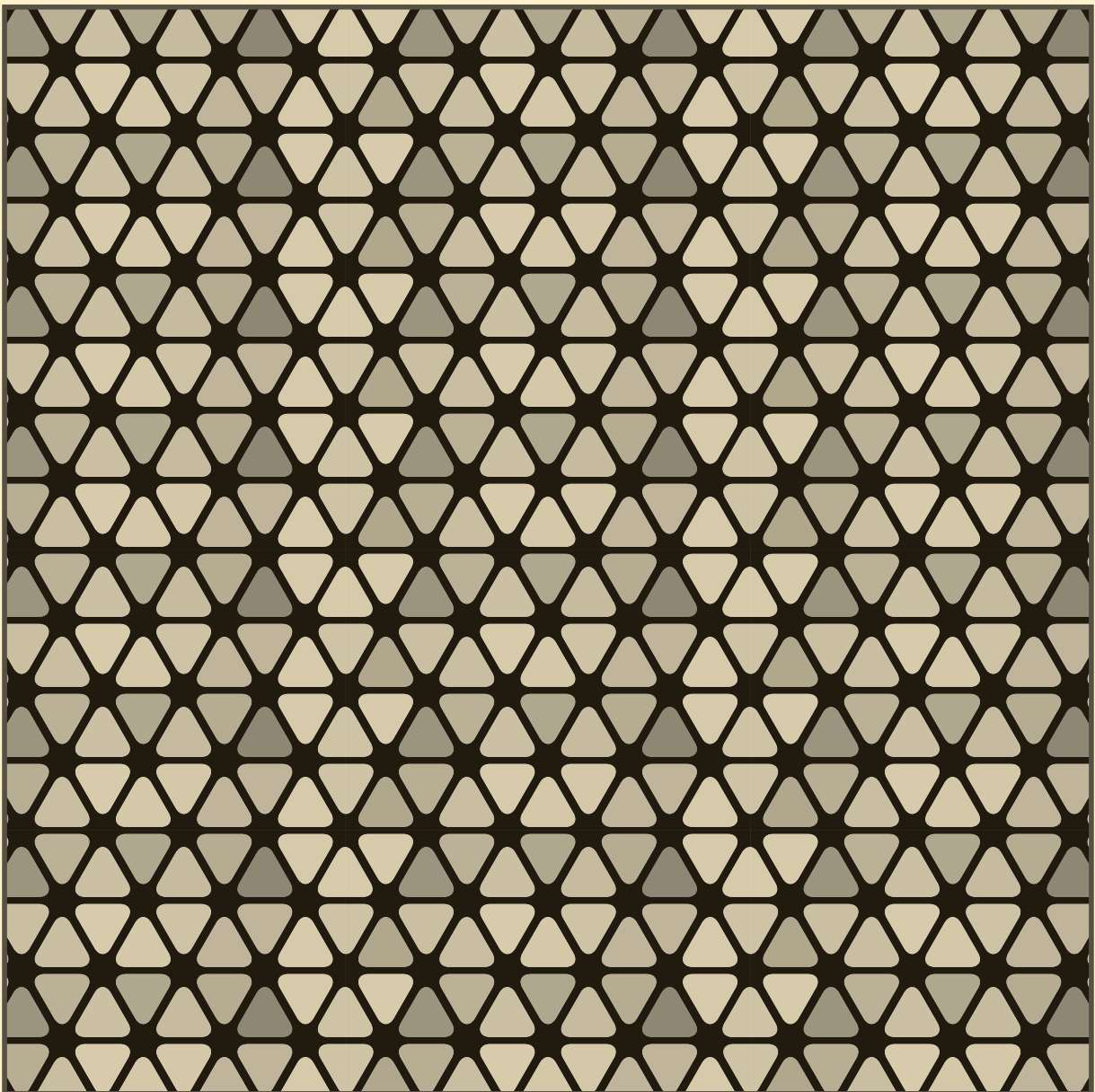

2018年度

シラバス

免許及び資格課程



秋学期は配布しません。1年間必ず保管すること。

獨協大学

シラバスは、科目の担当教員が学期ごとの授業計画、講義概要、評価方法などを学生に周知することにより、受講する際の指針とし、授業の理解を深めることを目的に作成されたものです。

シラバスをよく読んで、計画的な履修登録をしてください。

【シラバスの見方】

1. 目次について

①シラバスページの検索方法

科目の授業内容は、目次で検索してください。

目次の科目は、各課程別の授業科目表(学則別表)と同じ順序で掲載しています。

曜日時限・教室も記載されていますが、変更になる場合があるので、教務課前掲示板で確認してください。

※入学年度によっては授業科目表とシラバスの順序が一致していない場合がありますので、注意してください。

②目次の「備考」の表記

(略称説明)

外： 外国語学部	養： 国際教養学部	経： 経済学部	法： 法学部
独： ドイツ語学科		済： 経済学科	律： 法律学科
英： 英語学科		営： 経営学科	国： 国際関係法学科
仏： フランス語学科		環： 国際環境経済学科	総： 総合政策学科
交： 交流文化学科			

③履修開始学年・学期

目次の「学年-学期」欄に記載されています。

2. シラバスページの見方(右図参照)

①入学年度

03年度以降・・・2003～2018年度入学者

10年度以降・・・2010～2018年度入学者

12年度以降・・・2012～2018年度入学者

13年度以降・・・2013年度以降入学者

②入学年度に対応した科目名

③授業の目的や講義全体の説明、学生への要望

④学期の授業計画

各回ごとの講義のテーマ、内容を記載しています。

授業計画回数と実際の回数は必ずしも一致しません。

⑤到達目標

⑥事前・事後学修の内容

⑦授業で使用するテキスト

⑧参考文献

⑨評価方法

①	②	担当者
講義目的、講義概要		授業計画
③	④	
春学期		
到達目標	⑤	
事前・事後学修の内容	⑥	
テキスト	⑦	
参考文献	⑧	
評価方法	⑨	

①	②	担当者
講義目的、講義概要		授業計画
③	④	
秋学期		
到達目標	⑤	
事前・事後学修の内容	⑥	
テキスト	⑦	
参考文献	⑧	
評価方法	⑨	

3. 注意事項

①履修科目

入学年度や学部学科により、履修する科目及び科目名が異なります。

免許及び資格課程科目の履修に際しては、「履修の手引(免許及び資格課程)」で履修科目を確認してください。

②定員

定員を設けている科目があります。定員および備考欄を確認してください。

備考欄に”抽選”と記載されている科目は、抽選結果を必ず確認してください。

③時間割コード・教室

履修上の注意点については、時間割冊子にまとめられていますので、確認してください。

免許及び資格科目については、時間割コード・教室もシラバス冊子目次に掲載されています。

2018年度 免許及び資格課程 年間行事予定表

凡例【教職】:教職課程、【介護】:介護等体験、【教実】:教育実習、【司書】:司書課程、【司教】:司教教諭

No.	区分	行事	対象	日付	時間	教室、備考等
1 学年	1	教職課程ガイダンス	全学部	4月3日(火)	12:30~13:30	E-102:外国語学部・国際教養学部 E-101:経済学部・法学部 「免許課程シラバス」配付。
	2	【教職】 教職課程登録(課程費納付)	登録希望者のみ	4月3日(月)~6日(金)	9:00~18:30	証明書自動発行機で納付。申請書は提出不要。
	3	「教職課程ファイル」配付	教職課程登録者	「教職論」授業時		担当教員から配付日を連絡。履修していない場合は、配付方法を教務課免許課程掲示板で確認。
	4	【司書】 【司教】 司書・司教教諭課程ガイダンス (概要説明)	全学部	12月6日(木)	12:25~13:10	A-408、昼食持込可。
2 学年	5	【司書】 司書課程ガイダンス(履修手続き)	全学部	3月30日(金)	11:15~12:15	E-101、「履修の手引」持参のこと。
	6	【教職】 【司教】 教職課程・司教教諭課程ガイダンス	全学部	3月30日(金)	12:30~13:30	E-102、「教職課程ファイル」持参のこと。 「免許課程シラバス」配付。
	7	【教職】 【司教】 【司書】 教職課程・司教教諭課程・ 司書課程登録(課程費納付)	新規登録希望者のみ	3月30日(金)~4月6日(金)		証明書自動発行機で納付。教職課程のみ面接用紙および申請書を提出すること。
	8	介護等体験申込ガイダンス	2019年度体験予定者	10月9日(火) 10月11日(木)	12:25~13:10	E-205、昼食持込可。いずれかに出席のこと。 欠席した場合は2019年度の実習不可。
	9	【介護】 介護等体験実習費用納付 実習希望調査	2019年度体験予定者	10月10日(水) ~31日(水)	9:00~17:00 土のみ12:00まで	必要書類を教務課免許課程係に提出。
	10	麻疹・風疹抗体検査申込手続き	2019年度体験予定者	10月上旬~11月上旬(予定)		証明書自動発行機で納付。申請書は検査当日日に保健センターに提出。(詳細は、大学ニュース10月号「保健センター」の項参照)
	11	介護等体験(5日間)申込み	2019年度体験予定者	12月1日(土) ~21日(金)	9:00~17:00 土のみ12:00まで	必要書類を教務課免許課程係に提出。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。
	12	【司書】 【司教】 司書・司教教諭課程ガイダンス (概要説明)	全学部	12月6日(木)	12:25~13:10	A-408、昼食持込可。
3 学年	13	【司書】 司書課程ガイダンス(履修手続き)	全学部	3月30日(金)	11:15~12:15	E-101、「履修の手引」「成績通知表」持参のこと。
	14	【教職】 【司教】 【介護】 教職課程・司教教諭課程ガイダンス (介護等体験(2日間)関連説明、教員 採用試験に向けてを含む)	全学部	3月30日(金)	15:00~16:30	E-102、「教職課程ファイル」持参のこと。 「教育実習の指針」「免許課程シラバス」配付。介護等体験(2日間) 関連手続き資料配付。
	15	【教職】 【司教】 【司書】 教職課程・司教教諭課程・ 司書課程登録(課程費納付)	新規登録希望者のみ	3月30日(金)~4月6日(金)		証明書自動発行機で納付。 面接用紙および申請書を提出すること。
	16	介護等体験(2日間)申込み	2018年度体験予定者	3月下旬~4月上旬	9:30~16:30 土のみ12:00まで	必要書類を教務課免許課程係に提出。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。
	17	介護等体験開始ガイダンス	2018年度体験予定者	4月17日(火) 4月19日(木)	12:25~13:10	E-205、昼食持込可。いずれかに出席のこと。 欠席した場合は2018年度の実習不可。
	18	【介護】 介護等体験直前ガイダンス	2018年5月~7月 介護体験予定者	5月8日(火)	12:25~13:10	E-205、昼食持込可
	19	介護等体験直前ガイダンス (5日間もしくは2日間いずれか早い日程 に合わせて出席すること)	2018年8月~10月 介護体験予定者	7月3日(火)	12:25~13:10	E-205、昼食持込可
	20	介護等体験直前ガイダンス (5日間もしくは2日間いずれか早い日程 に合わせて出席すること)	2018年11月以降 介護体験予定者	10月2日(火)	12:25~13:10	E-205、昼食持込可
	21	教育実習校開拓	2019年度教育実習予定者	教職課程ガイダンス以降速やかに		各自が自主的に実習校を開拓 (遅くとも4月中に開拓を開始すること)
	22	「教育実習依頼状交付願」 「教育実習者登録票」 「麻疹・風疹抗体検査結果」提出	2019年度教育実習予定者	5月7日(月)以降開拓 できた者から随時	月~金 9:00~17:00	必要書類を教務課免許課程係に提出。 ('英語')については、英語資格の要件を満たしていること)
	23	「教育実習依頼状」交付	2019年度教育実習予定者	5月21日(月)以降	9:00~17:00 土のみ12:00まで	教務課免許課程係で受取。 交付は提出週の翌々週(月)以降9:00~17:00、土は12:00まで。
	24	【教実】 「教育実習依頼状」を実習校に持参 (正式依頼)	2019年度教育実習予定者	5月21日(月)以降随時		交付後、速やかに実習校に提出すること。
25	教育実習校(中学校)斡旋願提出 (未開拓者)	2019年度教育実習予定者	9月24日(月) ~10月5日(金)	9:00~17:00 土のみ12:00まで	必要書類を教務課免許課程係に提出。	
26	教育実習校(中学校)斡旋者 選考試験	2019年度教育実習予定者	10月11日(木)	13:00~14:00	教職・司書相談室(中央棟1階)	
27	麻疹・風疹抗体検査申込手続き	2019年度教育実習予定者 (前年度抗体検査未提出者)	10月上旬~11月上旬(予定)		証明書自動発行機で納付。申請書は検査当日日に保健センターに提出。(詳細は、大学ニュース10月号「保健センター」の項参照)	
28	【教職】 教育実習指導全体講義	教育実習指導履修者	11月中旬~12月上旬(5回を予定)		指定日の水曜日5時間目に全体講義に出席する。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。	
29	【司書】 【司教】 司書・司教教諭課程ガイダンス (概要説明)	全学部	12月6日(木)	12:25~13:10	A-408、昼食持込可	
30	【教実】 風疹・麻疹抗体検査提出期限	2019年度教育実習予定者 (前年度抗体検査未提出者)	検査結果交付日 ~2019年1月18日(金)	9:00~17:00 土のみ12:00まで	抗体検査結果を確認し、抗体がある場合は、検査結果用紙のコピーを教務課免許課程係に提出。抗体がない場合は、予防(ワクチン)接種の上、抗体検査結果用紙と予防接種を受けた証明書をコピーして、教務課免許課程係に提出。	
4 学年	31	【教職】 【司教】 教職課程・司教教諭課程ガイダンス	2018年度教育実習を行わない者	3月30日(金)	15:00~16:30	E-102、「教職課程ファイル」・「教育実習の指針」を持参のこと。 「免許課程シラバス」配付。 ガイダンス終了後、介護等体験(2日間)関連説明・資料配付。
	32	教職課程・司教教諭課程ガイダンス	2018年度教育実習予定者	3月30日(金)	15:00~16:00	E-101、「教職課程ファイル」・「教育実習の指針」持参のこと。 「教育実習日誌」・「免許課程シラバス」配付。 ガイダンス終了後、介護等体験を実施する学生は介護等体験(2日間)関連説明・資料配付も併せて行う。
	33	教育実習オリエンテーション	2018年度教育実習予定者	3月31日(土)	9:00~16:30	「教育実習日誌」オリエンテーションのページ参照。
	34	教育実習期間報告書の提出	2018年度教育実習予定者	4月12日(木)まで	9:30~17:00	教務課免許課程係に提出。
	35	教育実習校との打合せ	2018年度教育実習予定者	実習開始2~3週間前		各自実習校に確認。
	36	【教実】 教育実習指導教員発表	2018年度教育実習予定者	5月7日(月)	10:30~	教務課免許課程係掲示板で確認。実習直前の者は窓口にて確認。
	37	「教育実習訪問指導教員 事前面談用紙」提出	2018年度教育実習予定者 (該当者のみ)	各自の教育実習開始7日前まで		指導教員と訪問指導日程等を打合せし、 指定用紙を教務課免許課程係に提出。
	38	教育実習事前指導面接	2018年度教育実習予定者	各自の教育実習 開始7日前まで	11:30~13:00	教職・司書相談室(中央棟1階) 5~6月は面接予定者が多いため、早めに事前指導面接を受け、 実習に備えること。
	39	教育実習 (中学校または高等学校)	2018年度教育実習予定者	日程は実習校によって異なる		
	40	教育実習日誌提出	2018年度教育実習予定者	期日・提出方法は、「教職実践演習(中・高)」の授業内及び教務課免許課程係掲示板で指示する。		
	41	教育職員採用試験面接対策講座	教育職員採用試験 受験希望者	8月上旬(予定)	学内指定教室	日程が決定次第、教務課免許課程係掲示板で告知する。
	42	【教職】 教育職員免許状一括申請説明会 (書類配付)	全学部	10月4日(木)	12:25~13:10	E-205、昼食持込可。
	43	教育職員免許状一括申請受付 (手数料納付・書類提出)	全学部	10月5日(金)~31日(水)		必要書類を揃え、教務課免許課程係に提出。
	44	【教職】 教職実践演習(中・高)全体講義	教職実践演習(中・高) 履修者	11月中旬~12月上旬(5回を予定)		指定日の水曜日4時間目に全体講義に出席する。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。
45	【教職】 【司教】 【司書】 教職課程・司教教諭課程修了者発表 司書課程修了者発表	全学部	2019年3月4日(月)	10:30~	大学掲示板(学生センター前)	
46	【教実】 教育実習日誌返却	全学部	2019年3月4日(月)以降		教務課免許課程係	
47	【司教】 「司書教諭課程修了証」申請受付	司書教諭課程修了者	2019年3月4日(月)~20日(水)		教務課免許課程係	
48	【教職】 【司書】 教育職員免許状授与(一括申請者) 司書課程修了書授与	全学部	2019年3月20日(水)		卒業式当日(学位記と一緒に交付)	

※上記日程・教室については、変更になる場合があるので、随時「教務課免許課程係掲示板」で確認すること。

教職・司書相談室について

獨協大学では、教職・司書・司書教諭課程履修者をサポートするため、教職・司書相談室（中央棟1階）を開設しています。

ここには教職、司書、司書教諭課程に関する資料や教科書・参考書が用意されています。開室時間内は自由に閲覧できます。

また、同課程履修者を主たる対象に、専門家である教員が個別面談に応じています。教員という仕事、気になる教育実習や教員採用試験、図書館で働くにはどうすれば良いか、など気になることを質問できます。もちろん、教職、司書、司書教諭課程を登録・履修するか迷っている学生も質問可能です。学科・学年を問わず広く開放されており、事前の予約は必要ありませんので、適宜利用してください。

なお、履修登録の方法や成績通知、教育実習の前提条件などの履修に関する質問は、教務課免許課程係（東棟1階）にご相談ください。

○開室時間：月～金 9：00～17：00
土 9：00～13：00

○場 所：中央棟1階

○個別面談：春学期 2018年4月5日（木）～2018年7月23日（月）
秋学期 2018年9月24日（月）～2019年1月18日（金）
及び2019年1月26日（土）

課程	曜日	面談時間	担当教員
教職	月	11：30～13：00	浅岡 千利世
	火	11：30～13：00	桑原 憲一
	水	11：30～13：00	岩崎 充益
	木	12：45～14：15	安井 一郎
	金	11：30～13：00	小島 優生
	土	11：30～13：00	及川 良一
司書・司書教諭	火	11：30～13：00	福田 求

注）担当教員の都合により、休講になる場合があります。相談室入口の掲示で確認してください。

教職課程 授業科目(2013～2018年度以降入学者)

《教職に関する科目》

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
1-1	06900	教職論	2	春	月4	桑原 憲一	E-206	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06902	教職論	2	春	火4	萩原 真美	E-202	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06901	教職論	2	秋	月5	桑原 憲一	E-206	—	養は自学科科目で履修	1
2-3	06904	教育原論	2	春	火3	萩原 真美	E-303	—	再履修者用 養は自学科科目で履修	2
1-1	06905	教育原論	2	秋	火3	萩原 真美	W-202	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	06906	教育原論	2	秋	火4	萩原 真美	W-202	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	06907	教育原論	2	秋	木3	川村 肇	E-202	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	19736	教育心理学	2	春	金1	田口 雅徳	A-207	—	養は自学科科目で履修	3
1-1	19844	教育心理学	2	春	金4	利根川 明子	A-306	—	養は自学科科目で履修	3
1-1	19738	教育心理学	2	秋	金1	田口 雅徳	A-207	—	養は自学科科目で履修	3
1-1	19737	教育心理学	2	秋	金4	利根川 明子	A-306	—	養は自学科科目で履修	3
2-3	06914	教育制度	2	春	月5	桑原 憲一	E-206	—	養は自学科科目で履修	4
2-3	06915	教育制度	2	春	水3	小島 優生	E-304	—	養は自学科科目で履修	4
2-3	06913	教育制度	2	秋	水3	小島 優生	E-304	—	養は自学科科目で履修	4
2-3	06919	教育課程論	2	春	火3	桑原 憲一	W-312	—	養は自学科科目で履修	5
2-3	06918	教育課程論	2	春	水2	安井 一郎	W-202	—	養は自学科科目で履修	5
2-3	06917	教育課程論	2	秋	火4	桑原 憲一	W-201	—	養は自学科科目で履修	5
3-5	06920	ドイツ語科教科教育法Ⅰ	2	春	火3	柿沼 義孝	E-307	—		6
3-5	06921	ドイツ語科教科教育法Ⅱ	2	秋	火3	柿沼 義孝	E-307	—		6
3-5	24067	ドイツ語科教科教育法Ⅲ	2	春	水2	上田 浩二	W-410	—		7
3-5	24068	ドイツ語科教科教育法Ⅳ	2	秋	水2	上田 浩二	W-410	—		7
3-5	22937	英語科教科教育法Ⅰ	2	春	水1	大澤 舞	E-310	—	再履修者用 外のみ履修可	8
2-3	14259	英語科教科教育法Ⅰ	2	秋	火1	羽山 恵	A-404	—	外のみ履修可	8
3-5	23702	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	月5	浅岡 千利世	A-401	20	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	9
3-5	23707	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	月5	浅岡 千利世	A-401			
3-5	23708	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	水1	J. J. ダゲン	E-314	20	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	9
3-5	23706	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	水1	J. J. ダゲン	E-314			
3-5	23703	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	木1	羽山 恵	A-407	20	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	9
3-5	23704	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	木1	羽山 恵	A-407			
3-5	23709	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	木5	大澤 舞	E-304	20	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	9
3-5	23705	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	木5	大澤 舞	E-304			
3-5	24081	英語科教科教育法Ⅳ	2	春	火3	羽山 恵	E-503	—	外のみ履修可	10

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	14024	英語科教科教育法Ⅰ	2	秋	金1	安間 一雄	E-203	—	養・経・法のみ履修可	8
3-5	22259	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	水2	安間 一雄	E-521	15	養・経・法のみ履修可先着順	9
3-5	14025	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	水2	臼井 芳子	W-317	15	養・経・法のみ履修可先着順	9
3-5	14026	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	水2	安間 一雄	E-521	15	養・経・法のみ履修可先着順	9
3-5	22260	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	水2	臼井 芳子	W-317	15	養・経・法のみ履修可先着順	9
3-5	24357	英語科教科教育法Ⅳ	2	春	水3	安間 一雄	W-412	—	養・経・法のみ履修可	10
3-5	06932	フランス語科教科教育法Ⅰ	2	春	木1	中村 公子	6-305	—		11
3-5	06933	フランス語科教科教育法Ⅱ	2	秋	木1	中村 公子	6-305	—		11
3-5	24070	フランス語科教科教育法Ⅲ	2	春	木2	中村 公子	6-305	—		12
3-5	24071	フランス語科教科教育法Ⅳ	2	秋	木2	中村 公子	6-305	—		12
2-3	06934	社会科教育法Ⅰ	2	春	月1	秋本 弘章	E-312	—		13
3-5	06935	社会科教育法Ⅱ	2	春	火2	秋本 弘章	E-312	—		14
3-5	06936	社会科教育法Ⅲ	2	秋	火2	秋本 弘章	E-312	—		14
2-3	06939	地理・歴史科教育法Ⅰ	2	秋	土1	鈴木 孝	W-314	—		15
3-5	06940	地理・歴史科教育法Ⅱ	2	秋	月1	秋本 弘章	E-312	—		16
3-5	06941	地理・歴史科教育法Ⅲ	2	春	月5	會田 康範	E-312	—		17
3-5	06937	公民科教育法Ⅰ	2	春	土4	及川 良一	W-204	—		18
3-5	06938	公民科教育法Ⅱ	2	秋	土4	及川 良一	W-204	—		18
3-5	06942	情報科教育法Ⅰ	2	春	木1	秋本 弘章	E-406	—		19
3-5	06943	情報科教育法Ⅱ	2	秋	木1	秋本 弘章	E-406	—		19
2-3	23626	道徳教育の理論と実践	2	春	月3	安井 一郎	W-202	—	中学校1種免許状は必修	20
2-3	23625	道徳教育の理論と実践	2	秋	水2	小島 優生	E-503	—	中学校1種免許状は必修	20
2-3	23624	道徳教育の理論と実践	2	春	木2	安井 一郎	E-304	—	中学校1種免許状は必修	20
2-3	19740	特別活動論	2	春	土3	及川 良一	W-204	—		21
2-3	19739	特別活動論	2	秋	月4	桑原 憲一	E-206	—		21
2-3	19741	特別活動論	2	秋	土3	及川 良一	W-204	—		21
2-3	06955	教育方法学	2	春	水1	安井 一郎	W-205	—		22
2-3	06954	教育方法学	2	秋	火4	竹内 久顕	W-204	—		22
2-3	06956	教育方法学	2	秋	火5	竹内 久顕	W-204	—		22
2-3	06958	生徒指導法	2	春	火4	桑原 憲一	W-201	—		23
2-3	06961	生徒指導法	2	春	土1	及川 良一	W-204	—		23
2-3	06960	生徒指導法	2	秋	土1	及川 良一	W-204	—		23
2-3	06963	学校カウンセリング	2	春	金2	山本 良	W-205	—	養は自学科科目で履修	24
2-3	06962	学校カウンセリング	2	秋	木4	鈴木 乙史	E-312	—	養は自学科科目で履修	24
2-3	06965	学校カウンセリング	2	秋	金2	山本 良	W-205	—	養は自学科科目で履修	24

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
3-6	24076	教育実習指導	2	春	水2	小島 優生	E-313	25	特段の事情がある者のみ履修可 免許課程係に申し出ること	25
3-6	24075	教育実習指導	2	秋	月2	安井 一郎	W-310	25	先着順	25
3-6	24074	教育実習指導	2	秋	月3	安井 一郎	W-315	25	先着順	25
3-6	24072	教育実習指導	2	秋	水1	岩崎 充益	W-309	25	先着順	25
3-6	24073	教育実習指導	2	秋	水4	岩崎 充益	W-309	25	先着順	25
3-6	24077	教育実習指導	2	秋	木2	川村 肇	W-307	25	先着順	25
3-6	24079	教育実習指導	2	秋	木3	小島 優生	E-313	25	先着順	25
4-7	07608	教育実習 I	2	春	—	教職課程	—	—		—
4-7	07609	教育実習 II	2	春	—	教職課程	—	—		—
4-8	14262	教職実践演習(中・高)	2	春	水2	小島 優生	E-313	25	特段の事情がある者のみ履修可 免許課程係に申し出ること	26
4-8	22250	教職実践演習(中・高)	2	秋	月2	秋本 弘章	E-509	25	先着順	26
4-8	22248	教職実践演習(中・高)	2	秋	月4	安井 一郎	W-310	25	先着順	26
4-8	22252	教職実践演習(中・高)	2	秋	火3	桑原 憲一	W-316	25	先着順	26
4-8	22249	教職実践演習(中・高)	2	秋	水2	安井 一郎	W-301	25	先着順	26
4-8	22251	教職実践演習(中・高)	2	秋	木2	川村 肇	W-307	25	先着順	26
4-8	22253	教職実践演習(中・高)	2	秋	木3	小島 優生	E-313	25	先着順	26

教職課程 授業科目(2013～2018年度以降入学者)

《教科又は教職に関する科目》

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜日	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
2-3	07016	学校経営と学校図書館	2	春	金2	井上 靖代	A-409	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	27
2-3	07017	学校図書館メディアの構成	2	春	金1	井上 靖代	A-308	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	28
2-3	07019	学習指導と学校図書館	2	秋	金1	井上 靖代	A-308	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	28
2-3	07020	読書と豊かな人間性	2	秋	金2	井上 靖代	A-409	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	29
2-3	07022	情報メディアの活用	2	秋	火4	福田 求	E-412	50	抽選科目 司書教諭課程登録者のみ履修可	30
2-3	07021	情報メディアの活用	2	秋	水2	福田 求	E-412	50	抽選科目 司書教諭課程登録者のみ履修可	30
2-3	22670	生涯学習概論	2	秋	火4	阪本 陽子	W-313	—	司書課程登録者のみ履修可	64
2-3	23626	道德教育の理論と実践	2	春	月3	安井 一郎	W-202	—	高校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 選択科目として適用	20
2-3	23625	道德教育の理論と実践	2	秋	水2	小島 優生	E-503	—	高校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 選択科目として適用	20
2-3	23624	道德教育の理論と実践	2	春	木2	安井 一郎	E-304	—	高校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 選択科目として適用	20
2-3	09109	介護ボランティアの理論と実践	2	春	木1	中條 共子	W-313	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用	31
2-3	06997	介護ボランティアの理論と実践	2	春	夏季 集中	保科 寧子	A-306	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用 春学期履修登録期間中に登録	32
2-3	12780	介護ボランティアの理論と実践	2	秋	月1	中條 共子	W-312	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用	31
2-3	12781	介護ボランティアの理論と実践	2	秋	月2	中條 共子	W-312	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用	31
3-5	22936	教科教育法特論Ⅰ(国環経用)	2	秋	水1	安井 一郎	W-311	—	環のみ履修可 環以外の学科生が履修希望の場 合は、要窓口相談	33

※ 抽選結果を確認すること。

教職課程 授業科目(2013～2018年度以降入学者)

《教科に関する科目》

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
1-1	06982	日本史概説Ⅰ	2	春	月4	會田 康範	E-312	—		34
1-1	06983	日本史概説Ⅱ	2	秋	月4	會田 康範	E-312	—		34
1-1	06984	外国史概説Ⅰ	2	秋	木5	兼田 信一郎	E-202	—		35
1-1	06985	外国史概説Ⅱ	2	春	木5	久慈 栄志	E-202	—		36
1-1	06986	地理学概説Ⅰ	2	春	火1	秋本 弘章	E-312	—		37
1-1	06987	地理学概説Ⅱ	2	秋	火1	秋本 弘章	E-312	—		37
1-1	06988	地誌学概説Ⅰ	2	春	水1	秋本 弘章	E-312	—		38
1-1	06989	地誌学概説Ⅱ	2	秋	水1	秋本 弘章	E-312	—		38
2-3	07023	法律学概説Ⅰ	2	秋	水1	湯川 益英	W-312	—	経・法は履修不可	39
2-3	07024	法律学概説Ⅱ	2	秋	水2	周 劍龍	W-312	—	経・法は履修不可	39
2-3	07025	政治学概説Ⅰ	2	春	火2	杉田 孝夫	E-416	—	経・法は履修不可	40
2-3	07026	政治学概説Ⅱ	2	秋	火2	杉田 孝夫	W-424	—	経・法は履修不可	40
1-1	25043	社会学概説Ⅰ	2	春	金4	前島 賢土	E-306	—	養・環・法は履修不可	41
1-1	25044	社会学概説Ⅱ	2	秋	金4	前島 賢土	E-306	—	養・環・法は履修不可	41
1-1	07027	社会学概説Ⅰ	2	春	土1	岡村 圭子	A-206	300	養は自学科科目で履修 経は履修不可	42
1-1	07028	社会学概説Ⅱ	2	秋	土1	岡村 圭子	A-206	300	養は自学科科目で履修 経は履修不可	42
2-3	07029	哲学概説Ⅰ	2	春	火5	河口 伸	W-314	—		43
2-3	07030	哲学概説Ⅱ	2	秋	火5	河口 伸	W-314	—		43
1-1	07031	倫理学概説Ⅰ	2	春	木3	林 永強	E-101	300	養は自学科科目で履修	44
1-1	07032	倫理学概説Ⅱ	2	秋	木3	林 永強	W-101	300	養は自学科科目で履修	44
2-3	07033	宗教学概説Ⅰ	2	春	木5	河口 伸	W-314	—		45
2-3	07034	宗教学概説Ⅱ	2	秋	木5	河口 伸	W-314	—		45
1-1	07104	心理学概説Ⅰ	2	春	金5	利根川 明子	A-207	300	養は自学科科目で履修	46
2-3	07105	心理学概説Ⅱ	2	秋	木4	田口 雅徳	W-202	100	養は自学科科目で履修	46
1-1	22810	東洋史Ⅰ(教職)	2	春	木3	熊谷 哲也	E-201	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履 修希望者は、免許課程係で別途 手続き。	47
2-3	22812	東洋史Ⅰ(教職)	2	春	木4	張 士陽	E-416	300		48
1-1	22811	東洋史Ⅱ(教職)	2	秋	木3	熊谷 哲也	E-201	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履 修希望者は、免許課程係で別途 手続き。	47
2-3	22813	東洋史Ⅱ(教職)	2	秋	木4	張 士陽	E-416	300		48
1-1	22808	西洋史Ⅰ(教職)	2	春	木3	佐藤 唯行	W-102	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履 修希望者は、免許課程係で別途 手続き。	49
1-1	22806	西洋史Ⅰ(教職)	2	春	木4	黒田 多美子	W-203	300		50
1-1	22809	西洋史Ⅱ(教職)	2	秋	木3	佐藤 唯行	W-102	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履 修希望者は、免許課程係で別途 手続き。	49
1-1	22807	西洋史Ⅱ(教職)	2	秋	木4	黒田 多美子	W-203	300		50

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
1-1	22814	地理学Ⅰ(教職)	2	春	木2	秋本 弘章	E-312	300	経は履修不可	51
1-1	22815	地理学Ⅱ(教職)	2	秋	木2	秋本 弘章	E-312	300	経は履修不可	51
3-5	21603	地誌学Ⅰ(教職)	2	春	月2	犬井 正	E-312	—	養・経は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履修希望者は、免許課程係で別途手続き。	52
3-5	18301	地誌学Ⅰ(教職)	2	春	月4	大竹 伸郎	W-101	—		53
3-5	21604	地誌学Ⅱ(教職)	2	秋	月2	犬井 正	E-312	—	養・経は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履修希望者は、免許課程係で別途手続き。	52
3-5	18302	地誌学Ⅱ(教職)	2	秋	月4	大竹 伸郎	W-101	—		53
1-1	21602	地誌学Ⅱ(教職)	2	秋	水3	浦部 浩之	W-206	—		54
1-1	22820	国際法Ⅰ(教職)	2	春	月3	一之瀬 高博	W-104	300	経・法は履修不可	55
1-1	22821	国際法Ⅱ(教職)	2	秋	月3	一之瀬 高博	W-104	300	経・法は履修不可	55
1-1	22825	英語通訳(教職)	2	春	火2	矢田 陽子	W-310	50	外は履修不可	56
1-1	22826	英語通訳(教職)	2	秋	火2	矢田 陽子	6-204	50	外は履修不可	56
2-3	—	英語圏の社会と思想a(教職)	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—
2-3	—	英語圏の社会と思想b(教職)	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—
1-1	22837	社会経済史a(教職)	2	春	水2	新井 孝重	W-206	300	養・経は履修不可	57
1-1	22838	社会経済史b(教職)	2	秋	水2	新井 孝重	W-206	300	養・経は履修不可	57
1-1	22839	社会思想史a(教職)	2	春	火4	市川 達人	E-101	300	養・経は履修不可	58
1-1	22840	社会思想史b(教職)	2	秋	火4	市川 達人	E-101	300	養・経は履修不可	58
2-3	22845	外国経済史a(教職)	2	春	火1	御園生 眞	E-314	350	養・経・総は履修不可	59
2-3	22846	外国経済史b(教職)	2	秋	火1	御園生 眞	E-314	350	養・経・総は履修不可	59
2-3	—	日本思想史a(教職)	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—
2-3	—	日本思想史b(教職)	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—
3-5	22843	経済学史a(教職)	2	春	木2	黒木 亮	E-308	350	養・経・総は履修不可	60
3-5	22844	経済学史b(教職)	2	秋	木2	黒木 亮	E-308	350	養・経・総は履修不可	60

※ 抽選結果を確認すること。

2013～2018年度入学者対象 教育職員免許法施行規則 第66条の6に定める科目

「教職に関する科目」「教科又は教職に関する科目」「教科に関する科目」のほかに、文部科学省が別に定める科目（教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目）の単位を修得しなければなりません。
所属学科毎に履修科目が異なるため、「履修の手引き」免許課程の当該ページを参照し、単位修得してください。

免許法施行規則に定める科目	所属	科目群	科目名	単位数	備考
日本国憲法	外国語学部 国際教養学部 経済学部	各学部共通科目	日本国憲法	2単位	下表の時間割から、いずれか1科目を登録すること。
	法学部	学部専門科目	憲法入門	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
体育	全学部	各学部共通科目	スポーツ・レクリエーション	1単位×2	自学科時間割冊子の全学共通授業科目「スポーツ・レクリエーション」を参照の上、登録すること。
外国語コミュニケーション	全学部	所属によって異なる	「履修の手引」掲載科目	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
情報機器の操作	外国語学部 国際教養学部 経済学部	所属によって異なる	「履修の手引」掲載科目	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
	法学部	基礎科目	社会科学情報検索法	2単位×1	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
		各学部共通科目	コンピュータ入門a コンピュータ入門b		下表の時間割から、いずれか1科目を登録すること。

学年-学期	時間割コード	科目名	単位数	開講学期	曜時	担当教員	教室	定員※1	備考	ページ
1-1	22823	日本国憲法(教職)	2	春	火2	加藤 一彦	E-313	300	法は履修不可	61
1-1	22822	日本国憲法(教職)	2	秋	火1	L. ペドリサ	E-101	300	法は履修不可	62
1-1	22824	日本国憲法(教職)	2	秋	火2	加藤 一彦	E-313	300	法は履修不可	61
1-1	06968	コンピュータ入門a(教職)	2	春	火3	久東 義典	E-407	49	外・養・経は履修不可	63
1-1	06969	コンピュータ入門a(教職)	2	春	金3	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	63
1-1	06973	コンピュータ入門a(教職)	2	春	金3	杉村 和枝	E-405	60	外・養・経は履修不可	63
1-1	06971	コンピュータ入門a(教職)	2	春	金5	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	63
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	火3	久東 義典	E-407	49	外・養・経は履修不可	63
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	金3	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	63
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	金3	杉村 和枝	E-405	60	外・養・経は履修不可	63
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	金5	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	63

※1 抽選結果を確認すること。

※2 秋学期履修希望者は、履修登録期間内に教務課法学部係窓口にて別途手続(整理券必要)。

司書課程 授業科目

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜日	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	22670	生涯学習概論	2	秋	火4	阪本 陽子	W-313	—		64
2-3	22671	図書館概論	2	春	木4	井上 靖代	A-306	—		65
3-5	22951	図書館情報技術論	2	秋	月3	福田 求	E-412	15	先着順	66
3-5	22952	図書館情報技術論	2	秋	月4	福田 求	E-412	15	先着順	66
3-5	22953	図書館情報技術論	2	秋	火2	堀江 郁美	E-401	15	先着順	67
2-3	22672	図書館制度・経営論	2	秋	木4	井上 靖代	A-306	—		68
2-3	22673	図書館サービス概論	2	春	木2	井上 靖代	A-308	—		69
3-5	22954	情報サービス論	2	春	月3	福田 求	E-412	50	先着順	70
3-5	22955	情報サービス論	2	春	月4	福田 求	E-412	50	先着順	70
2-3	22677	児童サービス論	2	秋	木2	井上 靖代	A-308	—		71
3-5	22956	情報サービス演習(前半)	1	春	水3	高田 淳子	A-201	50	先着順 春・秋セット履修	72
3-5	22957	情報サービス演習(後半)	1	秋	水3	高田 淳子	A-201			
3-5	22958	情報サービス演習(前半)	1	春	水4	高田 淳子	A-201	50	先着順 春・秋セット履修	72
3-5	22959	情報サービス演習(後半)	1	秋	水4	高田 淳子	A-201			
2-3	22674	図書館情報資源概論	2	春	木1	井上 靖代	A-308	—		73
2-3	22960	情報資源組織論	2	春	火5	小黒 浩司	W-204	—		74
3-5	22963	情報資源組織演習(前半)	1	春	月1	小黒 浩司	A-308	25	先着順 春・秋セット履修	75
3-5	22962	情報資源組織演習(後半)	1	秋	月1	小黒 浩司	A-308			
3-5	22961	情報資源組織演習(前半)	1	春	月2	小黒 浩司	A-308	25	先着順 春・秋セット履修	75
3-5	22964	情報資源組織演習(後半)	1	秋	月2	小黒 浩司	A-308			
3-5	22675	図書館基礎特論	2	秋	水2	井上 靖代	W-307	—		76
3-5	22676	図書館サービス特論	2	秋	木1	井上 靖代	A-405	—		77
2-3	—	図書館情報資源特論	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—
2-3	22678	図書・図書館史	2	春	火4	小黒 浩司	W-204	—		78
2-3	—	図書館施設論	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—
4-7	—	図書館実習	2	—	—	2018年度不開講	—	—		—

司書教諭課程 授業科目

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜日	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	07016	学校経営と学校図書館	2	春	金2	井上 靖代	A-409	—		27
2-3	07017	学校図書館メディアの構成	2	春	金1	井上 靖代	A-308	—		28
2-3	07019	学習指導と学校図書館	2	秋	金1	井上 靖代	A-308	—		28
2-3	07020	読書と豊かな人間性	2	秋	金2	井上 靖代	A-409	—		29
2-3	07022	情報メディアの活用	2	秋	火4	福田 求	E-412	50	抽選※	30
2-3	07021	情報メディアの活用	2	秋	水2	福田 求	E-412	50	抽選※	30

※抽選結果を確認すること。

03年度以降	教職論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>教職の意義、教員の資質能力、職務内容などの教職に関する概括的知識を習得し、教職への意欲向上と心構えの在り方を理解する。</p> <p>【講義概要】</p> <p>本講義では、グループ討議や研究協議などを通して教職の意義、教員の身分と服務、職務の内容、職責や職務遂行に必要とされる資質などについて主体的な理解を深めていく。教員が直面している現代的諸課題の対応についても取り組む。</p>		<p>第1回：教員の職種・職名とチーム学校</p> <p>第2回：期待される教師像と目指す教師像</p> <p>第3回：児童・生徒の成長と教員の役割</p> <p>第4回：教員の資質と能力</p> <p>第5回：教員養成と教員免許</p> <p>第6回：教員の任用と教育委員会</p> <p>第7回：教員の身分と服務</p> <p>第8回：教員の職務(1)学校と教員の一日</p> <p>第9回：教員の職務(2)学校運営と校務分掌</p> <p>第10回：教員の職務(3)学習指導と生徒指導</p> <p>第11回：教員の研修(1)法定研修と教員のキャリア</p> <p>第12回：教員の研修(2)自主的研修の活用</p> <p>第13回：進路選択の問題を考える(1)教職の特質</p> <p>第14回：進路選択の問題を考える(2)教育ボランティアの体験</p> <p>第15回：まとめ</p>	
到達目標	教職の意義、職務の内容など、教職に関する概括的知識を習得し、教職に就く際の心構えをもち、これを示すことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	(事前学修)は提示された資料、テキストを読む。 (事後学修)は授業レポートなど。		
テキスト	講義毎に配布する資料		
参考文献	文部科学省著『中学校学習指導要領解説総則編』(平成20年9月)		
評価方法	課題レポート(30%)、グループ討議(20%)、定期試験(50%)により総合的に評価		

03年度以降	教職論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育原論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育原論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 学校現場の問題、子どもの権利条約と教育基本法、戦後教育改革の歴史、発達と教育の各テーマから近代教育の理念と本質に迫る。		第1回：学校現場と指導のあり方（1）「荒れ」を考える 第2回：学校現場と指導のあり方（2）発達障害を考える 第3回：学校現場と指導のあり方（3）体罰を考える・近代教育の本質論 第4回：子どもの権利条約の概略（1）ルソー以来の教育思想と子ども論 第5回：子どもの権利条約の概略（2）学習権を考える 第6回：子どもの権利条約の概略（3）教育の目的を考える 第7回：教育基本法の概略（1）法改正のポイント 第8回：教育基本法の概略（2）教育の内的事項と外的事項 第9回：教育基本法の概略（3）能力と発達について・学校の役割 第10回：戦後教育の改革の歴史（1）戦後直後の改革から高度経済成長期の改革まで 第11回：戦後教育の改革の歴史（2）70年・80年代の教育改革 第12回：戦後教育の改革の歴史（3）90年代以降の教育改革 第13回：発達と教育を考える（1）発達の最近接領域について 第14回：発達と教育を考える（2）精神間機能から精神内機能へ 第15回：まとめ	
到達目標	教育の歴史や目的、内容、方法、制度について理解し、自身の学校観や現在までの教育改革について理論的に分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	（事前学修）提示された資料を事前に読んでくること。 （事後学修）講義を振り返り授業レポートを作成すること。		
テキスト	『ポケット版子どもの権利ノート』（子どもの権利・教育・文化 全国センター）		
参考文献	授業中に適宜指示、紹介する。		
評価方法	授業中に適宜課す小レポート（40%）、最終レポート（60%）		

13年度以降	教育心理学	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>教育心理学は「教育評価」、「学習の過程」、「発達」、「人格・適応」という4領域に大別される。そこで、これら4領域を中心に講義をおこなっていく。</p>		<p>第1回：教育心理学の領域とその歴史</p> <p>第2回：教育測定と教育評価</p> <p>第3回：教育評価の方法</p> <p>第4回：評価の観点と学力問題</p> <p>第5回：学習の原理</p> <p>第6回：学習への動機付け</p> <p>第7回：学習意欲と原因帰属</p> <p>第8回：学習意欲と目標理論</p> <p>第9回：学習意欲と教師の役割</p> <p>第10回：成熟と学習（発達の規定因）</p> <p>第11回：発達段階と発達理論</p> <p>第12回：発達課題と人格的発達</p> <p>第13回：軽度発達障害の理解と支援（LD, ADHD）</p> <p>第14回：軽度発達障害の理解と支援（自閉症スペクトラム）</p> <p>第15回：学校適応と心理アセスメント</p>	
到達目標	子どもの発達や学習、学校適応に関わる心理学の基礎的知識を理解し、学校現場において生じる諸問題に対して心理学的視点で検討のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画に示された各課の内容を参考文献をもとに事前に学修する。事後にあつては授業内容を参考文献をもとにまとめておく。また、各教員が授業で事前・事後学修として個別に指示した課題も含まれる。		
テキスト	テキストは使用しない。必要な資料は配付する。		
参考文献	授業のなかで関連文献を紹介する。		
評価方法	試験（80％）および課題レポート（20％）の成績をもとに評価をおこなう。		

13年度以降	教育心理学	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育制度	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>本講義は、教育に関する社会的事項、教育に関する制度的事項、学校と地域の連携、学校安全への対応を含むものである。</p> <p>現代の公教育制度の意義や原理・構造について法的・制度的な知識を身につけるとともに、現在進められている改革の背景にある学校や子どもの生活の変化などの課題を理解し、制度をめぐる諸課題と結びつけて考えることができる講義とする。</p> <p>具体的には授業前半は知識のための講義とし、後半は改革を検討し討論・発表の時間とする。またリアクションペーパーを使用し質問や討論を経ての意見などを集め、次週にレビューをする。</p>		<p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：教育を受ける権利と権利保障</p> <p>第3回：学校教育制度の変遷</p> <p>第4回：公教育と私教育</p> <p>第5回：教育行政システム（国・地方）と教育委員会</p> <p>第6回：教育行財政</p> <p>第7回：教育課程行政</p> <p>第8回：諸外国の教育制度と学校</p> <p>第9回：家庭教育の現在と教育行政</p> <p>第10回：社会教育行政</p> <p>第11回：学校の危機管理と安全</p> <p>第12回：教育改革（1）学校評価・人事評価</p> <p>第13回：教育改革（2）学校選択制・小中一貫教育</p> <p>第14回：教育改革（3）開かれた学校づくりと学校評議員・学校運営委員会</p> <p>第15回：教育改革の現状と課題</p>	
到達目標	日本の教育制度に関する基礎的知識、および、教育制度の理論と構造を理解し、よりよい教育制度の在り方について諸外国や歴史との比較も行いながら分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	（事前学修）提示された資料を事前に読んでくること。 （事後学修）講義を振り返り授業レポートを作成すること。		
テキスト	藤本典裕・勝野正章編『改訂新版 教育行政学』（学文社）		
参考文献	『教育小六法』		
評価方法	定期試験 60%、リアクションペーパーを 30%、講義内の討論・発言等を 10%として評価する。		

03年度以降	教育制度	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>（半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ）</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育課程論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>学校において展開されている毎日の授業や諸活動は、一定の教育目的を達成するために編成される教育内容に関する計画である教育課程に基づいて行われている。いわば、教育課程は、学校教育における中核としての役割を果たしている。本講では、以上のような観点から、教育課程の編成と評価という問題を中心に、わが国の戦後教育の歩みと教育課程の変遷、新教育課程の分析と課題の検討、今日の学力問題等の問題を取り上げ、各種資料、VTR教材などを用いながら、多面的に検討を加え、教育課程研究に関する理解を深めていく。</p>		<p>第1回：教育課程と学力問題</p> <p>第2回：教育課程とは何か</p> <p>第3回：日本の教育課程(1)小・中・高の教育課程</p> <p>第4回：日本の教育課程(2)教育課程に関する法規</p> <p>第5回：教育課程編成の理論と方法(1)教育課程の分類</p> <p>第6回：教育課程編成の理論と方法(2)経験主義カリキュラムと系統主義カリキュラム</p> <p>第7回：教育課程編成の理論と方法(3)カリキュラム構成法</p> <p>第8回：学習指導要領と教育課程(1)昭和20年代</p> <p>第9回：学習指導要領と教育課程(2)昭和30-40年代</p> <p>第10回：学習指導要領と教育課程(3)昭和50-60年代</p> <p>第11回：学習指導要領と教育課程(4)平成1-10年代</p> <p>第12回：学習指導要領と教育課程(5)現行学習指導要領</p> <p>第13回：次期学習指導要領の検討(1)改訂の要点</p> <p>第14回：次期学習指導要領の検討(2)カリキュラム・マネジメント</p> <p>第15回：教育課程と評価</p>	
到達目標	教育課程と学習指導要領の歴史的変遷を踏まえ、教育課程の全体構造や具体的編成に関する基礎的理論を理解し、より良い教育課程の在り方や編成について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説総則編』『高等学校学習指導要領』『同解説総則編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点60点以上合格。		

03年度以降	教育課程論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅰ	担当者	柿沼 義孝
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>ドイツ語の基礎知識の確認と補強、および外国語教授法の知識と教案の作成などの実務的な技能の獲得を目標とする。基礎知識に関しては、学科基礎科目において習得してきた文法に関する知識のみならず、ドイツ語の授業を行うのに必要だと思われるドイツ語に関わる一般的知識をも含めて確認・補強をする。外国語教授法に関しては、代表的な教授法に関して受講者に調査・報告をしてもらい、その長所・短所を議論する。また教案や試験問題なども実際に作成してみたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ドイツ語基礎知識確認試験 3. 試験の解答と解説による基礎知識の確認1（文法事項中心） 4. 試験の解答と解説による基礎知識の確認2（書き換え問題中心） 5. 試験の解答と解説による基礎知識の確認3（独作文中心） 6. 教壇実習の割り振りについて（基礎知識の一番弱い項目を中心に） 7. 代表的な外国語教授法について1（文法訳読法、オーディオメソッド等）（発表形式） 8. 代表的な外国語教授法について2（コミュニカティブ、比較文化的AP）（発表形式） 9. 教授法についてのディスカッション 10. 教壇実習（アルファベットと発音を中心に） 11. 教壇実習（動詞の人称変化を中心に） 12. 教壇実習（格変化を中心に） 13. 教壇実習（人称代名詞の格変化を中心に） 14. 教壇実習（前置詞を中心に） 15. 総括 	
到達目標	ドイツ語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、ドイツ語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	教授法の理論とドイツ語文法について学修事項の事前学修と教壇実習で提示された注意事項の再検討。		
テキスト	特になし。		
参考文献	外国語教育・理論から実践まで（松野和彦 著、吉島茂朝日出版社）、外国語の学習、教授、評価ヨーロッパ共通参照枠（吉島茂、大橋理枝 訳・編、朝日出版社）、ドイツ語教授法・科学的基盤作りと実戦に向けての課題（吉島茂、境一三 著、三修社）、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領		
評価方法	ドイツ語文法と教授法の基礎知識に関しては、授業内の筆記試験および定期試験（50%）、教授法に関する発表（30%）教壇実習への取り組み（20%）		

03年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅱ	担当者	柿沼 義孝
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>ドイツ語の基礎知識の確認と補強、および外国語教授法の知識と教案の作成などの実務的な技能の獲得を目標とする。</p> <p>ドイツ語科教育法Ⅱにおいては、複数の模擬授業を通じて、ドイツ語を教えるという経験の獲得を目指したい。模擬授業の際には担当者の授業をビデオ撮影し、担当者自らが自分の授業を振り返り、さらに参加者全員で講評し合うことができるようにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ドイツ語基礎知識確認試験 3. 教壇実習の割り振りについて 4. 教壇実習（動詞の人称変化を中心に） 5. 教壇実習（格変化を中心に） 6. 教壇実習（3基本形を中心に） 7. 教壇実習（受動態を中心に） 8. 教壇実習（接続法を中心に） 9. 教壇総括（ビデオを使つての反省会） 10. 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心）グループA 11. 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心）グループB 12. 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心）グループC 13. 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心）グループD 14. 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心）グループE 15. 総括 	
到達目標	ドイツ語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、ドイツ語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	教授法の理論とドイツ語文法について学修事項の事前学修と教壇実習で提示された注意事項の再検討。		
テキスト	特になし。		
参考文献	外国語教育・理論から実践まで（松野和彦 著、吉島茂朝日出版社）、外国語の学習、教授、評価ヨーロッパ共通参照枠（吉島茂、大橋理枝 訳・編、朝日出版社）、ドイツ語教授法・科学的基盤作りと実戦に向けての課題（吉島茂、境一三 著、三修社）、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領		
評価方法	ドイツ語文法と教授法の基礎知識に関しては、授業内および定期試験の筆記試験（50%）、教壇実習への取り組み（50%）		

13年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅲ	担当者	上田 浩二
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>外国語学習における「学習ストラテジー」を全体の大きなテーマとする。ドイツ語教育を中心に、外国語教育や言語教育について「学ぶ側」と「教える側」の双方からアプローチすることにより、より効果的な外国語学習とは何かを考え模索することを目標とする。</p> <p>具体的には、テキストを毎回配布しそれを訳してもらい、その結果を全員でチェックしながら議論し、そのなかで様々な学習上の問題点を考えていく。</p> <p>【授業の概要】</p> <p>とりわけ翻訳に焦点を当て、単なる訳読と翻訳の相違を意識しながら、実践的な翻訳演習を行うとともに、それが外国語教育にどう生かせるかを考える。</p>		<p>第1回：翻訳するとはどういうことか、それが外国語学習にどう生かせるかを考える</p> <p>第2回：日本に関するテーマに基づく実践的演習（1）（社会）</p> <p>第3回：日本に関するテーマに基づく実践的演習（2）（歴史）</p> <p>第4回：日本に関するテーマに基づく実践的演習（3）（文化）</p> <p>第5回：ドイツに関するテーマに基づく実践的演習（1）（社会）</p> <p>第6回：ドイツに関するテーマに基づく実践的演習（2）（歴史）</p> <p>第7回：ドイツに関するテーマに基づく実践的演習（3）（文化）</p> <p>第8回：ドイツに関するテーマに基づく実践的演習（4）（ヨーロッパの中のドイツ）</p> <p>第9回：国際的なテーマに基づく実践的演習（1）（社会）</p> <p>第10回：国際的なテーマに基づく実践的演習（2）（歴史）</p> <p>第11回：国際的なテーマに基づく実践的演習（3）（文化）</p> <p>第12回：国際的なテーマに基づく実践的演習（4）（日独交流）</p> <p>第13回：アクチュアルなテーマに基づく実践的演習（1）（環境・エネルギー問題）</p> <p>第14回：アクチュアルなテーマに基づく実践的演習（2）（移民・多文化共生）</p> <p>第15回：まとめ</p>	
到達目標	ドイツ語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、より実践的な教授法、指導技術、教材開発力を習得し、ドイツ語科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎週、翻訳課題を渡し授業の前日夕方までに訳文を作成しメールで提出する。		
テキスト	毎回、課題を出す。		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業中の作業や発表、および提出してもらう課題への取り組みなどをもとに総合的に評価する。（100%）試験は行わない。		

13年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅳ	担当者	上田 浩二
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>ドイツ語教育を中心に、外国語教育や言語教育について「学ぶ側」と「教える側」の双方からアプローチすることにより、より効果的な外国語学習とは何かを考え模索することを目標とする。</p> <p>外国語学習における「学習ストラテジー」を全体の大きなテーマとする。</p> <p>【授業の概要】</p> <p>ドイツ語を学ぶことの意味や目的、実際の教育／学習方法について、単に理論や方法論を知るだけでなく、演習に参加する学生の外国語学習のプロセスを振り返ったり、それに関する意見交換をしながら、演習形式で学ぶ。</p> <p>また、具体的な練習、たとえば翻訳者や通訳者がプロになるための過程で行う練習法などを、実際に教室で行ってみて、それぞれの練習法がどのようにドイツ語教育に役立つかを体験してもらう。</p>		<p>第1回：導入</p> <p>第2回：これまで経験してきた外国語の学び方</p> <p>第3回：外国語教育に求められるものと目標設定</p> <p>第4回：ドイツ語の「特殊性」（その歴史的な回顧と現状）</p> <p>第5回：ドイツ語の学習法（主たる学習法のタイプ）</p> <p>第6回：聞き取りの練習（1）（シャドウイングによるアプローチ）</p> <p>第7回：聞き取りの練習（2）（その他の練習法）</p> <p>第8回：テキストの展開に関する実際練習（1）（アンティシペーションの役割）</p> <p>第9回：テキストの展開に関する実際練習（2）（各種の練習法の紹介）</p> <p>第10回：テキストの展開に関する実際練習（3）（各練習法の実際練習）</p> <p>第11回：テキストの展開に関する実際練習（4）（各種練習法の評価）</p> <p>第12回：その他の実際練習（1）（背景知識としての社会的テーマ）</p> <p>第13回：その他の実際練習（2）（背景知識としての歴史的テーマ）</p> <p>第14回：その他の実際練習（3）（背景知識としての世界的テーマ）</p> <p>第15回：まとめ</p>	
到達目標	ドイツ語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、学習目標に適合する教材と指導案を作成できる力、授業における基礎的な指導技術を習得し、さらに、生徒の成績評価や自他の授業評価ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	頻繁に課題を出すので、それを口頭ないしペーパーで提出してもらう。こうすることで、調べた結果や自分の考えたことを整理する。		
テキスト	特になし。		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業中の作業や発表、および提出してもらう課題への取り組みなどをもとに総合的に評価する。（100%）試験は行わない。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後 学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	英語科教科教育法 I	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】 日本における英語教育の歴史的変遷と課題を理解し、第二言語習得に関する理論や研究も参考にしつつ、現代により合致した教育方法への応用を検討する。また日本の中学校及び高等学校の英語教育の基軸となる学習指導要領や外国語(英語)の学習・指導に関する知識について理解を深め、教科書や教材の分析を通して授業指導の基礎を身につける。学習指導要領の3つの資質・能力を理解し、学習到達目標の設定、年間指導計画、単元計画、各授業の指導計画について理解する。</p>		第1回：オリエンテーション 第2回：第二言語・外国語習得のプロセスに関する基礎的理論 第3回：中学校 外国語(英語)の学習指導要領 第4回：中学校 外国語(英語)の教材・教科書と分析 第5回：高校 外国語(英語)の学習指導要領 第6回：高校 外国語(英語)の教材・教科書と分析 第7回：小学校 外国語活動・外国語の学習指導要領や教材 第8回：小・中・高を通じた英語教育の在り方 第9回：学習到達目標と指導計画 第10回：教案の書き方と創意工夫 第11回：テストに関する理論と実践 第12回：評価に関する理論と実践 第13回：ティームティーチングの理論と実践 第14回：英語教員の資質向上と成長 第15回：まとめ	
到達目標	英語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、英語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後 学修の内容	各担当教員が指示する。		
テキスト	小学校・中学校学習指導要領(平成29年3月告示 文部科学省) 高等学校学習指導要領(平成21年3月告示 文部科学省) 小学校・中学校学習指導要領解説(平成29年7月 文部科学省) 高等学校学習指導要領解説 外国語編(平成21年12月 文部科学省)		
参考文献	授業中に適宜資料を配布する。		
評価方法	課題レポート(30%)、小テスト(30%)、定期試験(40%)		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅱ	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 学習到達目標に基づいた指導計画・授業の組み方、各領域における指導法についての知識と技能、及び各領域別の到達目標の設定についてさらに理解を深めるとともに、授業観察、指導案の作成、模擬授業の実践、講評などによって授業実践力の基礎を身につける。		第1回：オリエンテーション 第2回：中学校の授業 ビデオによる観察と討論 第3回：聞くことの指導 第4回：読むことの指導 第5回：話すこと（やり取り・発表）の指導 第6回：書くことの指導 第7回：英語の音声的な特徴に関する指導 第8回：文字・語彙・表現に関する指導 第9回：中学校の学習到達目標に基づく授業の組み立てと指導案作成 第10回：模擬授業と振り返り グループ1 第11回：模擬授業と振り返り グループ2 第12回：模擬授業と振り返り グループ3 第13回：模擬授業と振り返り グループ4 第14回：模擬授業と振り返り グループ5 第15回：まとめ	
到達目標	英語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、学習目標に適合する教材と指導案を作成できる力、授業における基礎的な指導技術を習得し、さらに、生徒の成績評価や自他の授業評価ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	各担当教員が指示する。		
テキスト	文部科学省『小学校・中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』『小学校・中学校学習指導要領解説』『高等学校学習指導要領解説 外国語編』授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	JACET 教育問題研究会『行動志向の英語科教育の基礎と実践－教師は成長する』（三修社）		
評価方法	指導案（20%）、模擬授業（40%）、自己評価エッセイ（20%）、課題レポート（20%）		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅲ	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 学習到達目標に基づいた指導計画・授業の組み方についてさらに理解を深め、領域統合型言語活動・文法指導とその評価についての知識と技能を深めるとともに授業観察、指導案の作成、模擬授業の実践、講評などによって授業実践力の基礎を身につける。		第1回：オリエンテーション 第2回：高校の授業 ビデオによる観察と討論 第3回：領域統合型の言語活動の指導：2技能の統合とインタラクション 第4回：領域統合型の言語活動の指導：3技能以上の統合と協働学習 第5回：文法に関する指導：PPPによる指導 第6回：文法に関する指導：コミュニケーション・タスクによる指導 第7回：教材研究・ICT等の活用と指導 第8回：英語で行うインタラクションと授業 第9回：高等学校の学習到達目標に基づく授業の組み立てと指導案作成 第10回：模擬授業と振り返り グループ1 第11回：模擬授業と振り返り グループ2 第12回：模擬授業と振り返り グループ3 第13回：模擬授業と振り返り グループ4 第14回：模擬授業と振り返り グループ5 第15回：まとめ	
到達目標	英語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、より実践的な教授法、指導技術、教材開発力を習得し、英語科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	各担当教員が指示する。		
テキスト	文部科学省『小学校・中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』『小学校・中学校学習指導要領解説』『高等学校学習指導要領解説 外国語編』授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	望月正道他著『英語で教える英語の授業－その進め方・考え方』（大修館書店）		
評価方法	指導案（20%）、模擬授業（40%）、自己評価エッセイ（20%）、課題レポート（20%）		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅳ	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>年間を通じた学習指導到達目標に基づく評価の在り方や観点別学習状況の評価に基づく各単元における評価規準の設定、評定への総括の仕方、言語の領域別にみる能力の測定と評価方法など、評価についてさらに理解を深める。また新学習指導要領で強調されている主体的・対話的学習や英語教育における異文化理解に関する指導、言語技能とコンテンツを並行して学習するコンテンツ重視の授業法など、グローバル社会においてより重要となる英語教育の新しいアプローチについても理解を深める。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：観点別評価と評価規準 第3回：理解の能力の評価 第4回：「話す（やり取り・発表）」能力の測定とパフォーマンス評価 第5回：「書く」能力の測定とパフォーマンス評価 第6回：Can-do listと学習者の自己評価 第7回：生徒の習熟度や特性に応じた指導 第8回：主体的・対話的授業の指導と授業体験 第9回：主体的・対話的授業の授業実践と振り返り 第10回：異文化理解に関する指導と授業体験 第11回：異文化理解に関する授業実践と振り返り 第12回：コンテンツ重視の指導法と授業体験 第13回：コンテンツ重視の授業実践と振り返り 第14回：生涯学習としての英語教育 第15回：まとめ</p>	
到達目標	英語教育に関する理論や指導技術についてさらに理解を深め、学習指導要領に基づく英語教育に関する実践的指導力、英語科教員としての高い資質・能力を習得し、より質の高い英語科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	各担当教員が指示する。		
テキスト	文部科学省『小学校・中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』『小学校・中学校学習指導要領解説』『高等学校学習指導要領解説 外国語編』授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	望月昭彦他編著『英語4技能評価の理論と実践: CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』（大修館書店）		
評価方法	模擬授業（40%）、自己評価レポート（20%）、指導案（20%）、課題レポート（20%）		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	フランス語科教科教育法Ⅰ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>外国語学習における「良い学習者」を育成するための指導方を考え、「聞く」「話す」能力を身につけるための学習活動を組み立てる方法を学ぶ。視聴覚教材や音声教材の効果的な使用法と発音記号を用いた発音の指導法を理解し、グループ作業や発表を通して実践する。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：外国語学習 「学ぶ立場」と「教える立場」 第3回：「良い学習者」を育てるために 第4回：聞くことの指導 第5回：発音記号と発音の指導 第6回：音声教材と視聴覚教材を使用した指導 第7回：聴解練習の指導 第8回：聞くことを取り入れた学習活動（グループ作業・発表） 第9回：話すことの指導 第10回：やりとりの指導 第11回：コミュニケーション・ストラテジーの指導・困った時の対処法・ 第12回：簡単なスピーチと相手に伝わる話し方の指導 第13回：話すことを取り入れた学習活動（グループで準備） 第14回：話すことを取り入れた学習活動の発表と実践（グループ発表） 第15回：まとめ</p>	
到達目標	フランス語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、フランス語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	外国語学修について、学修者の立場からこれまで実践してきた学修方法を振り返り、それらの学修について、教える立場からも学修活動それぞれの目的や方法、効果などを考えまとめる。その上で何が効果的な学修に結びつくのかを考察しまとめる。		
テキスト	中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）高等学校学習指導要領（平成21年3月告示 文部科学省）フランス語をどのように教えるか（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon (DISSON, Agnès, Presses Universitaires d' Osaka)		
評価方法	授業中のグループ作業と発表（30%）、課題・授業への取り組み（20%）、定期試験（50%）		

03年度以降	フランス語科教科教育法Ⅱ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>フランス語の辞書の種類とその使い方を理解し、辞書の効果的な活用法について「読むこと・書くこと」の指導法を通して理解を深める。能力を身につけるための学習活動を組み立てる方法を学ぶ。グループ作業や発表を通して実践する。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：フランス語の辞書の種類と特徴 第3回：辞書の活用法の指導 第4回：読むことの指導 第5回：仏和辞典を使って簡単な読み物を読む指導 第6回：文字・語彙・表現に関する指導 第7回：文法と読解の指導 第8回：読むことを取り入れた学習活動（グループ作業・発表） 第9回：書くことの指導 第10回：和仏辞典の使い方と簡単な文の作成 第11回：フランス語で表現するための指導 第12回：和文仏訳と自由作文の指導 第13回：効果的な作文訂正の方法 第14回：書くことを取り入れた学習活動（グループ作業・発表） 第15回：まとめ</p>	
到達目標	フランス語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、学習目標に適合する教材と指導案を作成できる力、授業における基礎的な指導技術を習得し、さらに、生徒の成績評価や自他の授業評価ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	外国語学修について、学修者の立場からこれまで実践してきた学修方法を振り返り、それらの学修について、教える立場からも学修活動それぞれの目的や方法、効果などを考えまとめる。その上で何が効果的な学修に結びつくのかを考察しまとめる。		
テキスト	中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）高等学校学習指導要領（平成21年3月告示 文部科学省）フランス語をどのように教えるか（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon (DISSON, Agnès, Presses Universitaires d' Osaka)		
評価方法	授業中のグループ作業と発表（30%）、課題・授業への取り組み（20%）、定期試験（50%）		

13年度以降	フランス語科教科教育法Ⅲ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
フランス語教育に携わっていく上で必要な言語教育理論や実践方法について、基礎知識を習得する。フランス語教育の歴史の変遷及び日本におけるフランス語教育の変遷を理解し、中学校・高校の外国語（フランス語）の学習指導要領と、日本における中学校・高校でのフランス語教育の現状や問題点について理解を深める。教材分析や教案作成などの課題に取り組みながら、学習指導要領に示されている四つの言語活動を取り入れた指導計画について理解する。		第1回：オリエンテーション 第2回：中学校・高校 外国語（フランス語）の学習指導要領 第3回：コースデザイン、カリキュラムデザイン、シラバスデザイン 第4回：教案の書き方（個人での教案作成作業） 第5回：言語教育の方法の変遷 - 古代から現代まで - 第6回：フランス語教授法の変遷 - 文法訳読法から SGAV（視聴覚方式全体構造教授法）へ - 第7回：フランス語教授法の変遷 - SGAV の反省からコミュニケーション・アプローチへ - 第8回：様々な教授法から考える効果的な教授法 （ディスカッションとグループ作業） 第9回：日本におけるフランス語教育の変遷 第10回：中学校・高校におけるフランス語教育の現状と問題点 第11回：日本で作成されたフランス語教材の種類と分析 第12回：フランスで作成されたフランス語の総合教材（méthodes）種類と分析 第13回：教材分析のための枠組み作成と教材分析（グループ作業と発表） 第14回：その他の教材・授業での情報機器などの活用 第15回：まとめ - 「聞く」「話す」「読む」「書く」を取り入れた授業計画 -	
到達目標	フランス語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、フランス語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	フランスおよび日本で作成されたフランス語テキストの教材分析をする。また、授業の組み立て方の実践として、指示された項目について、アクティビティを取り入れた教案を作成する。		
テキスト	中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）高等学校学習指導要領（平成21年3月告示 文部科学省）フランス語をどのように教えるか（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon（DISSON, Agnès, Presses Universitaires d'Osaka）		
評価方法	グループ作業と発表（40%）、講義ノート（20%）、レポート課題（40%）		

13年度以降	フランス語科教科教育法Ⅳ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
教師の役割（informateur, animateur, évaluateur）と教室空間の利用、activity の組み立て方、評価法と授業観察法を理解し、I で習得した知識も含めて模擬授業を実践する。模擬授業は学生一人あたり20分程度を少なくとも3回以上は担当する。一回の模擬授業については、教案作成と授業準備を行った上で模擬授業を実施し、実施後は自身の模擬授業を振り返って次回の模擬授業への課題を見つける。その後、個別に事後指導を行う。数回の積み重ねから、自分に合った授業スタイルを模索する。		第1回：オリエンテーション 第2回：教師の役割と教室空間の利用 第3回：学習活動・activity の組み立て方・（グループ作業） 第4回：学習活動・アクティブ・ラーニングと取り入れた授業 -（グループ作業）- 第5回：学習活動・タスクを取り入れた授業・（グループ作業） 第6回：Activity の実践（個人） 第7回：模擬授業 1- 授業観察の方法と伝える・伝わる授業 - 第8回：模擬授業 2- 授業の流れ・教師の役割・教室空間の利用 - 第9回：模擬授業 3- 情報機器やオーディオ機器の利用した授業 - 第10回：授業観察法と評価について 第11回：模擬授業 4- 生徒に積極的な授業参加を促す授業 - 第12回：模擬授業 5- 各自の課題から - 第13回：模擬授業の総括 第14回：教育実習に向けて - 注意点と心構え - 第15回：まとめ	
到達目標	フランス語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、学習目標に適合する教材と指導案を作成できる力、授業における基礎的な指導技術を習得し、さらに、生徒の成績評価や自他の授業評価ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	実際の授業時間を想定して教案を作成し、必要な補助プリントや教材を準備する。模擬授業後に、実践した授業を振り返り、反省点と今後の自分への課題をまとめる。また、課題に対しての自己評価を行う。		
テキスト	中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）高等学校学習指導要領（平成21年3月告示 文部科学省）フランス語をどのように教えるか（中村啓佑・長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon（DISSON, Agnès, Presses Universitaires d'Osaka）		
評価方法	教案作成（10%）、授業準備（10%）、模擬授業（40%）、事後指導（10%）、レポート課題（30%）		

03年度以降	社会科教育法 I	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>社会科の基本的性格を明らかにするとともに、地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標と内容、授業展開と評価の方法を学ぶ。併せて、授業の諸形態と学習方法の特性について理解する。</p>		<p>第1回：社会科の目標と身に着けるべき力</p> <p>第2回：社会科成立の背景と初期社会科</p> <p>第3回：教育課程とその変化（1）分野制社会科の成立</p> <p>第4回：教育課程とその変化（2）知識から方法へ</p> <p>第5回：学習指導要領を読む</p> <p>第6回：地理的分野の目標と内容</p> <p>第7回：地理的分野の授業展開と評価</p> <p>第8回：歴史的分野の目標と内容</p> <p>第9回：歴史的分野の授業展開と評価</p> <p>第10回：公民的分野の目標と内容</p> <p>第11回：公民的分野の授業の展開と評価</p> <p>第12回：授業形態研究—講義式授業の特質と課題</p> <p>第13回：授業形態研究—グループ学習</p> <p>第14回：授業形態研究—臨地学習</p> <p>第15回：授業形態研究—調査・発表学習</p>	
到達目標	学習指導要領に定める中学校社会科の指導内容および指導法を理解し、中学校社会科の現状課題について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学校学習指導要領（過去の版も含む）を熟読する。現行の学習指導要領の下で書かれている検定済教科書の内容を把握する。事後学修：授業中に提示される課題を行う。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 社会編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点 60 点以上合格。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	社会科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 社会科の授業を行うための教材収集、教材作成、授業設計、学習指導案の作成、授業展開と評価の方法を具体的に学ぶ。また模擬授業を通じて実践力を養う。		第1回：社会科の学習指導計画 第2回：授業と学習指導案 第3回：教材の収集と活用（1）文献資料等 第4回：教材の収集と活用（2）実物教材等 第5回：教材の収集と活用（3）地域資源の活用 第6回：教材の収集と活用（4）シミュレーション教材 第7回：教材の収集と活用（5）インターネットの活用 第8回：授業設計（1）授業の構成と発問 第9回：授業設計（2）板書とワークシート 第10回：授業設計（3）学習評価とテスト問題 第11回：学習指導案の作成 第12回：模擬授業（1）地理的分野 第13回：模擬授業（2）歴史的分野 第14回：模擬授業（3）公民的分野 第15回：授業分析と授業の改善	
到達目標	中学校社会科の地理、歴史、公民の3分野の指導において必要な基礎的知識・技能を習得し、模擬授業に臨む準備ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	学習指導要領、教科書を熟読する。学習教材等の収集など授業中に具体的な課題が示される。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 社会編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点60点以上合格。		

03年度以降	社会科教育法Ⅲ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
【授業の到達目標及びテーマ】 中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。社会科教育法Ⅲは主として、社会科の模擬授業を通じて実践力を身につけることを目標とする。 【授業の概要】 社会科教育法Ⅲでは、社会科の年間学習指導計画および学習指導案の書き方を学習した後、模擬授業を行い、社会科の教員としての望ましい知識と態度を身につける。		第1回：学校カリキュラムの中での社会科 第2回：社会科各分野の特性、内容と年間学習指導計画 第3回：学習指導案の作成と模擬授業の準備 資料の収集 第4回：学習指導案の作成と模擬授業の準備 教材構成と発問の工夫 第5回：学習指導案の作成と模擬授業の準備 プリント資料の作成と板書事項の検討 第6回：模擬授業（1）地理的分野 日本の諸地域 第7回：模擬授業（2）地理的分野 世界の諸地域 第8回：模擬授業（3）歴史的分野 近代以前の世界 第9回：模擬授業（4）歴史的分野 近代以降の日本 第10回：模擬授業（5）公民的分野 経済分野 第11回：模擬授業（6）公民的分野 政治分野 第12回：模擬授業（7）分野融合単元 現代社会の諸問題 第13回：評価問題の検討と学習評価 定期試験問題の作成 第14回：評価問題の検討と学習評価 定期試験結果の分析と授業の改善 第15回：まとめ	
到達目標	授業の実践に必要な学習指導案を作成する力、指導技術を習得し、社会科の授業の在り方について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業時間は模擬授業の実施が中心となるので、学習指導要領の作成などは事前学修の課題となる。事後学修としては模擬授業の反省を踏まえて、より良い学習指導案の作成を行う。		
テキスト	文部省『中学校学習指導要領解説（平成20年9月）社会編』日本文教出版		
参考文献	授業中に指示される。		
評価方法	授業時に示される小課題（レポート）等を含め総合的に評価する。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	地理・歴史科教育法 I	担当者	鈴木 孝
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】 授業力向上のための講義を中心に、アクティブラーニングによる演習を含めた授業となる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 歴史認識の所在と変遷を明らかにし、歴史教育者としての資質を高める。 2. 歴史教育における世界史の意義をさぐり、生徒の主体的な学習力向上を図れるようにする。 3. 学習指導要領での世界史の目標と取り扱い方を明らかにして授業力の基礎をつくる。 4. 教材研究の方法を複眼的にとらえるとともに、学問的な背景の重要性を理解する。 5. 世界史Aの内容と特色を理解し、教材を有効活用する技能をみがく。 6. 諸地域世界の特質をとらえ、世界史Aの授業設計にいかす方法を習得する。 7. ネットワーク論から、世界史Aにおける諸地域世界の交流をアクティブにとらえる。 8. 近現代の世界の授業指導案を検討し、主題学習への応用力をみがく。 9. マイクロティーチング例をもとに自らの授業力向上に反映させる。 10. 世界史Bの内容と特色を理解し、教材活用力とともに自ら教材を開発する能力をみがく。 11. 時間軸と空間軸から世界史Bの授業設計ができるような方法を習得する。 12. 歴史資料の読み解き事例から世界史Bの授業を活性化させる手法をさぐる。 13. 小グループによる議論と発表により、授業で活用できるようなスキルをみがく。 14. 発展的な授業をめざし、興味・関心を高める「導入」の事例を研究する。 15. 発展的な授業をめざし、生徒の実態に応じた授業スタイルを実践できるようにする。 	
到達目標	高等学校世界史に関する教育法の基礎的知識、および、学習指導要領に基づく実践的な世界史学習指導案を作成できる力と指導技術を習得し、さらに、世界史の授業のあり方について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回の授業計画にそって、テキスト、世界史教科書（各自所有のもの）、WEB資料等で内容確認してください。また、随時だされる課題やワークについて調べた上で報告してください。		
テキスト	文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』、世界史教科書（各自所有のもの）		
参考文献	授業において随時紹介する。		
評価方法	レポートおよび授業内でのワークの成果を総合的に評価する。（100％）		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	地理・歴史科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】 地理教育の存在意義を明らかにしたのち、地理で身に着けさせる見方・考え方・技能について実践的に学ぶ。また、教科の内容とその学習指導方法を具体的に学んだ後、学習指導案の書いたうえで模擬授業を行う。さらに授業評価と学習評価について検討する。</p>		第1回：地理教育の意義と目標 第2回：日本の地理教育の歩み 第3回：諸外国の地理教育 第4回：学習指導要領を読む 第5回：地理的見方・考え方および地理的技能について 第6回：地図・地球儀の扱い方（1）地球儀・世界地図 第7回：地図・地球儀の扱い方（2）地図とGIS 第8回：野外観察・調査の意義と計画 第9回：野外観察の実践 第10回：系統地理の学習指導 第11回：地誌の学習指導 第12回：主題的学習の学習指導 第13回：学習指導計画の作成 第14回：模擬授業 第15回：授業評価と授業改善・学習評価	
到達目標	高等学校地理に関する教育法の基礎的知識、および、学習指導要領に基づく実践的な地理学習指導案を作成できる力と指導技術を習得し、さらに、地理の授業のあり方について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校学習指導要領解説地理歴史編を熟読するとともに、これに基づいて書かれた検定教科書の内容を把握する。 事後学修：授業中に課題が提示される。授業中に出される課題を行うこと。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『高等学校学習指導要領』『同解説 地理歴史編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点 60 点以上合格。		

03年度以降	地理・歴史科教育法Ⅲ	担当者	會田 康範
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 歴史教育のあり方について内容論や方法論などから考察し、理解を深める。そして各自が学習指導案を作成し、それをもとに模擬授業を行う。受講者相互で意見交換し、さらに指導案の改善を図り、高等学校で創造的な日本史の授業を実践できる力を養う。		第1回：歴史教育の目的 第2回：学習指導要領の概要 第3回：学習指導要領と教科書 第4回：教材研究の意義と方法 第5回：学習指導計画の立案 第6回：系統的通史学習の指導方法 第7回：探究的テーマ学習の指導方法 第8回：歴史系博物館等の活用方法 第9回：原始・古代の模擬授業と研究協議 第10回：中世の模擬授業と研究協議 第11回：近世の模擬授業と研究協議 第12回：近代の模擬授業と研究協議 第13回：現代の模擬授業と研究協議 第14回：学習評価と授業改善 第15回：これからの歴史教育	
到達目標	高等学校日本史に関する教育法の基礎的知識、および、学習指導要領に基づく実践的な日本史学習指導案を作成できる力と指導技術を習得し、さらに、日本史の授業のあり方について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	配布資料を事前に精読しておいてください。 事後学修として講義内容を再確認してください。小レポートを提出してもらう場合があります。		
テキスト	『高等学校学習指導要領』（平成21年3月告示） 『文部科学省高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（平成26年1月 文部科学省）		
参考文献	授業時に適宜紹介する。		
評価方法	レポート（70%）、授業中の態度・取組状況（15%）、リアクションペーパー等の内容（15%）を加味して総合的に評価する。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	公民科教育法Ⅰ	担当者	及川 良一
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 前半は社会科教育の歴史と意義、中学校学習指導要領（社会）について理解を深め、後半では中学校社会科「公民的分野」の授業研究を実践的に行う。		1. 社会科教育の意義と課題 2. 社会科教育の歴史 3. 社会科カリキュラム論 4. 中学校学習指導要領（社会）の目標及び内容と全体構造の理解 5. 中学校学習指導要領（社会）「公民的分野」の目標及び内容に関する研究 6. 社会科「内容の取扱い」についての研究 7. 次期学習指導要領と社会科の改訂についての研究 8. 評価と評価方法についての理解及びまとめ 9. 「政治」分野の教材及び指導方法の研究 10. 「政治」分野の授業研究 11. 「経済」分野の教材及び指導方法の研究 12. 「経済」分野の授業研究 13. 「国際社会」分野の教材及び指導方法の研究 14. 「国際社会」分野の授業研究 15. 公民科教育法Ⅰのまとめ	
到達目標	公民科教育の歴史の変遷、公民科教育の意義や目的、特徴等と、学習指導要領に定める指導内容を理解し、学習指導案や指導計画を策定できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておく。		
テキスト	文部科学省著『中学校学習指導要領解説 社会科編』		
参考文献	白井嘉一・柴田義松編著『社会・地歴・公民科教育法』（学文社）		
評価方法	理論編テスト（40%）、指導案（20%）、模擬授業（20%）、課題論文（20%）		

03年度以降	公民科教育法Ⅱ	担当者	及川 良一
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 前半は公民科教育の歴史と意義、高等学校学習指導要領（公民）について理解を深め、後半では公民科各科目の授業研究を実践的に行う。		1. 公民・公民科教育の意義と課題 2. 公民・公民科教育の歴史 3. 高等学校社会科～公民科カリキュラム論 4. 高等学校学習指導要領（公民）の目標及び内容の全体構造の理解 5. 高等学校学習指導要領（公民）の「内容の取扱い」に関する理解 6. 公民科の指導方法についての研究 7. 次期学習指導要領と公民科の改訂についての研究 8. 「公民科」の評価と評価方法についての理解及びまとめ 9. 「現代社会」の教材及び指導方法の研究 10. 「現代社会」の授業研究 11. 「倫理」の教材及び指導方法の研究 12. 「倫理」の授業研究 13. 「政治・経済」の教材及び指導方法の研究 14. 「政治・経済」の授業研究 15. 公民科教育法Ⅱのまとめ	
到達目標	学習指導案に基づき、授業構成のあり方や具体的な指導法・指導技術、評価の方法等、公民科教育に関する実践的な指導力を習得し、公民科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておく。		
テキスト	文部科学省著『高等学校学習指導要領解説 公民編』（平成21年12月）		
参考文献	白井嘉一・柴田義松編著『社会・地歴・公民科教育法』（学文社）		
評価方法	理論編テスト（40%）、指導案（20%）、模擬授業（20%）、課題論文（20%）		

03年度以降	情報科教育法Ⅰ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 情報科の基本的性格を明らかにするとともに、普通教科並びに専門教科の目標と内容を理解し、具体的な内容に関して教材作成を学ぶ。		第1回：オリエンテーションー高校で学んだ授業を振り返る 第2回：社会科成立の背景と意義 第3回：普通教科「情報」の目的 第4回：普通教科「情報」の科目構成と科目の特色 第5回：専門教科「情報」の目的 第6回：専門教科「情報」の科目構成とその内容 第7回：「情報」における学習評価 第8回：教材研究（1）情報活用と表現 第9回：教材研究（2）コミュニケーション 第10回：教材研究（3）情報モラル 第11回：教材研究（4）モデル化とシミュレーション 第12回：教材研究（5）情報化と社会 第13回：教材研究（6）アルゴリズム 第14回：教材研究（7）図形と画像の処理 第15回：教材研究（8）ネットワークシステム	
到達目標	学習指導要領に定める情報科の指導内容および指導法を理解し、情報科の現状課題について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校学習指導要領解説情報編を熟読するとともに、これに基づいて書かれた検定教科書の内容を把握する。 事後学修：授業中に課題が提示される。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『高等学校学習指導要領』『同解説 情報編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点60点以上合格。		

03年度以降	情報科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 先進校授業参観、年間学習指導計画・学習指導案の作成、先進校授業参観、模擬授業を行う。		第1回：普通教科「情報」の特性と年間計画 第2回：専門教科「情報」の科目配置と年間計画 第3回：「情報」学習指導の実際（施設見学） 第4回：「情報」学習指導の実際（授業見学） 第5回：「情報」学習指導の実際（現場教員との議論） 第6回：「情報」の授業の特性 第7回：学習環境の整備 第8回：学習指導計画の作成（普通教科） 第9回：学習指導計画の作成（専門教科） 第10回：模擬授業（1）「社会と情報」 第11回：模擬授業（2）「情報の科学」 第12回：模擬授業（3）「情報産業と社会」 第13回：模擬授業（4）「体験的な学習」を中心に 第14回：模擬授業（5）「情報モラル」を中心に 第15回：学習の評価	
到達目標	授業の実践に必要な学習指導案を作成する力、指導技術を習得し、授業の在り方について分析を行うとともに、情報科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学習指導要領を熟読するとともに指導案を書くための資料等の収集を行う。 事後学修：授業中に課題が提示される。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『高等学校学習指導要領』『同解説 情報編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点60点以上合格。		

13年度以降	道徳教育の理論と実践	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>道徳教育は、人間形成の基礎にかかわるものであり、人間が社会の中で人間として生きていくために不可欠の内容を有している。本講では、道徳教育の意義と目的、学校教育における位置と役割についての基本的理解を得たうえで、道徳について考えるうえでの基本的な問いを「教育において『いのち』のもつ意味は何か」と捉え、その観点から、今日の道徳教育の現状を分析し、その特徴と問題点を明らかにし、一人ひとりの子どもの「生きる力」の育成に資する道徳教育とは何かについての検討を加える。</p>		<p>第1回：自分の道徳教育体験を振り返る</p> <p>第2回：道徳とは何か(1) 道徳の本質</p> <p>第3回：道徳とは何か(2) 道徳の定義</p> <p>第4回：学校教育と道徳教育</p> <p>第5回：学習指導要領における道徳教育の位置と役割</p> <p>第6回：新教育課程における道徳教育の課題</p> <p>第7回：「いのち」の教育とは何か</p> <p>第8回：道徳教育の実践例の検討 小学校</p> <p>第9回：道徳教育の実践例の検討 中学校</p> <p>第10回：道徳教育の実践例の検討 高等学校</p> <p>第11回：学習指導案の作成(前半)</p> <p>第12回：学習指導案の作成(後半)</p> <p>第13回：模擬授業(1時間目)</p> <p>第14回：模擬授業(2時間目)</p> <p>第15回：道徳教育と評価</p>	
到達目標	学校教育をめぐる問題状況を踏まえ、学習指導要領に基づく道徳教育の目的、内容、方法について理論的に分析し、実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 特別の教科 道徳編』『私たちの道徳 中学校』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点 60点以上合格。		

13年度以降	道徳教育の理論と実践	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	特別活動論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 特別活動の教育的意義や教育課程上の位置付け、目標と内容、指導計画の作成、指導方法などについて基礎知識を習得し、講義と演習、指導計画の作成及び模擬授業などを通して現場実践に即した技能を習得する。		第1回：特別活動とは何か 第2回：特別活動と教育課程 第3回：特別活動の内容と変遷 第4回：特別活動の意義と目標 第5回：特別活動と諸教育指導 第6回：生徒会活動の目標と内容 第7回：生徒会活動の指導計画と評価 第8回：学級活動の目標と内容 第9回：学級活動の指導計画（1）指導計画作成の基礎・基本 第10回：学級活動の指導計画（2）指導計画の作成 第11回：学級活動の模擬授業と評価 第12回：学校行事の目標と内容 第13回：学校行事の指導計画（1）指導計画作成の基礎・基本 第14回：学校行事の指導計画（2）指導計画の作成 第15回：学校行事の指導計画（3）指導計画の評価	
到達目標	学習指導要領に規定された特別活動の目的、内容、指導法に関する基礎的理論に基づき、より良い特別活動の指導の在り方について分析し、実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省著『中学校学習指導要領解説特別活動編』（平成20年9月）		
評価方法	各種指導計画（30%）、課題レポート（20%）、定期試験（50%）により総合的に評価。		

13年度以降	特別活動論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育方法学	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>毎日の授業をどのように工夫したらよいのか、子どもたちの個性を最大限に生かせるような指導とは何か等の問いに代表されるように、授業の内容とその方法に関する諸問題は、学校教育における最も重要な課題の一つである。</p> <p>本講では、教育方法学のうち、特に授業研究の問題に焦点をあて、授業研究を行ううえでの基本的な考え方はどのようなものであるのか、授業を成り立たせている構成要素は何か、授業を展開する具体的な方法とは何か等の問題について、各種資料やVTRによる授業記録などを用いながら多面的に検討を加え、授業研究に関する理解を深めていく。</p>		<p>第1回：自分の授業体験を振り返る</p> <p>第2回：授業とは何か</p> <p>第3回：教育実習生の授業</p> <p>第4回：ベテラン教師の授業</p> <p>第5回：教材研究とは何か</p> <p>第6回：教材研究の方法</p> <p>第7回：教材研究の事例の検討 A教諭の授業をもとに</p> <p>第8回：教材研究の事例の検討 B教諭の授業をもとに</p> <p>第9回：教材研究の事例の検討 C教諭の授業をもとに</p> <p>第10回：新教育課程と授業</p> <p>第11回：主体的・対話的で深い学びとは何か</p> <p>第12回：主体的・対話的で深い学びの実践例の検討</p> <p>第13回：授業における情報機器の活用：理論編</p> <p>第14回：授業における情報機器の活用：実践編</p> <p>第15回：学習評価の今日的課題</p>	
到達目標	授業の構成と展開を中心とする教育方法学の基礎的理論に基づき授業を分析研究し、より良い授業実践の在り方について見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総則編』『高等学校学習指導要領』『同解説 総則編』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点60点以上合格。		

03年度以降	教育方法学	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	生徒指導法	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
【講義概要】 生徒指導及び進路指導・キャリア教育の教育課程上の位置づけや教育的意義、教育相談と生徒理解の重要性、ガイダンスとカウンセリングの計画的推進などについての理解を深め、グループ討議や事例研究、ロールプレイングなどを通して実践的な指導技能を習得する。		第1回：生徒指導の意義と教育課程上の位置づけ 第2回：生徒指導の方法原理と指導の実際 第3回：生徒指導組織と指導体制 第4回：生徒理解と教育相談 第5回：生徒指導におけるガイダンスとカウンセリング 第6回：生徒指導と学級経営、道徳教育等との関連 第7回：生徒指導と関連法令 第8回：進路指導・キャリア教育の意義とその在り方 第9回：進路指導・キャリア教育と職業観・勤労観の醸成 第10回：事例研究：基本的生活習慣の確立と適応指導 第11回：事例研究：非行問題行動への対応 第12回：事例研究：いじめ問題への対応 第13回：事例研究：不登校・中途退学などへの対応 第14回：事例研究：生徒指導上の今日的課題への対応 第15回：まとめ	
到達目標	生徒指導及び教育相談、進路指導に関する基礎的理論に基づき、実践的な生徒指導法を分析研究し、実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	『生徒指導提要』（教育図書）、『高等学校キャリア教育の手引き』（教育出版）、その他、担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	講義の中で紹介する。		
評価方法	授業内課題や小レポートなど平常点 50%、試験（レポート）50%で総合的に評価する。60 点以上を合格とする。		

03年度以降	生徒指導法	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	学校カウンセリング	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義概要】</p> <p>教員が学校で生徒と接する際に必要とされるカウンセリングの基本的な理論や技法について講義する。さらに、実習やグループワークなどを通じ、いじめ、不登校など学校現場で実際に起こっている問題について実際に考える機会を設ける。</p>		<p>第1回：学校カウンセリングとは何か</p> <p>第2回：教師が行う学校カウンセリングの特徴</p> <p>第3回：学校カウンセリングの理論①—来談者中心療法とカウンセリングマインド</p> <p>第4回：学校カウンセリングの理論②—その他の理論</p> <p>第5回：学校カウンセリングの理論③—カウンセリングの体験</p> <p>第6回：予防的カウンセリング①—構成的グループエンカウンター</p> <p>第7回：予防的カウンセリング②—ソーシャルスキルトレーニング</p> <p>第8回：思春期の心の発達と危機</p> <p>第9回：学校カウンセリングの実際①：いじめ</p> <p>第10回：学校カウンセリングの実際②：不登校・ひきこもり</p> <p>第11回：学校カウンセリングの実際③：非行</p> <p>第12回：学校カウンセリングの実際④：発達障害の理解と支援</p> <p>第13回：学校カウンセリングの実際⑤：精神障害の理解と支援</p> <p>第14回：学校カウンセリングの実際⑥：保護者との協調</p> <p>第15回：まとめ：学級運営に活かすカウンセリング</p>	
到達目標	学校カウンセリングに関する基礎的理論や技法を習得し、適切な相談、支援ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画に示された各課の内容を参考文献をもとに事前に学修する。事後にあつては授業内容を参考文献を踏まえて再度まとめる。また、各教員が授業にて事前・事後学修として個別に指示した課題も含まれる。		
テキスト	特に定めない。毎回授業内容に関連するプリントを配付する。		
参考文献	授業中に適宜資料を配付する。		
評価方法	定期試験（70%）、毎回の授業の最後に提出するリアクションペーパー（30%）		

03年度以降	学校カウンセリング	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13 年度以降	教育実習指導	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13 年度以降	教育実習指導	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】 教育実習事前・事後指導 本講は、教育実習の意義や目的、その概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業（事前指導）、及び、教育実習の反省・フォローアップ（事後指導）を行い、教師としての資質・能力の向上を図ることを目的とする。</p> <p>【授業の概要】 教育実習は、これまで大学の教職課程で学んできたことの成果を、実習校での学校運営に教育実習生として直接参加することによって、具体的に実証する機会である。本講では、教育実習に参加することの意義や目的、実習期間中の学校生活の概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を体験することにより、実習における学習のポイントを明確にする（事前指導）。また、教育実習の反省を行うとともに、教育実習の体験に基づいて、教職に向けての各自の学習課題を整理する（事後指導）。</p> <p>秋学期受講者は、水曜日4・5時限に全体講義を行うため、可能な限り他の授業を登録しないこと。</p>		<p>第1回：教育実習とは何か 第2回：教育実習の概要 第3回：学校の組織と教師の職務 第4回：授業研究(1)外国語 第5回：授業研究(2)社会・地歴・公民 第6回：授業研究(3)授業のスキル 第7回：授業研究(4)授業の評価 第8回：学習指導案の書き方 第9回：学習指導案の作成 第10回：模擬授業(1)外国語 第11回：模擬授業(2)社会・地歴・公民 第12回：教育実習期間中の諸注意 第13回：教育実習を振り返る(1)学習指導 第14回：教育実習を振り返る(2)生徒指導 第15回：教育実習を振り返る(3)学級経営</p>	
到達目標	教育実習の意義、目的、内容について理解し、より良い実習に向けた準備を行うとともに、教育実習の反省・フォローアップにより各自の学習課題の整理することで、教師としての意識や資質・能力を高めることができるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	獨協大学『教育実習の指針』		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点60点以上合格。		

10年度以降	教職実践演習（中・高）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

10年度以降	教職実践演習（中・高）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【到達目標及びテーマ】 教職課程の総仕上げとして、個々の授業において習得してきた知識技能を元に、教員としての使命感や教育的愛情、授業力等の資質が身につけているかどうか確認し、今後の教員としての成長発達につなげる契機とする。また、方法としてディスカッションを多用することで対人能力の確認も含んでいる。</p> <p>【授業の概要】 主に①これまでの教職課程で習得してきた内容と教育実習を振り返り、【教員としての使命感・教育的愛情】、②現在学校が抱えている課題とそれへの対応を、現職教員からの講義やロールプレイ、討論を通してより具体的に考察し、【生徒理解】、③模擬授業を通してよりよい授業力を身につけると同時に授業力向上への方途を探究する。また、授業の多くがグループでのディスカッションや作業の形態をとり、それを通して教員として必要な「他の人と話し合い、協力しあう」という対人関係能力の確認、向上も同時に目指していく。</p> <p>秋学期受講者は、水曜日4・5時限に全体講義を行うため、可能な限り他の授業を登録しないこと。</p>		<p>第1回 教育実習の振り返り①生徒指導・生徒理解編 第2回 教育実習の振り返り②授業編 第3回 履修カルテの記入・確認&私に必要なもの 第4回 実習校でのフィールドワーク 第5回 生徒理解①（現職中・高教員による講義・小論文） 第6回 生徒理解②（グループディスカッション・小論文） 第7回 実習中経験した課題への対応 第8回 すぐれた授業とは何か 第9回 学習指導案を作成する 第10回 学習指導案を検討する 第11回 模擬授業① 第12回 模擬授業② 第13回 模擬授業③ 第14回 模擬授業④ 第15回 まとめ——設定した課題は達成と達成するために求められること（小論文）</p>	
到達目標	主に教職課程を通じて習得した知識や能力、教育実習の成果をふまえ、教師に必要な資質・能力を総合的に養成し、実践的な教育力を発揮できるようにする。		
事前・事後学修の内容	（事前学修）提示された資料を事前に読んでくること、（事後学修）講義を振り返り授業レポートを作成すること。その他フィールドワークや発表準備など。		
テキスト	『教育実習の指針』（獨協大学）		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』その他授業内で指示する。		
評価方法	期末レポートに授業レポート等を加味して評価する。		

03年度以降	学校経営と学校図書館	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学校図書館司書教諭は学校図書館長として、資料管理・情報管理や人事管理など経営管理者としての役割と仕事求められる。学校図書館を活用し、「総合的な学習」や探求型学習など創造的な授業を構築する教員集団の支援活動も求められている。</p> <p>この科目では、これらの役割について、内容を把握し、その使命を認識し教育現場で実施できるようになることを学習目的とする。</p>		<p>(1)学校図書館の理念と教育的意義 (2)学校図書館の発展と課題 (3)教育行政と学校図書館 (4)学校図書館の経営①施設管理 (5)学校図書館の経営②資料管理 (6)学校図書館の経営③人事管理 (7)学校図書館の経営④財政管理、評価等 (8)司書教諭・学校司書の役割と校内の協力体制、研修 (9)学校図書館メディアの選択と管理 (10)学校図書館メディアの提供と活用 (11)学校図書館活動と教育活動 (12)調べ学習や「総合的な学習」と学校図書館 (13)図書館の相互協力とネットワーク (14)学校図書館運営計画の策定 (15)まとめ</p>	
到達目標	学校経営と学校図書館に関する各種の知識・技能を習得し、学校図書館の経営的問題点について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	学校図書館法・規則を読んでおくこと。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	最初の授業で資料リストを配布する。		
評価方法	課題 60%、試験 40% ※授業の 1/3 以上の無断欠席は授業放棄とみなす。また課題はすべて提出していることが評価対象になる条件となる。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	学校図書館メディアの構成	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学校図書館メディア・センターでの資料管理についての以下の分野で講義・演習を行う。</p> <p>(1)資料選択。どのような資料が授業で活用できるのか、どのような資料がどの年齢層あるいはどのような興味関心を持っている子どもに薦められるのか、などについて選択理論をおさえ、専門職としての資料選択力を身につけることを目的とする。</p> <p>(2)資料組織化の実習および運用。学校図書館メディア・センターにはどのような資料を所蔵するのか、それをどのように分類・目録化し、データベース化するのかの基本を学び、実習する。</p>		<p>(1)図書館での資料整理の目的と意義</p> <p>(2)学校図書館メディア資料の種類と特性</p> <p>(3)資料選択の理論、子どもたちの知的自由</p> <p>(4)資料選択の実際</p> <p>(5)日本十進分類法(NDC)の構造</p> <p>(6)分類の実際：主題同定作業、情報検索語の特定</p> <p>(7)分類の実際：一般補助表の活用</p> <p>(8)分類の実際：学習に応じた分類</p> <p>(9)日本目録規則(NCR)の構造</p> <p>(10)目録化の実際：図書</p> <p>(11)目録化の実際：図書以外の資料</p> <p>(12)目録化の電子化、テキスト・ファイルからデータベース化へ、ExcelとAccess利用</p> <p>(13)目録と情報検索との相関関係</p> <p>(14)目録検索の実際</p> <p>(15)まとめ</p>	
到達目標	学校図書館メディア・センターにおける資料の選択理論および資料選択力、さらに、資料の分類・目録化、データベース化など、資料の組織化に関する知識を習得し、適確な資料選択および資料管理ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	図書館資料の背ラベルにある番号（所在記号）を把握しておく。		
テキスト	日本図書館研究会編『図書館資料の目録と分類 増訂第5版』2015年 ISBN:978-4-930992-22-2		
参考文献	最初の授業で参考文献リストを配布する。		
評価方法	演習課題 60%、最終演習テスト 40%、授業内で演習課題を提出してもらうので参加は必須。		

03年度以降	学習指導と学校図書館	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学習指導における学校図書館のメディア活用についての理解を図る。「総合的な学習」や調べ学習などで、学校図書館の活用が重視されており、その内容にそって、児童・生徒たちの主体的なメディア活用能力の育成を目的とした授業を援助する学校図書館司書教諭の役割を理解し、実践することができるように学習していく。</p> <p>2020年度から学習指導要領の改訂が予定されており、教科にアクティブ・ラーニングを取り入れた科目に変更される可能性がある。司書教諭はその変更にもとない、児童生徒のみならず教師への支援を求められる。この科目ではこの変更を念頭におき、学習していく。</p> <p>この科目では実践的な演習を中心にしてすすめていくほか、チームとして「総合的な学習」を中心とした調べ学習など学校図書館活用指導計画を作成していく。</p>		<p>(1)導入：課題解決型学習と学校図書館</p> <p>(2)学校図書館情報メディア活用能力の育成</p> <p>(3)学習過程における学校図書館メディア活用の実際</p> <p>(4)情報探索能力育成：レファレンスと調べ学習</p> <p>(5)情報探索能力育成：レファレンスツール利用指導</p> <p>(6)情報探索能力育成：インターネット利用指導</p> <p>(7)情報探索演習：プレゼンテーション・スキル養成</p> <p>(8)情報探索能力育成のための教育課程策定</p> <p>(9)各教科学習で学校図書館メディア・センターを利用する教育指導計画及び指導案作成</p> <p>(10)「総合的な学習」で学校図書館メディア・センターを利用する教育指導計画及び指導案作成</p> <p>(11)特別活動などでの学校図書館メディア・センター利用の活動企画</p> <p>(12)学校図書館メディア・センター管理運営年間計画策定</p> <p>(13)教師集団との協働</p> <p>(14)PTA/PTOや地域社会との協働</p> <p>(15)教育指導の実際－各受講者の発表・報告－</p>	
到達目標	学校図書館司書教諭の役割と学校図書館メディアセンターの情報資料について理解し、司書教諭として必要とされる情報検索活動能力、および、児童・生徒の主体的なメディア活用能力を育成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	教職課程で学習した指導計画・指導案作成を復習しておくこと。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	最初の授業で参考資料リストを配布する。		
評価方法	演習課題 30%、授業参加+グループでの報告と発表 40%、小テスト 30%、授業の1/3を無断欠席すると授業放棄とみなす。遅刻するとグループワークに参加できず課題を提出できないので注意すること。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	読書と豊かな人間性	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「読書」とはなにか。読む・書くことであるが、学校という教育現場ではどのように読み解くか、をどう指導していくのかが課題となる。2020年以降の新学習指導要領では複数の総合学習科目が新設予定であり、他者との議論等を通じてのアクティブ・ラーニングを指導する。その基本となるのは調査分析にもとづく自己意見の表現である。文章を読み取り文章で表現する力が求められる。この言語教育・リテラシー学習の基本である子どもの読書を推進するため、学校教育のなかで言語教育担当教員のみならず、すべての教員の調整役＝コーディネーターとしての学校図書館司書教諭は重要な役割を担っている。</p> <p>この科目ではその役割をはたすため、どのような読書資料があるのか、そしてその読書資料をどのように言語教育やリテラシー教育に活用するのかを学び、かつ学校内外での調整役としての役割と責任を学習する。</p>		<p>(1)はじめに。子どもの読書状況 (2)読書と読む・書く (3)読書心理と読書傾向 (4)読書資料としての絵本について (5)読書資料としての絵本；絵本を読みなおして考える読書 (6)演習課題①絵本をつかっての中高生向け読書指導 (7)読書資料としての児童文学・ティーンズ文学 (8)読解力を育成する児童文学・ティーンズ文学 (9)演習課題②ブックトーク(1) (10)読書資料としてのノンフィクション (11)読解力育成としてのノンフィクション (12)演習課題③ブックトーク(2) (13)読書指導の技術と方法 (14)子どもたちの知的自由 (15)家庭・地域での読書/公共図書館との協働</p>	
到達目標	「読む」(リーディング)と「書く」(リテラシー)という読書力養成を目的とする授業を構築するための技能を習得し、学習者に対して適切な読書指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	児童生徒向け資料をあらかじめ読んでおくこと。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	最初の授業で参考資料リストを配布する。		
評価方法	演習課題①～③60%、課題レポート20%、小テスト20% ※授業の1/3を無断欠席すると授業放棄とみなす。また、課題はすべて参加し提出していることが評価対象になる条件。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	情報メディアの活用	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】インターネット、そしてその上で展開されたさまざまなサービスによって、大量かつ多様な情報がやりとりされたり蓄積されたりしてきた。電子的な通信メディアや記録メディアによって世界中の人々がコミュニケーションを行っているのである。しかし、情報を媒介するものは電子的なものに限らない。たとえば従来の図書や雑誌といった印刷メディアは簡単に思い出すことができるが、そのほかにどのようなメディアが存在するのだろうか。この授業では情報の「乗り物」であるメディアの体系を理解することを目的とする。また、情報の発信、収集、交換といったメディアの利活用についても関連するトピック（学校教育／図書館など）とともに学習する。</p> <p>【概要】現在までのメディアの発達と変化、メディアの分類およびそれぞれの特性、目的や状況（例：学校教育／図書館）に応じたメディアの選択、情報の発信・収集・交換という3つの情報利用行動、メディアの取り扱いについて注意すべき点などを、講義とコンピュータを使用した演習を通して学んでいく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の概要 2. メディアの種類；高度情報社会；学校教育 3. メディアとコンピュータネットワーク 4. メディアによる情報の発信（1）ウェブの標準技術(HTTP、URI、HTML)を例として 5. メディアによる情報の発信（2）ハイパーテキスト再考 6. メディアによる情報の交換：コミュニケーションの場としてのインターネット 7. 前半のまとめ：質疑応答 8. データベースと情報検索（1）：情報収集の例として 9. データベースと情報検索（2）：簡単な検索式の作成 10. インターネットにおける情報の検索 11. 獨協大学図書館を通じて利用できる多様なデータベース；教育／学習への応用 12. 情報検索以外の情報収集：SNS、RSSなど 13. 取り扱いに注意すべき情報：有害情報、個人情報 14. メディアと著作権（学校教育関連事項を含む） 15. まとめ：これからのメディアの利活用；質疑応答 	
到達目標	学校教育で用いられる多様な情報メディアの特性を理解し、具体的な学習場面において情報メディアを活用できるようにする。		
事前・事後学修の内容	指示された情報源については、次回までに入手／アクセスし、参照しておくこと。 また、前回の授業中に赤や青の文字で示されたキーワードの意味を説明できるように復習しておくこと。		
テキスト	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
参考文献	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
評価方法	期末レポート（50%）、平常授業における課題レポートなどの実績（50%）		

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	中條 共子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「介護」とは、食事、排泄、移動など、生きることに欠かせない生活行為への他者の支えである。この支えは、伝統的には家族から提供されてきたが、20世紀末には市場サービスとしての調達が可能となった。そして近年は介護ロボットの開発がすすめられており、将来は中心的な介護力となる可能性がある。</p> <p>「介護」が具体的な技術になればなるほど、見知らぬ仲の、素人の私たちは、「介護」に近づきがたくなる。何も提供できない私たちは、必要のない者なのかもしれない。</p> <p>しかし、私たちがもし、支えが必要であることの不自由と困難と日々の努力とを知る機会を持たないならば、私たちはきっと、そうしたことに関心を向けることを忘れてしまうだろう。他者の苦悩にかかわるすべがわからなくなるかもしれない。</p> <p>「介護ボランティア」は、支えを必要とする人との出会いの機会であり、かかわりを体験し、必要な配慮を学び考察する場である。本授業ではこのことへの理解をすすめる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ケア」を考える 2. 「福祉」のプロフィール 3. 高齢者との出会い 4. 障害者との出会い 5. 子どもとの出会い 6. 「ケア」すること/されること 7. 「傾聴」の意味と技術 8. 理解と自己覚知 9. 伝える 10. 虐待とアドボカシー 11. 人間の尊厳 12. 介護ボランティアの源流と今 13. ボランティアの意味を考える 14. ボランティアの可能性 15. 共生社会の構想 	
到達目標	教職課程における「介護等体験」に必要な基礎的知識、及び、援助の実践方法を習得し、介護等の現場でこれを実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回リアクションペーパーにより講義内容の理解を確認する。		
テキスト	テキストは指定せず、毎回レジュメと資料を配布する。		
参考文献	各回の授業で示す。		
評価方法	リアクションペーパーの提出・内容（50%）、まとめのレポートの提出・内容（50%）により評価する。		

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	中條 共子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降 (夏季集中)	介護ボランティアの理論と実践	担当者	保科 寧子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義は教職課程の「介護等体験」履修時など、介護等体験の際に求められる知識や援助技術について、理解を深めることを目的としています。まず介護体験を行うという社会参加活動（ボランティア）の意義や役割を理解し、次に高齢者や障害者の視点からを中心に、福祉や介護について概観した後、介護等体験に必要な援助技術について学びを進めていきます。</p> <p>講義ではVTR やいくつかの演習を通して、社会福祉や介護の具体的な理解を深めていきます。演習のための社会福祉に関する基礎的知識、高齢者福祉の現状、障害者福祉の現状についても学びます。</p> <p>さらに介護現場における必要となるコミュニケーションや介護の基本技術について学びます。これらを通じて、地域で暮らす人々の生活を支えるために私たちのできること、また介護現場における問題について考えます。</p>		<p>授業日程 2018年 8月 2日（木）2、3、4、5時限 8月 3日（金）2、3、4、5時限 8月 4日（土）1、2、3時限 8月 7日（火）2、3、4、5時限</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会参加活動（ボランティア）の定義・役割 2. 社会参加活動（ボランティア）の実践 3. 社会参加活動（ボランティア）の留意点 4. 社会福祉の歴史と意義 5. 社会福祉に関する概念（ノーマライゼーション他） 6. 障がい者支援のための概念（ICFと生活モデル） 7. 特別支援教育の制度と実際 8. 発達障害とその支援 9. 高齢者福祉の関連制度（介護保険中心） 10. 高齢者介護の手法（アセスメント）個人ワーク 11. 高齢者介護の手法（アセスメント）グループ検討 12. 認知症の理解と対応 13. 介護施設の業務の流れと介護技術 14. 傾聴技法を用いたコミュニケーション演習 15. 話しやすい位置関係演習 	
到達目標	教職課程における「介護等体験」に必要な基礎的知識、及び、援助の実践方法を習得し、介護等の現場でこれを実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各講義で話した内容について、次回の講義までに各自で復習をしてください。		
テキスト	テキストは特に指定しません。		
参考文献	講義中に適宜、文献や参考資料の紹介等を行います。ボランティアのすすめ—基礎から実践まで（実践のすすめ）単行本 - 2005/4/1 守本 友美（著）		
評価方法	平常点 50%（従業への参加度、授業中に課す小レポートの提出等を含む） 期末レポート 50%		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	教科教育法特論 I (国際環境経済学科用)	担当者	安井 一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】 教科横断的学習の指導</p> <p>本講は、中学校における各教科の指導法に関する学習をさらに発展させるために、教科教育法の授業との関連を図りながら、中学校の教科教育に関する理解を広げ、教育課程及び各教科の指導法に関する学習を深めることを目的とする。</p> <p>【授業の概要】 本講では、中学校教育の目的・目標、中学校の教育課程における教科教育の意義と役割、教科教育と教科外教育との関係、学力と評価、教科教育の今日的課題等を明らかにすることによって、教科教育に関する理解を深める。そのうえで、今日の教科教育の重要な課題である、各教科の関連づけを図った教科横断的な学習指導についての理解を深めるために、いくつかのグループに分かれ、総合的学習との関連を図った教科学習（クロス・カリキュラム）の学習指導案を作成する。</p>		<p>第1回：中学校の教育課程・確かな学力とは何か 第2回：クロス・カリキュラムとは何か 第3回：単元のテーマ、テーマ設定の理由、目標を考える 第4回：単元の内容構成を考える：導入 第5回：単元の内容構成を考える：展開前半の内容 第6回：単元の内容構成を考える：展開中盤の内容 第7回：単元の内容構成を考える：展開後半の内容 第8回：単元の内容構成を考える：まとめ、評価基準 第9回：学習指導案の作成：導入の指導計画 第10回：学習指導案の作成：展開前半の指導計画 第11回：学習指導案の作成：展開中盤の指導計画 第12回：学習指導案の作成：展開後半の指導計画 第13回：学習指導案の作成：まとめの指導計画、評価表 第14回：作成した学習指導案の発表準備 第15回：作成した学習指導案の発表・検討</p>	
到達目標	中学校教育における教科教育の今日的課題等を明らかにし、教科横断的な学習指導の在り方を理解したうえで、教科横断的学習課題に対する学習指導計画を作成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	特になし。		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総則編』『高等学校学習指導要領』『同解説 総則編』。その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点 60 点以上合格。		

03年度以降	日本史概説Ⅰ	担当者	會田 康範
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>近年の日本史研究では、日本列島に展開した歴史像がより多角的、多面的に捉えなおされており、今日では一定の成果を確認することができる。こうした研究状況をふまえ、前近代を素材に文字史料の読み直しとともに非文字史料にも着目し、それぞれの時代像や歴史認識を豊かにするために重要と思われるテーマを講義していきたい。</p> <p>極めて限られた時間数の中での講義のため、歴史経過にそって通史的に講義することは必要最低限にとどめるとともに、取り上げるテーマには時代的に多少の多寡があることも予め承しておいていただきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の導入—日本とは？歴史とは？— 2. 日本における歴史研究の歴史—史学史①— 3. 戦後歴史学と現代歴史学—史学史②— 4. 古代の社会—弥生時代のムラとクニ— 5. 古代の社会—朝鮮半島・大陸との交流と王権形成— 6. 古代の社会—律令制の形成— 7. 古代の社会—律令制の展開— 8. 中間まとめ 9. 中世の社会—荘園絵図を読み解く— 10. 中世の社会—武士の社会— 11. 中世の社会—中世の都市— 12. 中世の社会—洛中洛外図と中世の京都— 13. 中世の社会—上杉本洛中洛外図を読み解く— 14. 中・近世の移行期について 15. 講義のまとめ—古代・中世社会の特質— 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる日本列島に展開した前近代の歴史像、国民国家の歴史的な位置づけ、歴史研究や歴史教育の役割や意義について、通史的かつ主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前にシラバスに該当する日本史の基礎的知識を補って講義に臨んでください。事後学修として講義内容を整理してください。		
テキスト	特定のテキストは使用しない。		
参考文献	参考文献は講義の中で随時、紹介・配布する。高等学校の日本史の教科書や概説書が手元があれば参考になる。		
評価方法	定期テスト 70%、小テスト 20%、授業への参加度（提出物、授業態度など） 10%		

03年度以降	日本史概説Ⅱ	担当者	會田 康範
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本史概説Ⅰに続くこの講義では、近世から近現代を素材としていく。その際、対外関係に重点をおいて考察していくが、その前提となる政治や社会経済についても触れることになる。この講義を通じて、近世社会を経て近・現代日本における国民国家形成の過程とその展開について考えていきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の導入 2. 中・近世移行期の対外関係 3. 近世初期の対外関係と「鎖国」政策 4. 近世中期の貿易統制 5. 近世における諸学問の発達 6. 内憂外患の時代 7. 幕末・維新期の対外関係 8. 中間まとめ 9. 近代国家の成立 10. 博物館・博覧会と国民国家 11. 明治政府の博覧会政策 12. 戦争の世紀とオリンピック・万博 13. 冷戦と講和 14. 高度経済成長の光と影 15. 講義のまとめ 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる日本列島に展開した前近代の歴史像、国民国家の歴史的な位置づけ、歴史研究や歴史教育の役割や意義について、通史的かつ主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前にシラバスに該当する日本史の基礎的知識を補って講義に臨んでください。事後学修として講義内容を整理してください。		
テキスト	特定のテキストは使用しない。		
参考文献	参考文献は講義の中で随時、紹介・配布する。高等学校の日本史の教科書や概説書が手元があれば参考になる。		
評価方法	定期テスト 70%、小テスト 20%、授業への参加度（提出物、授業態度など） 10%		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	外国史概説 I	担当者	兼田 信一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この講義では、はじめに現代中国の地理的特徴や近年の中国事情を概観した後、新石器時代から唐宋変革期までの歴史展開を、①政治史、②郷里社会の展開、③周辺諸族との関係、を軸に概観していきます。つまり、単に政権の変遷を概観するだけでなく、この時期の基層社会の展開を見ることで、伝統中国社会の一面にふれてみたいと思います。さらに、中国を中心とする地域的世界がどう成立し展開していったかも考えてみたいと思います。</p> <p>なお、付論として、南宋時代の裁判史料『清明集』をもとに「訴訟社会」としての中国社会の一面を取り上げ、宋代以降の中国社会の特徴にも触れてみたいと思います。また、中・高校の教育職を目指す場合、どのように歴史教育に取り組むことが必要かも考えてみたいと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 現代中国概況（地誌・現代中国社会の諸問題） 3. 中華文明の形成（新石器時代～殷周時代） 4. 最初の社会変動と小農民の登場（春秋戦国時代） 5. 皇帝支配の成立・周辺諸族との関係（秦漢時代1） 6. 皇帝支配と郷里社会（秦漢時代2） 7. 統一政権の崩壊と社会変動（後漢～西晋時代） 8. 周辺諸族の侵入と長期分裂（東晋十六国南北朝時代） 9. 中国社会の再統一とその意義（隋時代） 10. 東アジア世界の展開 11. 唐帝国の盛衰1（律令制支配の特質） 12. 唐帝国の盛衰2（律令制の崩壊と基層社会の変化） 13. 宋代社会の一面—裁判史料『清明集』を通してみた— 14. 歴史研究と歴史教育のあいだ 15. 中国社会の特質（まとめ） 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる東洋史・中国史の通史的展開、外国史の学習を通じた世界史教育の意義、異文化理解の複雑性などについて、主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に参考文献の指定部分を読むこと、事後に各回のレジュメに掲げた論述問題の解答を各自作成する。		
テキスト	授業中配布のレジュメ。		
参考文献	堀敏一著『中国通史』（講談社学術文庫 1432）、講談社、2000年6月		
評価方法	授業参加評価（30%）と筆記試験（70%）（語句記述、資料問題、論述、持ち込み不可）で評価する。		

03年度以降	外国史概説Ⅱ	担当者	久慈 栄志
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>ヨーロッパ諸国の「近代化」課程を社会・文化・経済・宗教等の側面から考察する。「近代化」の特質とその功罪を検証し、明治以降のわが国にいかなる影響を与えたか、という点もあわせて論じたい。16世紀頃から20世紀までの歴史的事象の中から、ヨーロッパ圏内はもとより、周辺世界に対してもインパクトが大であった事項を取り上げる。前半は宗教的側面から、後半は経済的側面を中心にアプローチしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小川 哲／上垣 豊／山田史郎／杉本淑彦編 『大学で学ぶ西洋史（近現代）』（ミネルヴァ書房） G.Sサンシャイン 『はじめての宗教改革』（教文館） 堺憲一 『あなたが歴史と出会うとき』【新版】（名古屋大学出版会） 角山栄／村岡健次／川北稔著 生活の世界史10『産業革命と民衆』（河出書房新社） 		<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 歴史叙述・歴史理論の変遷～古代 歴史叙述・歴史理論の変遷～中世 歴史叙述・歴史理論の変遷～近代 歴史叙述・歴史理論の変遷～現代 「近代」の概念について 宗教改革～改革に至る背景 宗教改革～改革の内容とその影響 市民革命～英仏両革命の共通性と異質性 市民革命～その目指したもの 産業革命～技術革新をもたらした背景 産業革命～社会的諸矛盾と社会主義の台頭 「近代化」とは何だったのか～その変質について考える 帝国主義の伸長 帝国主義下における民族意識の台頭 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる東洋史・中国史の通史的展開、外国史の学習を通じた世界史教育の意義、異文化理解の複雑性などについて、主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に高校レベルの基礎知識は各自補っておくこと。また、各テーマの目的を理解した上で授業に臨み、不明な箇所は質問してほしい。		
テキスト	授業中に配布する。		
参考文献	上記参考文献中、2冊程度は目を通してほしい。また高校世界史教科書、図録なども有用と考えられる。		
評価方法	定期試験（記述形式。ノート持ち込み不可）の結果によって評価する（100%）。しかし授業への参加度も考慮する。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	地理学概説 I	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>自然環境と人間のかかわりについて、地理学的観点から具体的な事例をもとに考察する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な自然環境の見方を身につける。</p> <p>本講義では、身近な地域の環境を自然地理学の観点から分析する基礎として、まず地形図の利用法を扱う。その後、関東地方の自然地理的な特色とその基盤の上に立った人々の生活について説明する。</p> <p>*講義科目ではあるが、実習等を行う予定である。色鉛筆、定規等指示された用具を準備すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション (講義の概要) 2.地形図利用の基礎(1) 地形図の基礎知識 3.地形図利用の基礎(2) 距離と面積、等高線と地形 4.地形図利用の基礎(3) 土地利用を読む 5.東京・関東の地形的特色(1)山の手と下町 6.東京・関東の地形的特色(2)台地 7.東京・関東の地形的特色(3)荒川と利根川の低地 8.東京・関東の地形的特色(4)東京湾 9.東京・関東の地形的特色(5)関東山地 10.東京・関東の気候的特色(1)気候システムと気候のスケール、気候と景観、観測とデータ 11.東京・関東の気候的特色(2)山地の気候・平野の気候 12.東京・関東の気候的特色(3)海岸の気候・内陸の気候 13.東京・関東の気候的特色(4)都市気候と気候の変化 14.東京・関東の自然災害と防災(1) 15.東京・関東の自然災害と防災(2) 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる自然的事象に関する基本的な知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容を修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の地域についての学習を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定はしない。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	定期考査（7割）および課題（3割）を総合的に評価する。		

03年度以降	地理学概説 II	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理学の基本的概念を理解し、これらの概念を用いて、どのような研究が行われているかを展望する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な人文地理学の見方・考え方を身につける。</p> <p>本講義では、地理的知識の拡大と地理学の歴史を述べた後、地理学の主要概念のうち「環境」「景観」「場所と立地」「伝播」について解説する。さらに、人文地理学のいくつかのテーマを取り上げ理解の深化を図る。</p> <p>*中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、文部科学省検定済教科書（地理Bおよび地図帳）を購入し、自習しておくこと。（授業時には必要に応じて持参する）</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1.地理学の歴史（1）古代・中世の地理学 2.地理学の歴史（2）近代の地理学 3.地理学の歴史（3）現代の地理学 4.地理学の主要概念（1）環境 5.地理学の主要概念（2）景観 6.地理学の主要概念（3）場所と立地（位置の表記） 7.地理学の主要概念（4）場所と立地（環境とのかかわり） 8.地理学の主要概念（5）場所と立地（立地論） 9.地理学の主要概念（6）地域と空間 10.地理学の主要概念（7）伝播 11.地理学のトピックス（1）メンタルマップ 12.地理学のトピックス（2）時間地理学 13.地理学のトピックス（3）地理情報システムの原理 14.地理学のトピックス（4）地理情報システムの活用 15.地理学のトピックス（5）教育と地理 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる自然的事象に関する基本的な知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容を修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の事例についての学習を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	定期考査（8割）および課題（2割）を総合的に評価する。		

03年度以降	地誌学概説 I	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。地誌学における主要概念である「地域」と地域分析法を理解した上で、日本を事例地域として地誌学的見方を身につけることを目的とする。</p> <p>本講義では、地誌学の方法、「地域」概念について講義した後、地域を扱う上で必要な文献や統計の収集法や利用法、統計分析など地域分析の手法を修得する。その上で、日本地誌を扱う。</p> <p>*講義科目であるが、実習を含むので、色鉛筆、電卓等、授業中に指示された用具は各自用意すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション—地誌学とは 2. 「地域」の概念 3. 地域分析の基礎（1）文献・資料・統計の所在と検索 4. 地域分析の基礎（2）統計の利用 5. 地域分析の基礎（3）統計の地図表現 6. 地域分析の基礎（4）空間分析 7. 地域分析の基礎（5）地域構造 8. 日本地誌（1）自然環境と風土 9. 日本地誌（2）歴史的背景と地域文化 10. 日本地誌（3）人口分布と人口構造 11. 日本地誌（4）第1次産業と地域変容 12. 日本地誌（5）第2次産業と地域変容 13. 日本地誌（6）交通・通信と地域 14. 日本地誌（7）都市の変容 15. 日本地誌（8）地域構造と地域区分 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる地域の概念と地域分析法、日本地誌の知識と日本の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法、ならびに、世界地誌の知識と海外の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容を修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の事例についての学習を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に示される。		
評価方法	定期考査（約7割）および課題（約3割）		

03年度以降	地誌学概説 II	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。本講義では、世界の地域構造を概観したのち、北アメリカ（アメリカ合衆国およびカナダ）を事例地域としてとりあげ、地誌学的見方を身につけることを目的とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 世界認識の基礎 2. 世界の地域構造とその変容（1）自然的基盤 3. 世界の地域構造とその変容（2）文化 4. 世界の地域構造とその変容（3）社会 5. 世界の地域構造とその変容（4）産業と経済 6. 世界の地域構造とその変容（5）国家群 7. 北アメリカ地誌（1）アメリカの地域区分 8. 北アメリカ地誌（2）自然 9. 北アメリカ地誌（3）歴史的背景 10. 北アメリカ地誌（4）人口 11. 北アメリカ地誌（5）社会 12. 北アメリカ地誌（6）第1次産業と経済 13. 北アメリカ地誌（7）第2次産業と経済 14. 北アメリカ地誌（8）都市と生活 15. 北アメリカ地誌（9）北アメリカと世界 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる地域の概念と地域分析法、日本地誌の知識と日本の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法、ならびに、世界地誌の知識と海外の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容を修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の事例についての学習を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に示される。		
評価方法	定期考査（約7割）および課題（約3割）		

03年度以降	法律学概説 I	担当者	湯川 益英
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>私たちの日常は、様々なルールに則って営まれている。人間はそれぞれが個性をもち、それぞれが異なった欲望や欲求をもっているため、相互に矛盾・対立が生じる可能性がある。それゆえ、紛争を解決し、社会を維持・発展させるためには、各人に共通するルールが必要になるのである。</p> <p>法律学概説 I では、そうした諸ルールのうち憲法・民法・刑法・商法・民事訴訟法・刑事訴訟法（いわゆる「六法」）と国際法を中心に概観して、法律についての一般知識を学び、道徳や倫理、慣習や条理も含めて「法とは何か」という根本問題について考える。</p> <p>身近で今日的な具体的事例を引用しつつ、わかりやすく活気のある授業を展開したい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス（法の仕組み、法の学び方） 2. 国家と法—人権と統治（日本国憲法） 3. 財産と法（民法①） 4. 家族と法（民法②） 5. 事故と法（民法③） 6. 犯罪と法（刑法） 7. 企業と法（商法） 8. 民事裁判と法（民事訴訟法） 9. 刑事裁判と法（刑事訴訟法） 10. 労働と法（労働基準法、労働契約法など） 11. 消費者と法（消費者契約法、PL法など） 12. 国際社会と法（国際慣習、条約など） 13. 道徳・倫理・慣習、条理と法（法とは何か①） 14. 法理論と法実践（法とは何か②） 15. 総括 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、憲法および法律の基本概念、（刑事・民事）裁判の仕組みなど、法と裁判に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画に則して、事前にテキストの該当頁を一読し、授業後に再読すること。		
テキスト	テキスト『エッセンシャル法学』（成文堂）。六法（有斐閣の『ポケット六法』など）。		
参考文献	逐次、補足レジュメを配布し、参考文献は適宜紹介する。		
評価方法	定期試験 80%、授業への参加度 20%		

03年度以降	法律学概説 II	担当者	周 劍龍
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「社会あるところに法あり」が意味するように、われわれの人間社会はさまざまなルール（法や規範）により維持され、営まれている。法とは何かについて従来さまざまな議論があり、共通認識（定説）に至っていないのが現状である。</p> <p>法律学概説 II では、法とは何かという問いかけをもとにして、国家、裁判、経済、家族、環境、情報など人間の生活に関わる場面において、法がどのように存在し、またどのように機能するのかを実例を交えながらみていくこととする。</p> <p>こうした作業を終えた時点で、法とは何かについて受講生が自分なりに理解したものを提示できるようにすることは本講義の目的である。そのために、受講生が積極的に授業に参加することを期待する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、法とは何か 2. 法と裁判、裁判の基準 3. 法の発展、法の解釈 4. 近代国家と憲法、権力の分立 5. 基本的人権 6. 犯罪と刑罰 7. 契約の自由、財産 8. 損害賠償、家族 9. 生存と環境保護 10. 労働者の権利 11. 生活の保障 12. 企業、経済と国家 13. 情報化社会 14. グローバル時代と日本 15. 授業のまとめ 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、憲法および法律の基本概念、（刑事・民事）裁判の仕組みなど、法と裁判に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業前に指定したテキストや資料の部分を予習し、授業後授業の内容を復習する。		
テキスト	末川博編『法学入門〔第6版補訂版〕』、六法（有斐閣の『ポケット六法』など）。		
参考文献	随時配布する。		
評価方法	定期試験により成績を評価する（100%）。平常点（授業への参加度）を加点材料とする（上限は10%とする）。一定回数以上の欠席は不可と評価する。詳細について授業の初回に説明する。		

03年度以降	政治学概説 I	担当者	杉田 孝夫
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>政治学は古来より支配の学であった。治者と被治者が身分的に異なっていた時代にあつては、支配身分のための「よき統治」のための学問であった。しかし治者と被治者が原理的に同一であるとされるデモクラシーの時代である現代においては、市民は、共通の法に従うという意味で被治者でありつつ、共通の法をつくり遂行していくためのわれわれの代理人たる治者を選ぶ選挙人であり、政治過程を監視し、評価する政治主体である。</p> <p>政治に対する深い洞察力が求められるのは、政治家や行政官などの専門家だけではない、それ以上に政治社会の構成主体である市民こそ政治についての教養を身につける必要があると言える。そのような意味で、政治学は私たち市民の教養の学である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 1-1 人のいるところに政治あり 2. 1-2 ものの見方としての政治 3. 1-3 政治が現れるとき、政治が隠れるとき 4. 2-1 権力の諸形態 5. 2-2 権力と自由 6. 3-1 古典的リベラリズム 7. 3-2 人格発展のリベラリズム 8. 3-3 社会有機体論 9. 3-4 福祉国家とその批判 10. 4-1 二つの自由の概念 11. 4-2 自律性の条件 12. 4-3 主体と自由／権力 13. 5-1/2 ロールズの正義論とアメリカのリベラリズム 14. 5-3 リバタリアニズムとコミュニタリズム 15. 5-4/5 資源主義と福利主義 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、近現代の政治構造とその特質、国際政治の政治構造と変容など、政治に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	あらかじめテキストの該当箇所を読んで、講義に臨むと関心と理解が深まる。受講後は、図書館で、講義に関連文献を閲覧参照し、ノートを補充整理するとよい。講義の中で紹介する関連文献を手にとって読むとなおよい。		
テキスト	川崎修・杉田敦[編]『新版 現代政治理論』有斐閣 2012年		
参考文献	キムリッカ、W./千葉眞・岡崎晴輝ほか訳『新版 現代政治理論』日本経済評論社 2005年		
評価方法	レポート（40%）と試験（60%）による		

03年度以降	政治学概説 II	担当者	杉田 孝夫
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>治者と被治者が身分的に切り離されていた近代以前においては、政治学は支配身分たる治者のための統治の技術であり教養の学であった。しかし治者＝被治者の関係にあるデモクラシーの現代においては、政治学は政治家や行政官にとって必要な教養である以上に、市民にとって必須の教養である。よき政治家とよき行政官を生み出しかつ評価するのは、われわれ自身だからである。政治は、人間が相互に自由かつ安全に生きていくことを可能にするための相互行為であり、政治の世界は、リアリズムとアイデアリズムの緊張関係の中で営まれる実践知の世界である。政治は、現実を見据えて、リーズナブルな理解と解決策を追求する知的営みである。われわれは、生涯を通じて、他者となんらかの共同的権力関係を形成しながら、その中で相互の自由と安全を享受する。その相互了解された関係をたえず更新していくことなしには安全に生きることすらおぼつかない。その作為性と変更可能性に気づく時、将来の自由と平等と平和のさらなる可能性が開かれる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 6-1 デモクラシー論 2. 6-2 大衆デモクラシー 3. 6-3 現代デモクラシーの諸相 4. 6-4 討議デモクラシーとラディカル・デモクラシー 5. 6-5 ネーションとデモクラシー 6. 7-1 ネーションとナショナリズム 7. 7-2 多文化主義 8. 8-1 フェミニズムの展開 9. 8-2 フェミニズムの政治論への寄与 10. 9-1~3 公共性と市民社会（1）公と私の境界線 11. 9-4~6 公共性と市民社会（2）市民社会論 12. 10 環境と政治 13. 11-1~2 主権国家とウェストファリア体制 14. 11-3~4 国際政治と分権性 15. 11-5~6 グローバリゼーションと国境を超えるデモクラシー 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、近現代の政治構造とその特質、国際政治の政治構造と変容など、政治に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする		
事前・事後学修の内容	あらかじめテキストの該当箇所を読んで、講義に臨むと関心と理解が深まる。受講後は、図書館で、講義に関連文献を閲覧参照し、ノートを補充整理するとよい。講義の中で紹介する関連文献を手にとって読むとなおよい。		
テキスト	川崎修・杉田敦[編]『新版 現代政治理論』有斐閣 2012年		
参考文献	キムリッカ、W./千葉眞・岡崎晴輝ほか訳『新版 現代政治理論』日本経済評論社 2005年		
評価方法	レポート（40%）と試験（60%）による		

03年度以降	社会学概説 I	担当者	前島 賢士
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>社会学は、経済学や経営学、政治学等を含んだ社会科学の一部門である。</p> <p>本講義では、将来社会人となるべき学生が、地方や海外のように社会的背景や文化的背景の異なる場所でもその能力を十分に発揮できるようにするために、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p> <p>学生が社会学の概念や理論を自分のものとする。学生が身につけた社会学の概念や理論を用いて、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 社会学とは何か 3. 自己と社会 4. 家族とジェンダー 5. 市民社会と公共性 6. 階級・階層 7. 教育と労働 8. 都市と地域社会 9. 社会運動 10. エスニシティ 11. 福祉国家と社会福祉 12. 貧困と社会的排除 13. セクシュアリティ 14. 健康と医療 15. まとめ 	
到達目標	「社会学」という学問が成立した経緯をふまえて、社会学的な分析の仕方、社会集団の類型やアイデンティティ形成のメカニズム等を理解し、多文化社会における自己と他者について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各回の授業前に、テキストの指定された箇所を精読すること。各回の授業後には講義で扱った概念や理論を復習すること。		
テキスト	盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士編著『社会学入門』（ミネルヴァ書房、2017年）		
参考文献	授業中に紹介。		
評価方法	定期試験 100%		

13年度以降	社会学概説 II	担当者	前島 賢士
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>社会学は、経済学や経営学、政治学等を含んだ社会科学の一部門である。</p> <p>本講義では、将来社会人となるべき学生が、地方や海外のように社会的背景や文化的背景の異なる場所でもその能力を十分に発揮できるようにするために、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p> <p>学生が社会学の概念や理論を自分のものとする。学生が身につけた社会学の概念や理論を用いて、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p> <p>また、社会問題を学生が身につけた社会学の概念や理論を用いて考察できるようにする。</p> <p>さらに、社会学の重要な古典理論を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 環境と科学技術 3. 災害とボランティア 4. メディアと文化 5. 宗教 6. 犯罪と逸脱 7. 政治と国家 8. グローバリゼーション 9. 社会学の理論と方法 10. マルクスの社会理論 11. テンニースの社会学理論 12. ジンメル社会学理論 13. デュルケムの社会学理論 14. ヴェーバーの社会学理論 15. まとめ 	
到達目標	社会学の学説をふまえて、近代社会が抱える問題や、多文化の共生を視野に入れながら、現代の日本社会が直面する課題について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各回の授業前に、テキストの指定された箇所を精読すること。各回の授業後には講義で扱った概念や理論を復習すること。		
テキスト	盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士編著『社会学入門』（ミネルヴァ書房、2017年）		
参考文献	授業中に紹介。		
評価方法	定期試験 100%		

03年度以降	社会学概説Ⅰ	担当者	岡村 圭子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>私たちのまわりには、さまざまな他者がいる。電車で隣に座った人も、家族や親しい友人も「他者」である。たいていの場合、他者は自分の思い通りに動いてはくれない。しかし、そういった他者たちと社会的関係を築かなくては、私たちは生活できない。それゆえ、社会を扱う学問である社会学では「他者other(s)」が重要なキー概念となっている。さらに、他者について考えることは、「自己(わたし)」について考えることでもある。本講義では、社会学の基礎知識をふまえて、先行研究を現代的な文脈で捉え、社会学が生まれた経緯と社会的視点、さらにアイデンティティ形成のメカニズムについて学ぶ。それをとおして社会のなかに生きる「他者と自己」の関係を考えてみよう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 社会的視座とは 3. 社会学の歴史(1) —A.コント、H.スペンサー 4. 社会学の歴史(2) —E.デュルケム 5. 社会学の歴史(3) —M.ウェーバー 6. 社会の類型(1) —コミュニティとアソシエーション 7. 社会の類型(2) —ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 8. 社会の類型(3) —第一次集団 9. Identity形成と社会(1) —鏡に映った自己 10. Identity形成と社会(2) —重要な他者 11. Identity形成と社会(3) —マージナル・マン 12. Identity形成と社会(4) —未定 13. 補完的アイデンティティについて 14. 他者と自己の社会学 15. まとめ 	
到達目標	「社会学」という学問が成立した経緯をふまえて、社会的な分析の仕方、社会集団の類型やアイデンティティ形成のメカニズム等を理解し、多文化社会における自己と他者について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	身分証明書以外に私が私であることを証明するものはなにか、考えておく。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		
評価方法	授業への積極性(小レポートや提出物) 50%、 期末試験 50%		

13年度以降	社会学概説Ⅱ	担当者	岡村 圭子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>わたしたちが日常的に何気なく行っていることや「あたりまえ」だと思っていること、あるいは「社会問題」と呼ばれる事象について、社会的な見地から分析してみるとどうだろうか。それまで見えていなかったことが見えてくるかもしれない。それまで気づいてさえいなかったことが突然気になりだすかもしれない。</p> <p>本講義では、近代の都市社会やグローバル化が抱える問題についての研究業績を知り、それを手がかりにしながら、わたしたちにとって身近な出来事を社会的に考えてみたい。とくに「都市」「移民」「地域」「大量消費」「社会的逸脱」といったキー概念を中心に扱う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 社会的性格と「自由からの逃走」 —E.フロム 3. 同調様式の3類型 —D.リースマン 4. 都市化と移民 —W.I.トマスとF.W.ズナニエツキ 5. 同心円地帯説 —E.バージェス 6. シカゴ学派と都市問題 —R.パーク 7. 予言の自己成就 —R.K.マートン 8. 誇示的消費 —T.ヴェブレン 9. 認知的不協和の理論 —L.フェスティンガー 10. 文化的再生産 —P.ブルデュエ 11. コンフルエント・ラブ —A.ギデンズ 12. 現代社会を社会的にみる(1) 情報技術とメディア 13. 現代社会を社会的にみる(2) グローバル化 14. 現代社会を社会的にみる(3) ローカル化 15. まとめ 	
到達目標	社会学の学説をふまえて、近代社会が抱える問題や、多文化の共生を視野に入れながら、現代の日本社会が直面する課題について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	グローバル化と都市化がもたらす光と影について考えておく。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		
評価方法	授業への積極性(小レポートや提出物) 50%、 期末試験 50%		

03年度以降	哲学概説Ⅰ	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>昨今、哲学の復権が唱えられ自分探しの一環として哲学が一種の流行となっているが、それらをも包摂し相対化する視点こそが、今求められている。一般教養としての哲学的知識も教職に必要であるが、教師として以前に、一人の人間として真摯に生きるために「哲学」が持つ意義を考えてもらいたい。</p> <p>西欧思想を歴史的にもしくは主題別に辿ることが、本講義の概要であるがそこには二つの偏りが存在していることを意識しつつ論じて行きたい。</p> <p>西欧哲学としての偏りと明治以降の輸入哲学としての偏りである。哲学をギリシア起源の「学」としてのみ捉えるのではなく、幅広く「思想」として捉え、政治・社会・宗教・歴史・科学等への影響をも視野に入れて論じたい。</p> <p>個々の思想家の経歴や思想の細部の紹介は、テキストに譲り、彼らがその思想を形成した動機や課題、歴史的位置付けなどを重視して論じる。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 哲学とは何か 哲学の誕生(アルケーへの問) 2. ソクラテス以前 ミレトス学派とエレア学派 3. ソクラテス以前 多元論とソフィスト 4. ソクラテス 5. プラトン アイデア論 6. プラトン 理想国とアイデア論 7. アリストテレス 実体論(ヒュレーとエイドス) 8. アリストテレス 目的論的世界観 9. スコラ哲学 プラトンとアリストテレスの影響 10. スコラ哲学 知と信 11. 科学革命 パラダイムの転換 12. 科学革命 ガリレオとニュートンの意義 13. 合理論 コギト・エルゴ・スム 14. 合理論 デカルトの実体論 15. 合理論 デカルト的二元論への対応 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、「哲学」の意義、個々の思想家がその思想を形成した動機や課題、歴史的位置付けなど、哲学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	プリント資料配布 (実費 300 円)		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	レポート点を試験の点に加算。 (出席は2/3以上必要)		

03年度以降	哲学概説Ⅱ	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(春学期と同じ)</p> <p>秋学期のみを受講することは、出来るだけ避けてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 経験論 ロックの認識論 2. 経験論 バークリーとヒューム(実体概念の否定) 3. 社会契約説 4. カント 理性批判とコペルニクスの転回 5. カント 自律と人格の共同体 6. ドイツ観念論 フィヒテによるカント批判 7. ドイツ観念論 世界精神の自己展開としての歴史 8. キルケゴール・マルクス・ニーチェ 実存と世界の変革 9. キルケゴール・マルクス・ニーチェ 超人思想 10. フッサール・ハイデgger・ヤスパーズ 現象学 11. フッサール・ハイデgger・ヤスパーズ 世界内存在と実存哲学 12. ウィトゲンシュタイン 13. 構造主義 14. 言語哲学 15. 哲学とは何か 伝統的哲学観からの転換 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、「哲学」の意義、個々の思想家がその思想を形成した動機や課題、歴史的位置付けなど、哲学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	プリント資料配布 (実費 300 円)		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	レポート点を試験の点に加算。 (出席は2/3以上必要)		

03年度以降	倫理学概説 I	担当者	林 永強
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義は倫理論理の諸説を考察し、倫理学の基礎を探究する。具体的には、功利主義、義務論、徳倫理学、私的と公共、正義と平等、共生倫理学を取り上げて分析する。</p> <p>授業の進行としては、各論理に関する文献を纏めて講義を行う一方、発表を通して議論する。教職科目でもあり、学校という現場で伝達・理解しやすい表現にて倫理学全般の基礎を幅広く修得するものである。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 倫理学の定義と方法論 3. 功利主義I：快樂と苦痛 4. 功利主義II：J.S. ミル 5. 義務論I：義理と義務 6. 義務論II：カント 7. 徳倫理学I：古代ギリシャからマッキンタイアまで 8. 徳倫理学II：マッキンタイア以降 9. 私的と公的：滅私奉公から滅公奉私へ 10. 私的と公的：活私開公から公共哲学へ 11. 正義と平等I：古代ギリシャからロールズまで 12. 正義と平等II：ロールズ以降 13. 共生倫理学I：エゴイズムから共生へ 14. 共生倫理学II：シンバイーシスとコンヴィヴィアリティ 15. まとめ 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる倫理学の全般的知識、社会や人生における基礎的・基本的な事柄に関する考え方を生徒に理解させるための言語表現力を習得し、倫理を説くことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	文献を事前に精読し、授業中に積極的に議論する。		
テキスト	授業時に適宜指示。		
参考文献	授業時に適宜指示。		
評価方法	発表及び議論（40%）、レポート（60%）		

03年度以降	倫理学概説 II	担当者	林 永強
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>応用倫理学の諸論理を概説し、現代社会の問題に沿って検討する。具体的には、科学技術、環境、医療、情報、そしてビジネス倫理学を取り上げ、実社会の諸問題にどう向き合うかと考えていく。</p> <p>授業の進行としては、各論理に関する文献を纏めて講義を行う一方、発表を通して議論する。教職科目でもあり、学校という現場で伝達・理解しやすい表現にて倫理学全般の基礎を幅広く修得するものである。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 応用倫理学の定義：論理と応用 3. 応用倫理学の方法論：観念と事例 4. 科学技術倫理学I：定義と起源 5. 科学技術倫理学II：安全と安心 6. 環境倫理学I：定義と方法 7. 環境倫理学II：自由と義務 8. 医療倫理学I：定義と原則 9. 医療倫理学II：自律と他律 10. 情報倫理学I：定義と課題 11. 情報倫理学II：私益と公益 12. ビジネス倫理学I：定義と背景 13. ビジネス倫理学II：商業と道徳 14. ビジネス倫理学III：秘密と公開 15. まとめ 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる倫理学の全般的知識、社会や人生における基礎的・基本的な事柄に関する考え方を生徒に理解させるための言語表現力を習得し、倫理を説くことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	文献を事前に精読し、授業中に積極的に議論する。		
テキスト	授業時に適宜指示。		
参考文献	授業時に適宜指示。		
評価方法	発表及び議論（40%）、レポート（60%）		

03年度以降	宗教学概説 I	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>戦後教育が宗教について意識的に或いは無意識的に避け続けてきた為、現代の日本人は宗教に関して一種の「真空状態」に置かれており、そこから様々な問題が昨今生じている。</p> <p>そこで本講義は、宗教学の学的体系性よりも、むしろ諸宗教の歴史と現在についての一般的概括的知識を得られるようにすることを重点とする。</p> <p>更に教職科目であることにも鑑み、宗教教育のあり方についても論じたい。</p> <p>春学期は洋の東西、今昔を問わず世界史上の諸宗教の歴史と現在について説明し、宗教の果たして来た役割・問題点について考えてもらう。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 宗教とは何か 宗教学の誕生と宗教観 2. 神話と宗教 3. ユダヤ教 (1) 民族の歴史 4. ユダヤ教 (2) 契約と律法 5. キリスト教 (1) イエスの生涯と福音書 6. キリスト教 (2) 初期キリスト教の多様性 7. キリスト教 (3) ローマ帝国から中世ヨーロッパ 8. キリスト教 (4) 近現代のキリスト教 9. イスラム教 (1) ムハンマドの生涯 10. イスラム教 (2) コーランとハディース 11. イスラム教 (3) スンニ派とシーア派 12. イスラム教 (4) 現代のイスラム教 13. ヒンドゥ教 (1) アーリヤ人とヴェーダの宗教 14. ヒンドゥ教 (2) バラモン教とウパニシャッド哲学 15. ヒンドゥ教 (3) ヒンドゥ教の成立 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、宗教学の成り立ちや学問的性格、諸宗教の歴史と現在、宗教団体や宗教教育の問題点など、宗教学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	『世界が分かる宗教社会学入門』橋爪大三郎著 ちくま文庫		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	レポート点を試験の点に加算。 (出席は2/3以上必要)		

03年度以降	宗教学概説 II	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的は春学期に同じ。春学期の続きの後に秋学期は、日本の宗教の歴史と、日本人の宗教的心性の形成にまず触れ、その後に宗教的諸概念についての理解を深め、日本や欧米の先進国において宗教集団が現在持っている意義や問題点を論じた上で、宗教教育の是非・可能性を論じる。</p> <p>秋学期のみを受講することは、出来るだけ避けてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 仏教 (1) 釈迦の生涯 2. 仏教 (2) 初期仏教の教え 3. 仏教 (3) 分裂と多様な仏教 4. 仏教 (4) 大乘仏教と日本 5. 儒教 (1) 中国古来の民間信仰と「儒」 6. 儒教 (2) その宗教性 7. 道教 (1) 中国史と道教の成立 8. 道教 (2) 現代中国と道教 9. 日本の宗教の歴史と現在 (1) 儒仏道の伝来と神道以前 10. 日本の宗教の歴史と現在 (2) 神仏習合と修験道 11. 日本の宗教の歴史と現在 (3) 神仏分離、国家神道、政教分離 12. 宗教団体の諸問題 (1) 伝統的教団と新宗教 13. 宗教団体の諸問題 (2) カルト教団 14. 学校教育と宗教 15. 宗教とは何か 宗教の本質への問 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、宗教学の成り立ちや学問的性格、諸宗教の歴史と現在、宗教団体や宗教教育の問題点など、宗教学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	『世界が分かる宗教社会学入門』橋爪大三郎著 ちくま文庫		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	レポート点を試験の点に加算。 (出席は2/3以上必要)		

03年度以降	心理学概説 I	担当者	利根川 明子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義を通して、心理学がいかにして人の心を科学的にとらえようとしてきたかを理解してもらいたい。また、心理学の基本的知識を習得し、同時に、社会の諸問題や人間の行動を心理学的視点で捉える力を身につけてほしい。</p> <p>本講義では、現代心理学の成立過程について概観した上で、知覚、記憶、学習、動機づけなど現代心理学の主要テーマについて、実証研究に基づいたデータを示しながら説明していく。</p>		<p>第1回：はじめに：科学としての心理学 第2回：心理学のあゆみ①：知覚 第3回：心理学のあゆみ②：記憶 第4回：心理学のあゆみ③：学習 第5回：心理学のあゆみ④：動機づけ 第6回：心理学のあゆみ⑤：思考 第7回：心理学のあゆみ⑥：パーソナリティ 第8回：心理学のあゆみ⑦：発達 第9回：心理学のあゆみ⑧：感情 第10回：心理学のあゆみ⑨：対人関係 第11回：現代社会と心の病①：ストレスとパーソナリティ 第12回：現代社会と心の病②：ストレスとコーピング 第13回：教育と心理学①：知能と学力 第14回：教育と心理学②：授業と実践 第15回：まとめ</p>	
到達目標	<p>公民の授業を行う際に必要とされる心理学の成立過程、現代心理学の基本的な考え方を理解し、社会の諸問題や人間の行動を心理学的視点で捉えて分析し、見解を提示できるようにする。</p>		
事前・事後学修の内容	<p>事前学修では、授業計画に示した各回のテーマについて参考文献をもとに予習する。 事後学修では、講義内容について配布資料や文献をもとに自分なりの言葉で説明できるようにする。</p>		
テキスト	指定しない。		
参考文献	授業にて適宜提示する。		
評価方法	業内課題（20%）と試験（80%）により総合的に評価する。		

03年度以降	心理学概説 II	担当者	田口 雅徳
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>受講者にさまざまな心理検査やグループ・ワークなどを実践してもらおう。これらの学習を通して、心理学の基本的知見を習得してほしい。また、心理検査の結果を分析して自己理解を深めてもらうことも本講義の目的である。心理検査やグループワークを実践した後は、結果をレポートにまとめてもらう。</p> <p>※履修者には授業で使用する心理検査用紙の実費（2000円）を負担してもらおう。履修が決定したら自動発行機で申請書を購入すること。授業時に申請書と引き換えに検査用紙を配布する。初回の授業にて履修制限や検査用紙代納入方法について説明するので欠席しないこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 心理検査とは？ 2. 心理検査の種類と理論 3. Y-G性格検査（理論的背景と検査の実施） 4. Y-G性格検査（検査結果の分析・解釈） 5. ストレス・コーピング 6. 職業への興味 7. 知能検査 8. EQS 9. 性格5因子 10. TEG 11. グループ・ワークによる自己理解（非言語的理解） 12. グループ・ワークによる自己理解（言語的理解） 13. グループ・ワークによる自己理解（他者と自己） 14. テスト・バッテリーに基づく自己理解 15. まとめ 	
到達目標	<p>公民の授業を行う際に必要とされる心理学の成立過程、現代心理学の基本的な考え方を理解し、社会の諸問題や人間の行動を心理学的視点で捉えて分析し、見解を提示できるようにする。</p>		
事前・事後学修の内容	<p>各回で扱う心理検査について、その背景理論などを事前に学修する。事後にあつては、心理検査の結果を踏まえて授業で指示した課題をおこないレポートにより提出する。</p>		
テキスト	各種の心理検査用紙は一括で購入する。検査用紙購入にかかる費用を履修登録時に負担してもらおう。		
参考文献	各回で参考文献は異なるので、各回の授業にて紹介する。		
評価方法	実施した心理検査の結果をレポートにまとめて提出してもらおう（50%）、また、最終レポートを課す（50%）。これらのレポート内容を総合し、最終の評価を決定する。		

13年度以降	東洋史Ⅰ	担当者	熊谷 哲也
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(講義目標)</p> <p>西アジアの歴史について講述する。イスラーム世界の歴史を知ることにより、彼らが何を規範とし、何に価値を置き、何を理想として求めてきたかを考えてみたい。</p> <p>(講義概要)</p> <p>7世紀における預言者ムハンマドの出現から16世紀にいたる歴史を概観し、広大なイスラーム世界が形成されるまでを理解する。宗教、社会、文化についての基本的な知識も学ぶ。</p> <p>なお、毎回出席をとる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イスラームにの基本事項について説明する。 2. イスラーム教の誕生以前の世界について。 3. 預言者ムハンマド(マホメット)の出現と、時代背景。 4. 最初の4人のカリフ(正統カリフ)の時代について。 5. ウマイヤ朝の歴史。「アラブ帝国」の意味。 6. アッバース朝の歴史。「イスラーム帝国」の意味。 7. イスラーム教の聖典コーラン、ハディース。 8. アッバース朝時代から発達したアラビア科学。 9. アッバース朝下に出現しはじめた軍事政権。 10. マムルーク朝について。とくにイクター制が西ヨーロッパの封建制と比較される点。 11. 同 その2 12. ヨーロッパ世界とイスラーム世界との関係。 13. 同 その2 14. 歴史にみられるイスラーム教徒の生活と社会。 15. まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に自分の興味や疑問点をまとめておき、事後に内容を整理しておくこと。		
テキスト	特に定めない。授業で指示する。		
参考文献	特に定めない。授業で指示する。		
評価方法	レポートの評価(70%)と平常点(30%)。レポートの表紙は授業で配布するので注意すること。		

13年度以降	東洋史Ⅱ	担当者	熊谷 哲也
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(講義目的)</p> <p>イスラームは今日の国際情勢を読むための主要なキーワードであるが、その鍵を解くためにも、彼らの歴史を理解することはとても大切である。皆さんの視野が広がることを目標とする。</p> <p>(講義概要)</p> <p>イスラーム世界の近代化の歴史を地域別・テーマ別に考察する。今日イスラームがかかわるさまざまな国際関係についても、理解が深められるよう留意したい。</p> <p>なお、毎回出席をとる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オスマン朝の成立と発展について考察する。 2. 欧米列強による帝国主義とイスラーム世界。 3. 「西洋の衝撃」とイスラーム改革運動。 4. さまざまなイスラーム改革運動について考える。 5. パレスチナ問題とエジプトの近代化について。 6. トルコの近代化とその過程について考える。 7. 近代化がイスラーム世界の人々におよぼした影響。 8. 宗教と近代化との関係について検討する。 9. 近・現代のアラブ世界の文化について考える。 10. 20世紀のイスラーム世界について考える。 11. 現在のアラブ諸国のかかえる問題を検討する。 12. 同 その2 13. 同 その3 14. 今日のイスラーム主義の主張と展開。 15. まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に自分の興味や疑問点をまとめておき、事後に内容を整理しておくこと。		
テキスト	特に定めない。授業で指示する。		
参考文献	特に定めない。授業で指示する。		
評価方法	レポートの評価(70%)と平常点(30%)。レポートの表紙は授業で配布するので注意すること。		

13年度以降	東洋史Ⅰ	担当者	張 士陽
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代の東アジア世界をより深く理解するために、その成立の背景となる中国近代史について講義します。</p> <p>19世紀前半、中国は内外の諸要因から激動の時代を迎えます。2000年間、王朝交替を繰り返しながら存続してきた皇帝支配体制は最大の危機に直面します。</p> <p>清朝国家は体制存続のために様々な改革を実施します。講義ではこの時期の社会秩序や経済活動の変動に対して、当時の人々がどのように対応したかを中心に考えていきたいと思います。</p> <p>中国近代史では政治経済の短期的変動に関心が向きがちですが、伝統中国社会の特質の変容と再編という点も視野に入れる予定です。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 清朝体制：皇帝支配 3 清朝体制：科挙と地方統治 4 アヘン戦争と冊封・朝貢体制の動揺 5 太平天国 6 体制の反撃 7 回民反乱 8 万国公法と西学受容 9 開港場の社会と経済 10 農村社会の変容 11 朝鮮半島をめぐる日清対立 12 台湾事件と台湾出兵 13 新疆をめぐる紛争 14 清末新宗教の活動 15 まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定箇所を事前に読むこと。授業時に紹介した関連文献を図書館などで探し読むこと。		
テキスト	並木頼寿・井上裕正『世界の歴史 19 中華帝国の危機』（中公文庫S22-19）中央公論新社 2008年		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	定期試験 80%、平常点 20%		

13年度以降	東洋史Ⅱ	担当者	張 士陽
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代の東アジア世界をより深く理解するために、その成立の背景となる中国近代史について講義します。</p> <p>19世紀後半、清朝はベトナム・ビルマ・琉球などの宗主権を喪失する一方、朝鮮半島ではその主導権をめぐる日本と対立し日清戦争が勃発します。その敗北によって清朝体制の存続は危機的状況に陥ります。この時代に伝統の創造により中国の変革を目指した人々、さらなる変革を求めて「革命」を選んだ人々などの思想と行動を検討し、また地方自治改革と地域社会の対応の軌跡をたどりながら、中華民国初期の近代国家建設の試みとその挫折を検証します。</p> <p>中国近代史では政治経済の短期的変動に関心が向きがちですが、伝統中国社会の特質の変容と再編という点も視野に入れる予定です。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 周辺地域の宗主権の喪失 3 清仏戦争 4 劉銘伝の台湾近代化政策 5 日清戦争 6 台湾民主国の抵抗 7 変法改革 8 戊戌の政変 9 キリスト教と反キリスト教暴動 10 義和団の蜂起 11 纏足問題と天足運動 12 革命派の台頭 13 地方自治の試み 14 王朝体制の崩壊と中華民国の誕生 15 まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定箇所を事前に読むこと。授業時に紹介した関連文献を図書館などで探し読むこと。		
テキスト	並木頼寿・井上裕正『世界の歴史 19 中華帝国の危機』（中公文庫S22-19）中央公論新社 2008年		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	定期試験 80%、平常点 20%		

13年度以降	西洋史Ⅰ	担当者	佐藤 唯行
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>春学期の前半ではユダヤ人たちがアメリカに渡る以前のヨーロッパでの「負け犬」時代を学ぶ。特にユダヤ人差別の発生メカニズムについて解明する。</p> <p>後半では「負け犬」だったユダヤ人たちがアメリカで迎った苦難の歴史と、多数派からの抑圧をはねのけ共生の道を模索してきた姿を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 中世英国のユダヤ人金融 2. 西洋キリスト教世界初の一国規模のユダヤ人追放が行われた原因を探る —1290年のイングランド— 3. 隠れユダヤ教徒の足跡、1290～1656 4. 千年王国思想とユダヤ人再入国 5. 17～18世紀英国の外国貿易とユダヤ人 6. 英国人地主貴族社会への同化現象 7. 移民排斥と反ユダヤ暴動発生のメカニズム 8. 英国ファシスト勢力との対決とナチス政権からの亡命ユダヤ人の受け入れ 9. 現代英国のユダヤ人社会 10. アメリカにおける反ユダヤ主義の特色 11. 植民地時代、建国初期における反ユダヤ主義の不在 12. 南北戦争期における反ユダヤ主義の出現 13. 公民権闘争期のユダヤ教会堂爆破 14. 1970年代以後の反ユダヤ主義 15. 閉ざされた象牙の塔、高等教育におけるユダヤ人排斥 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいて下さい。また授業で学んだ箇所を事後に復読して下さい。		
テキスト	『アメリカのユダヤ人迫害史』佐藤唯行（2000年 集英社新書 740円） 『英国ユダヤ人』佐藤唯行（1995年 講談社選書 1600円）		
参考文献	特になし。		
評価方法	評価は筆記試験によって決定する(100%)。出席はとりません。試験は自筆ノート、テキストの持ち込み可。12択20問の Quiz 形式。		

13年度以降	西洋史Ⅱ	担当者	佐藤 唯行
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>秋学期では世界で最も典型的な多人種・多民族社会アメリカを舞台に、そのエスニック・ヒストリーを学ぶ。</p> <p>各人種・民族集団間相互のあつれきを生みだしたメカニズムを解明し、対立を回避し、相互理解と和解の道を模索する様々な努力を紹介する。</p> <p>こうしたアメリカ社会の努力は「外国人たちとの共生」の道を模索せねばならぬ我々日本人にとっても有益な示唆を与えるはずである。</p> <p>下記二冊のテキストにそってアメリカの人種関係史について学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ユダヤの経済力はなぜ解明されなかったのか 2. 情報・通信産業のユダヤ人 3. メディア産業のユダヤ人 4. 小売業のユダヤ人 5. 不動産業のユダヤ人 6. 伝統的ユダヤ・ビジネス 7. ウォール街のユダヤ人 8. ユダヤ系投資銀行の興亡 9. ユダヤ人企業家成功の原因とは 10. 大都市移民ゲッターのエスニック・コンフリクト 11. 自動車王ヘンリー・フォードの反ユダヤ・キャンペーン 12. 甦る儀式殺人告発、20世紀アメリカで復活した中世ヨーロッパ起源の反ユダヤ主義 13. アメリカにおける反ユダヤ主義の特色 14. アメリカ南部における反ユダヤ主義、レオ・フランク事件 15. まとめ 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいて下さい。また授業で学んだ箇所を事後に復読して下さい。		
テキスト	『アメリカのユダヤ人迫害史』佐藤唯行（2000年 集英社新書 740円） 仮題『アメリカのユダヤ大富豪』佐藤唯行（2018年 PHP 研究所電子書籍版 1120～560円）		
参考文献	特になし。		
評価方法	春学期と同じ。		

13年度以降	西洋史 I	担当者	黒田 多美子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(記憶の継承：ホロコーストと否定論者)</p> <p>日本ではドイツの歴史と聞くと「ホロコースト」を想起する人が多いでしょう。本講義では、反ユダヤ主義の歴史的経緯やナチ体制下での迫害の変容をたどることによって、ナチ体制下でなぜ未曾有の大量虐殺に至ったのかを解明する手掛かりとしたいと思います。さらにその記憶を後の世代に継承していくための記念碑を紹介します。しかし、一方で、そうした歴史的事実を否定する人々も後を絶ちません。そこで、否定論者の主張を分析し検討していきます。本講義の目的は、以上の分析を通じて、受講生が自国の歴史問題を考える際の分析力を涵養することにあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1) ガイダンス 2) 反ユダヤ主義 (中世から近代まで) 3) 「人種論」と反セム主義 4) 第一次世界大戦と戦争責任 5) ナチ体制下のユダヤ (人) 迫害 6) ナチ体制下の諸民族虐殺 7) 犠牲者の追悼と記念碑 8) ホロコースト記念碑 9) ホロコーストを否定する人々 10) 否定論者の主張と意図 11) 否定論者の系譜 12) 映画『否定と肯定』 13) 映画『否定と肯定』をめぐる 14) 日本の記念碑と否定論者 15) まとめ 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業内容に関する課題などで、事前学修または事後学修を行います。		
テキスト	必要に応じて授業時に配布します。		
参考文献	授業時に適宜紹介します。		
評価方法	授業時の課題とレポート 90%、授業への参加度 10%を目安に総合的に評価します。		

13年度以降	西洋史 II	担当者	黒田 多美子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(ドイツにおける戦争責任と歴史認識)</p> <p>本講義では、ドイツが第二次世界大戦後、自国の「負の遺産」にどう対処したか、あるいはしようと努めてきたのか、さらに戦争の記憶をどのような視点から後の世代に伝えていこうとしているのかを考察していきたいと思います。自国の「過去」とどう向き合うかという歴史認識は、その時々政治風土とも大きくかかわっています。また、自国の歴史を後の世代にどのように伝えようとしているかという点は、特に学校での歴史教育のあり方に顕著に表れています。そこで、ドイツの学校ではどのような観点から、またどのような方法で歴史の授業が行われているかを紹介します。そのうえで、日本の歴史認識と比較し、検討したいと思います。この講義を通じて、受講生はドイツにおける歴史認識の変遷と現在の教育実践についての知識を習得すると同時に、日本における歴史認識についても考察することが期待されます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1) ガイダンス 2) 第一次世界大戦とドイツの戦争責任 <ol style="list-style-type: none"> ①開戦をめぐる ②ドイツ革命 ③ヴェルサイユ条約 3) 4) 5) 第二次世界大戦後の歴史認識の変遷 <ol style="list-style-type: none"> ①経済復興とタブー ②歴史家論争など ③「国防軍の犯罪」展など 6) 7) 8) 学校での歴史の授業 <ol style="list-style-type: none"> ①ドイツの教育制度 ②歴史の授業 ③教科書の記述 ④試験・大学入学試験 9) 10) 11) 12) 歴史認識の日独比較 <ol style="list-style-type: none"> ①資料分析 ②国民の責任 ③加害と被害 13) 14) 15) まとめ 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業内容に関する課題などで、事前学修または事後学修を行います。		
テキスト	必要に応じて授業時に配布します。		
参考文献	授業時に適宜紹介します。		
評価方法	授業時の課題とレポート 90%、授業への参加度 10%を目安に総合的に評価します。		

13年度以降	地理学Ⅰ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたるが、本講義では、人間の居住環境が人間にとってどのような意義をもっているのかという視点から、世界の地理を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、地理学における主要な概念や方法を説明する。その上で、人間の活動の舞台である自然環境について学習する。自然環境にもとづいて地域区分を行い、地域ごとに自然的基盤とそこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。まとめとして、世界の環境問題について、具体的な問題を取りあげ、地球的視点から検討する。春学期は自然環境の成り立ちと熱帯地域および砂漠地域の諸相を検討する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 自然と人間とのかかわり 3 環境の諸要素（1）地球の特質 4 環境の諸要素（2）地形環境 5 環境の諸要素（3）気候環境 6 環境の諸要素（4）植生と土壌 生態系 7 熱帯地域（1）自然的特質と伝統的農業 8 熱帯地域（2）アジアの稲作 9 熱帯地域（3）熱帯の開発と問題（マレーシアの例） 10 熱帯地域（4）熱帯の開発と問題（アマゾンの例） 11 砂漠地域（1）自然的特質と伝統的生業 12 砂漠地域（2）イスラムの世界 13 砂漠地域（3）石油資源と近代化 14 砂漠地域（4）アラブとイスラエル 15 まとめ 	
到達目標	地理的な知識と地理的見方・考え方を習得し、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているかという視点から、世界の地理を概観のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	該当地域の自然・人文・社会について高校レベルの内容を復習する。その地域のニュースを地理的な視点から読み解く。		
テキスト	授業中に示す。		
参考文献	山本他『自然環境と文化』他授業中に示す。		
評価方法	定期考査 100%		

13年度以降	地理学Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたるが、本講義では、人間の居住環境が人間にとってどのような意義をもっているのかという視点から、世界の地理を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、地理学における主要な概念や方法を説明する。その上で、人間の活動の舞台である自然環境について学習する。自然環境にもとづいて地域区分を行い、地域ごとに自然的基盤とそこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。まとめとして、世界の環境問題について、具体的な問題を取りあげ、地球的視点から検討する。秋学期は、温帯地域、冷帯地域、寒帯地域および世界の環境問題について扱う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 温帯地域（1）自然的特質 2 温帯地域（2）地中海地域 3 温帯地域（3）西ヨーロッパ（歴史と文化） 4 温帯地域（4）西ヨーロッパ（産業と経済） 5 温帯地域（5）北米の温帯地域（歴史と文化） 6 温帯地域（6）北米の温帯地域（産業と経済） 7 温帯地域（7）アジアの温帯地域（歴史と文化） 8 温帯地域（8）アジアの温帯地域（産業と経済） 9 冷帯地域（1）北欧諸国・ロシア 10 冷帯地域（2）カナダ 11 寒帯地域 12 世界の環境問題（1）人口と食料 13 世界の環境問題（2）酸性雨と公害問題 14 世界の環境問題（3）地球の温暖化 15 まとめ 	
到達目標	地理的な知識と地理的見方・考え方を習得し、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているかという視点から、世界の地理を概観のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	該当地域の自然・人文・社会について高校レベルの内容を復習する。その地域のニュースを地理的な視点から読み解く。		
テキスト	授業中に示す。		
参考文献	山本他『自然環境と文化』他授業中に示す。		
評価方法	定期考査 100%		

13年度以降	地誌学Ⅰ	担当者	犬井 正
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義では地域差が自然環境と経済環境、および社会環境と文化環境がどのように関連して生み出されてきたのかを、地理学・地誌学の視点から地域生態システムとして明らかにする。まず、環境の諸要素を概観し、特に気候・植生の特色、成因、構造について学習する。その後、エコツアーが地域資源の保全や地域振興に果たす役割を取り上げ、人間の活動の舞台である自然環境と、そこで繰り広げられている人々の生活様式をスライド、VTRを用いながら説明する。基本的には、自然資源の適正利用に関わる持続性は、地域の生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤の相互関係からなるフレームワークで捉えることが可能となることを学修する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション講義の概要 2. 地域生態論と自然生態論 3. 地域生態論とはー地理学と地誌学 4. 環境の諸要素(1)気候環境 5. 環境の諸要素(2)緯度帯別降水量・蒸発量・気温 6. 環境の諸要素(3)植生と生きもの 7. 地域生態論とエコツアー 8. 熱帯地域(1)熱帯林と伝統的生活様式 9. 熱帯地域(2)熱帯林の開発 10. 熱帯地域(3)熱帯林の環境問題 11. 熱帯地域(4)熱帯林の保全 12. マングローブの生態 13. マングローブ林の保全とエコツアー 14. キャリングキャパシティとゾーニング 15. 講義のまとめー自然生態系と社会生態 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には配布資料により学修内容を整理する。		
テキスト	犬井正著『エコツアーリズムこころ躍る里山の旅ー飯能エコツアーに学ぶ』(丸善出版、2017年)		
参考文献	講義時に紹介。		
評価方法	定期試験の結果に(80%)によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績(20%)も評価対象とする。		

13年度以降	地誌学Ⅱ	担当者	犬井 正
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「地域生態論 a」に続いて、「地域生態論 b」では人間社会をシステム概念を用いて捉え、地形の成因、構造、人間生活とのかかわりを学習し、人間の活動の舞台である自然環境と、そこで繰り広げられている人々の生活様式を説明し自然生態系と社会生態系の枠組みを理解する。その際に、エコツアーを取り上げ地域資源の保護や保全にどのような役割が果たせるのかを、埼玉県飯能市を取り上げエコツアーの実態と方法について学修する。</p> <p>授業の際にスライド、VTRを用いながら説明する。基本的には、そのような資源の適正利用に関わる持続性は、地域の生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤の相互関係からなるフレームワークで捉えることが可能となる。地域における資源や環境の持続的な利用の仕組みを、エコツアーを取り上げながら明らかにし、それらの資源の存在形態や存在意義を的確に捉える。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション講義の概要 2. エコツアーリズムと地域生態論 3. 山地のエコツアー(1) 山地の自然環境 4. 山地のエコツアー(2) 山地の自然生態系の特徴 5. 山地のエコツアー(3) 高度帯の利用と伝統的生業 6. 山地のエコツアー(4) 山地資源の開発と観光化 7. 山地利用のゾーニング 8. 山地の環境容量と脆弱性 9. 埼玉県飯能市のエコツアーの事例(1) 10. 埼玉県飯能市のエコツアーの事例(2) 11. 埼玉県飯能市のエコツアーの事例(3) 12. 埼玉県飯能市のエコツアーの事例(4) 13. 世界の環境問題ー地球環境問題の諸相 14. 世界の環境問題とツーリズムー環境破壊と保全 15. 講義のまとめー持続可能な生活様式 	
到達目標	地理的な知識と地理的見方・考え方を習得し、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているかという視点から、世界の地理を概観のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には配布資料により学修内容を整理する。		
テキスト	犬井正著『エコツアーリズムこころ躍る里山の旅ー飯能エコツアーに学ぶ』(丸善出版、2017年)		
参考文献	講義時に紹介。		
評価方法	定期試験の結果に(80%)によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績(20%)も評価対象とする。		

13年度以降	地誌学Ⅰ	担当者	大竹 伸郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的は、地理的なものの見方や考え方を学ぶことで、自然環境の成り立ちやそれぞれの地域で育まれた文化と自然環境の関わりについて理解し、現代社会に関する基礎的な素養を身につけることである。</p> <p>講義では、現代社会の暮らしの基盤となっている地球の自然環境や各地域によって異なる人文現象（衣食住など）に焦点をあて、人の暮らしと自然の関わりについて講義するとともに、現代の社会生活が起因となっている世界規模の諸問題についても取り上げる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 我々の暮らしと自然環境 環境の諸要素①（地球の成り立ちと地形） 環境の諸要素②（地球の周りの気団と気候） 環境の諸要素③（地球の植生と土壌） 環境の諸要素④（地球に暮らす様々な生き物） 熱帯地域①（熱帯地域の人々の暮らしと文化） 熱帯地域②（焼畑農業と熱帯の稲作） 熱帯地域③（東南アジアの熱帯開発と環境問題） 熱帯地域④（アマゾンニアの熱帯開発と環境問題） 乾燥帯地域①（乾燥帯地域の人々の暮らしと文化） 乾燥帯地域②（一神教と自然環境） 乾燥帯地域③（資源ナショナリズムの台頭） 乾燥帯地域④（中東問題の遠因と現状） まとめ 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には配布資料により学修内容を整理する。		
テキスト	山本正三・犬井正他編『自然環境と文化』原書房		
参考文献	特になし。		
評価方法	定期試験の結果に（80％）によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績（20％）も評価対象とする。		

13年度以降	地誌学Ⅱ	担当者	大竹 伸郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的は、地理的なものの見方や考え方を学ぶことで、自然環境の成り立ちやそれぞれの地域で育まれた文化と自然環境の関わりについて理解し、現代社会に関する基礎的な素養を身につけることである。</p> <p>講義では、現代社会の暮らしの基盤となっている地球の自然環境や各地域によって異なる人文現象（衣食住など）に焦点をあて、人の暮らしと自然の関わりについて講義するとともに、現代の社会生活が起因となっている世界規模の諸問題についても取り上げる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 温帯地域①（温帯地域の特徴と人々の暮らし） 温帯地域②（地中海性気候の人々の暮らしと文化） 温帯地域③（大陸西岸気候の人々の暮らしと文化） 温帯地域④（モンスーン気候の人々暮らしと文化） 温帯地域⑤（北米西部地域の人々の暮らしと文化） 温帯地域⑥（北米東部地域の人々の暮らしと文化） 冷帯地域（冷帯地域の人々の暮らしと文化） 寒帯地域（寒帯地域の人々の暮らしと文化） 山地地域（山地地域の暮らしと文化） 世界の環境問題①（人口問題と食料） 世界の環境問題②（越境する大気汚染） 世界の環境問題③（増え続ける廃棄物と地球環境） 世界の環境問題④（我々の暮らしと地球温暖化） まとめ 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には配布資料により学修内容を整理する。		
テキスト	山本正三・犬井正他編『自然環境と文化』原書房		
参考文献	特になし。		
評価方法	定期試験の結果に（80％）によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績（20％）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	地誌学Ⅱ	担当者	浦部 浩之
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地球上にいる人間の約8割は発展途上国に暮らしている。そして世界人口の約13%に当たる約9億人は、国際貧困ライン（1日1.9ドル）以下の生活を強いられている。我々は今この問題に正面から向き合わなければならない。たとえば、経済開発は重要だがそれを環境に負荷を与えずに行えるのか。市場経済と自由競争の社会で脆弱な貧困層にいかなる社会政策（教育・保健・福祉）を進めていけばよいのか。先進国による開発援助はいかにあるべきか。今日の新興国の成長は、国際関係の構図をいかに変えつつあるのか。</p> <p>本講義ではこうした現代世界における政治的・地理的課題について考え、それを通じて国際関係を見つめる視野を涵養することを目標とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 地球環境(1)：地球環境問題と南北対立 2. (2)：貧困と環境破壊 3. (3)：持続可能な開発の模索 4. (4)：地球温暖化問題と南北関係 5. 南の開発(1)：第三世界の独立と開発援助戦略 6. (2)：ナショナリズムと格差の拡大 7. (3)：貧困と「人間開発」 8. (4)：国連の新しい開発戦略 9. 資源問題(1)：世界の食糧問題 10. (2)：水問題と砂漠化問題 11. (3)：人口増加とエネルギー問題 12. 新しい争点(1)：自然災害と防災 13. (2)：核拡散と原子力利用 14. (3)：グローバル化と金融問題 15. 授業のまとめ 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業効果を高めるための課題（基本事項の事前確認や文献の講読）について毎回指示する。		
テキスト	指定なし。		
参考文献	参考文献は授業で随時紹介する。		
評価方法	期末試験で評価（これに授業への参加状況を加味する場合がある）。		

13年度以降	国際法Ⅰ	担当者	一之瀬 高博
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>〔講義目的〕 国際法の基礎的知識を学ぶとともに、国際社会において法がどのように機能しているかを考察する。</p> <p>〔講義概要〕 国際社会における法の規律のしかたとその特徴を、国際法上の主たる行為主体である国家を中心とした観点から学ぶ。また、海洋についての国際制度を概観する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 国際法の形成と発展 3 国際社会と国際法 4 国際法の存在形態 5 条約法 6 国際法と国内法 7 国際法の基本的法原則 8 国際法における国家 9 主権免除 10 国家領域 11 国家領域としての海洋 12 沿岸国の海洋管轄権の拡大 13 国際公域としての海洋 14 講義のまとめ 15 講義のまとめ 	
到達目標	国際法の意義や基本的な考え方を正確に理解し、個別の事象について見解を示すことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておくこと。 講義中の指示に従い、復習や課題作業を行うこと。		
テキスト	杉原高嶺『基本国際法』第2版有斐閣2014年		
参考文献	『国際条約集』有斐閣2018年、横田洋三編『国際社会と法』有斐閣2010年		
評価方法	期末試験の成績（70%）により評価し、平常授業での課題レポート・小テストなどの成果（30%）も評価対象にする。		

13年度以降	国際法Ⅱ	担当者	一之瀬 高博
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>〔講義目的〕 国際法の基礎的知識を学ぶとともに、国際社会において法がどのように機能しているかを考察する。</p> <p>〔講義概要〕 国際社会のさまざまな分野で発展しつつある国際法を概観するとともに、国際社会に生じる紛争が、集団安全保障や裁判を通じてどのように解決が図られているかについて考察する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 宇宙空間と国際法 3 環境の国際的保護 4 個人の地位 5 難民の保護 6 国際犯罪 7 国際人権法 8 外交・領事関係法造 9 国家の国際責任 10 平和の維持と国際連合 11 紛争の司法的解決 12 国際安全保障 13 武力紛争法 14 講義のまとめ 15 講義のまとめ 	
到達目標	国際法に関する特定の事例、重要な判例、学説を正確に理解し、個別の事象について見解を示すことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておくこと。 講義中の指示に従い、復習や課題作業を行うこと。		
テキスト	杉原高嶺『基本国際法』第2版有斐閣2014年		
参考文献	『国際条約集』有斐閣2018年、横田洋三編『国際社会と法』有斐閣2010年		
評価方法	期末試験の成績（70%）により評価し、平常授業での課題レポート・小テストなどの成果（30%）も評価対象にする。		

13年度以降	英語通訳	担当者	矢田 陽子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この授業では、通訳・翻訳とは如何なるものなのかを学びながら、言葉の相違、文化の相違を超えて私達の言語コミュニケーションが真に可能なのかを考え、その対策を考えていく視点を養成することをゴールとします。</p> <p>文学、映画、演劇といった媒体資料を使い、英語と日本語間での翻訳ケースを比較しながら基礎的翻訳理論を学び、なぜ日本語に訳すとそのような形になるのかを、英語と日本語の間にある言語文化や考え方の違いを踏まえて考察していきます。</p> <p>後半には、BBCニュースを訳し放送通訳の基礎力を、また最新米国映画の字幕を分析していきます。</p> <p>この授業では、英国・米国の映画や文学を扱うため、高い英語力を必要とします。英語が好きであることは最低条件ですが、TOEICのスコアが550点以上であることが望ましい。</p>		<p>Week 1 : イントロダクション「翻訳とは？」</p> <p>Week 2～Week 5 : 「高慢と偏見 Pride and Prejudice」の翻訳比較分析と翻訳理論を学ぶ：意味の等価、翻案理論、機能的翻訳理論ほか。</p> <p>Week 6 : シェークスピアの世界「ハムレット：翻訳比較分析（1）」</p> <p>Week 7 : シェークスピアの世界「ハムレット：翻訳比較分析（2）」</p> <p>Week 8～Week 10 : 実践：BBCニュースやオバマ大統領演説（広島）の逐次通訳に挑戦。</p> <p>Week 11～Week 15 : 「翻訳実践」米国映画「ドリーム」の字幕実践と原作「Hidden Figures」の翻訳に挑戦。</p>	
到達目標	英語通訳に必要な語彙や、基礎知識、基本スキルを習得し、英語通訳ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	教員から次週の授業のための準備をと指示がある場合は必ずしてくる。		
テキスト	教員がプリントを配布。		
参考文献	「翻訳学入門（みすず書房）」、「翻訳の原理（大修館書店）」、「高慢と偏見（ちくま文庫）」		
評価方法	レポート提出(字幕翻訳実践等) (70%)、授業参加度 (30%)		

13年度以降	英語通訳	担当者	矢田 陽子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	社会経済史 a	担当者	新井 孝重
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>◎中世は人々の暮らしの中に、宗教が色濃く影を落とした時代であった。この講座では、平安末期の源平争乱で焼け落ちた東大寺と、これを再建した^{かんじんひじりちようげん}勸進 聖 重源の活動を観ることによって、中世社会に果たした仏教の役割を考えたい。</p> <p>(1) 東大寺を再建した男 (2) 重源の時代 (3) 信仰と経済</p>		<p>① 炎上する東大寺 ② 誰の力に頼るか ③ 重源の業績 ④ 木材をどこから運ぶか ⑤ 出現した大群衆 ⑥ 雨を突いて伊勢へ ⑦ 重源の記憶 ⑧ 法然と重源 ⑨ 合戦の中の黒田荘（くろだのしょう） ⑩ 天変地妖（てんぺんちよう）と飢餓・疫癘（えきらい） ⑪ 源平合戦の余燼 ⑫ 聖の社会事業 ⑬ 新しい経済社会の出現 ⑭ 後生の約束 ⑮ 「荘園」外の経済</p>	
到達目標	歴史学的観点から、社会と経済の関連性・関係性について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業関連事項を図書館で調べる。ノートに整理する。		
テキスト	新井孝重『黒田悪党たちの中世史』（NHK ブックス、本学ポータルサイトよりプリントアウトすること）		
参考文献	新井孝重『楠木正成』（吉川弘文館）		
評価方法	試験成績（100%）による。		

13年度以降	社会経済史 b	担当者	新井 孝重
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>◎中世は一揆の時代であるとも言われている。本講座では伊賀国の黒田荘に展開した中世後期の村の自治生活を、敵対する戦国大名の動きとの関係で観察する。地域自治とは何か、という問題を通じて民主主義の基礎を歴史的に考えたい。</p> <p>(1) 戦乱の中の伊賀 (2) 自立する村 (3) 戦国のコンミュン</p>		<p>① 伊賀国の南北朝内乱 ② 錯綜する地侍の行動 ③ 大規模な合戦は続けられない ④ 国人領主の出現 ⑤ 自立する村 ⑥ 南都への志向 ⑦ 悪党たち、起請文を提出 ⑧ タテの力とヨコの力 ⑨ 惣国のコンミュン ⑩ 内部の規律と「平和」 ⑪ 織田信長軍、伊賀へ侵攻 ⑫ 崩れ去る惣国・中世の黄昏 ⑬ 兵農分離と石高制 ⑭ 中世民衆の共同体をどうみるか ⑮ 荘園史のまとめ</p>	
到達目標	歴史学的観点から、社会と経済の関連性・関係性について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業関連事項を図書館で調べる。ノートに整理する。		
テキスト	新井孝重『黒田悪党たちの中世史』（NHK ブックス、本学ポータルサイトよりプリントアウトすること）		
参考文献	新井孝重『楠木正成』（吉川弘文館）		
評価方法	試験成績（100%）による。		

13年度以降	社会思想史 a	担当者	市川 達人
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代を生きる私たちの政治や経済に関する見方・考え方を支配している近代的社会観の形成を、西欧を舞台に歴史的にたどる。講義は通年で完結する形をとる。</p> <p>前期では、最近リアリティを失ってきたかにみえる「社会」という観念を改めて分析してやることから始め、その「社会」を学問的に対象化する動きがはじまったルネッサンスから宗教改革の時期を取り上げる。キリスト教的な世界観との対抗あるいはその変革のなかで、新しい価値観や生き方が模索され形成される時代である。</p> <p>後期の講義へとつながる問題意識として、「国家というまとまり」と「市場というまとまり」への二重の視点が生まれてくる過程に目を向けたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の狙いについて 2. 「社会」という思想問題 3. 「市民社会」の原型と近代的再生 4. ルネッサンス思想と古典古代文化 5. マキャベリと『君主論』 6. マキャベリと近代政治理論 7. ユートピアという思想 8. トマス・モアと『ユートピア』 9. 中世の教会改革運動、千年王国説、後期スコラ学派 10. ルターの改革運動と神学 11. ルターの政治思想 12. ルターの職業思想 13. カルヴィニズムの宗教思想 14. カルヴィニズムと近代的エートス 15. まとめー主権国家と市場社会 	
到達目標	主要な社会思想家や各種の社会思想について理解し、人生観、世界観を養い、社会を批判的に洞察できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストを使わない講義ですから、ノートをきちんと取り復習をすることが大事です。		
テキスト	使いません。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	期末の定期試験で評価します。		

13年度以降	社会思想史 b	担当者	市川 達人
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>西欧では 17 世紀から近代市民社会の見取り図を描く作業がはじまる。伝統的な自然法思想を手がかりに、個人が自分の自然権を守るため、契約という作為を通して国家を作るという社会契約思想が生みだされる。これと並んで、社会を担う「国民」が経済的主体として自覚され、国家と区別される市民社会という観念が生まれてくる。このあたりの展開をホッブズから初めて 19 世紀のマルクスまでたどってみる。ここでも「国家というまとまり」と「市場というまとまり」が隠れた主題となる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の狙いについて 2. 西欧自然法思想の源泉 3. 自然法思想の近代的転回 4. 社会をめぐる自然と作為(1)…ホッブズの利己心 5. 社会をめぐる自然と作為(2)…ホッブズの国家観 6. 個人を守ること(1)…ロックの所有的個人主義 7. 個人を守ること(2)…ロックの政治的自由主義 8. 文明化という課題…フランスの啓蒙思想家たち 9. 風土と社会…モンテスキューの権力論 10. 個人と社会の一体化(1)…ルソーの歴史認識 11. 個人と社会の一体化(2)…ルソーのデモクラシー 12. 社会は自然に発生する(1)…ヒュームの自然法批判 13. 社会は自然に発生する(2)…スミスの市場社会秩序 14. 社会的に生きる(1)…社会主義の思想 15. 社会的に生きる(2)…マルクスの思想 	
到達目標	主要な社会思想家や各種の社会思想について理解し、人生観、世界観を養い、社会を批判的に洞察できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストを使わない講義ですから、ノートをきちんと取り復習をすることが大事です。		
テキスト	使いません。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	期末の定期試験で評価します。		

13年度以降	外国経済史 a	担当者	御園生 眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代経済の起点であるイギリス産業革命を対象とし、その特徴と問題点を多面的に考察する。</p> <p>(注意事項)</p> <p>①最新のシラバスを第1回の授業で配布するので、履修希望者は必ず出席すること。</p> <p>②出席は第1回より毎回取る。</p> <p>③試験は定期試験期間中に持ち込み無し、論述問題で行う。</p> <p>④評価方法は、2年生、3年生、4年生ともに共通である。</p> <p>⑤この授業は、a,bの順番で履修することを前提としている。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス。序論：産業革命とは何か？ 2. 序論（続） 3. 産業革命の前提条件(1)イギリス農業の発展 4. 産業革命の前提条件(2)イギリス家内工業の発展 5. 技術革新と工場制生産の出現 6. イギリス綿工業の展開 7. 動力源の技術革新 8. 製鉄業の技術革新 9. 交通手段の技術革新：鉄道の出現 10. 企業家と事業形態 11. パートナーシップの特徴 12. イギリス産業革命と世界市場 13. イギリス貿易の動向 14. イギリス産業革命の波及 15. まとめ 	
到達目標	外国経済の歴史について専門知識を習得し、外国経済の成長過程やその要因等について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介した参考文献を読む。 授業で学んだトピックの重要な点をまとめる。		
テキスト	第1回の授業で説明する。		
参考文献	第1回の授業で説明する。		
評価方法	授業への参加度が50%、定期試験の成績が50%の基準で評価する。		

13年度以降	外国経済史 b	担当者	御園生 眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>イギリスに遅れて産業革命を展開した後発国の事例としてドイツを取り上げ、ドイツ産業革命の特徴と問題点をイギリスと比較しつつ考察する。</p> <p>(注意事項)</p> <p>春学期に同じ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス。序論：後発国産業革命の特徴と問題点 2. 序論（続） 3. 産業革命前夜のドイツ経済 4. 産業革命の前提条件の形成(1)プロイセン改革 5. 農業・土地制度の改革 6. 産業革命の前提条件の形成(2)ドイツ関税同盟の成立 7. プロイセン主導による関税同盟の形成 8. ドイツ産業革命の展開(1)綿工業 9. ドイツ産業革命の展開(2)製鉄業 10. ドイツ産業革命と産業技術教育 11. 技術教育の奨励政策 12. ドイツ産業革命と鉄道業 13. プロイセンの鉄道保護・育成政策 14. ドイツ産業革命と銀行業 15. まとめ 	
到達目標	外国経済の歴史について専門知識を習得し、外国経済の成長過程やその要因等について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	春学期に同じ。		
テキスト	春学期に同じ。		
参考文献	春学期に同じ。		
評価方法	春学期に同じ。		

13年度以降	経済学史 a	担当者	黒木 亮
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的 本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。</p> <p>講義の概要 近代自由主義社会の確立を基礎づけた 17 世紀の経済思想から 19 世紀末の経済思想までを通覧する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：経済学史とはどのような学問か 2. ロックとヒューム：市場社会の成立を支えた思想 3. フランソワ・ケネー：人類最初のエコノミスト 4-5. アダム・スミス： 市場社会の仕組みを解明した経済学の父 6. ジェレミー・ベンサム 「最大多数の最大幸福」を夢想した功利主義者 7. トーマス・ロバート・マルサス 市場社会における貧困と「人口の原理」 8-9. デイビッド・リカードウ 古典派経済学の体系化 10. 大陸の経済学者たち： セー、シスモンディエー、リスト 11. ジョン・スチュアート・ミル 功利主義思想と古典派経済学の批判的統合 12-13. カール・マルクス 資本主義社会と古典派経済学への根源的批判 14-15. まとめ 	
到達目標	経済学の形成過程を追体験することで経済理論への理解を深め、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回授業時に配布するプリントや次回の講義箇所の指摘等による教科書ないし参考文献の復習および予習		
テキスト	高哲男編『自由と秩序の経済思想史』名古屋大学出版会		
参考文献	根井雅弘『経済学の歴史』講談社		
評価方法	レポートや試験答案の内容による評価が 100%		

13年度以降	経済学史 b	担当者	黒木 亮
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的 本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。</p> <p>講義の概要 19 世紀末の経済思想から、われわれの社会を支え、その将来を基礎づけるであろう今日の経済思想までを通覧する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：春季から秋季への橋渡し 2. グスタフ・シュモラー：新歴史学派の社会政策思想 3. カール・メンガー：主観主義のミクロ経済学 4-5. ジェヴォンズとワルラス：経済学の数理科学化 6-7. アルフレッド・マーシャル 「冷静な頭脳と暖かい心」の経済学 8-9. ソースティン・ヴェブレン 大量生産・大量消費社会の制度分析 10-11. ヨゼフ・シュンペーター 企業者の創造的破壊が生み出すダイナミクス 11-12. ジョン・メイナード・ケインズ 貨幣経済のマクロ分析 13-14. ケインズ以降の経済学 新旧ケインジアン、ポストケインジアン、シカゴ学派、合理的期待形成学派、ハイエク etc. 15. まとめ 	
到達目標	経済学の形成過程を追体験することで経済理論への理解を深め、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回授業時に配布するプリントや次回の講義箇所の指摘等による教科書ないし参考文献の復習および予習		
テキスト	高哲男編『自由と秩序の経済思想史』名古屋大学出版会		
参考文献	根井雅弘『経済学の歴史』講談社		
評価方法	レポートや試験答案の内容による評価が 100%		

13年度以降	日本国憲法	担当者	加藤 一彦
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本国憲法の入門講義を行う。半期完結講義なので、ポイント的に日本の人権問題を扱うことになる。</p> <p>毎回、判例を読みながら、この国の人権状況を考えてみたい。</p> <p>指定した教科書の他、『六法』と判例は必ず持参すること。『六法』については初回、講義で説明する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 『六法』の使い方／憲法総論 3. 憲法概念 4. 立憲主義 5. 日本国憲法制定過程 6. 法の下での平等 7. 精神的自由：信教の自由 8. 精神的自由：学問の自由 9. 精神的自由：表現の自由／報道の自由 10. 精神的自由：表現の自由／プライバシーの権利 11. 人身の自由と被疑者の人権 12. 社会権：生存権 13. 社会権：教育権 14. 法律学の答案の書き方 15. 総評とまとめ 	
到達目標	日本国憲法の入門的知識（人権に関する知識）を習得し、基本的人権の尊重に関して見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前：教科書を通読しておくこと。事後：講義中あげた参考文献を下に「憲法復習ノート」を必ず作成すること。		
テキスト	加藤一彦『教職教養憲法15話〔改訂3版〕』（北樹出版）		
参考文献	柏崎・加藤編『新憲法判例特選〔第2版〕』（敬文堂）		
評価方法	定期試験 100%		

13年度以降	日本国憲法	担当者	加藤 一彦
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	日本国憲法	担当者	L. ペドリサ
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>ほとんどの国には「憲法」という法がある。憲法は最高法規の性質を有し、国法の上位に位置ものとして、すべての法規範の根拠となる。最近、新聞、テレビ、インターネットなどで、盛んに憲法が話題になっている。憲法改正が妥当かどうかとか、集団的自衛権が国防の観点から必要かどうか、天皇陛下の退位を認めるべきかどうかなど。このような話題を手がかりに、憲法学の基礎を学び、その構成をよく理解した上で、日本国憲法を身近に考えることがこの講義の目的である。日本国憲法の重要な規定の解釈を中心に、統治構造および人権保障の仕組みを学ぶ。また、日常生活とは程遠い法分野と思われがちではあるものの、憲法はどれほど我々の毎日に深くかかわることを認識する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 憲法とは 2. 国民主権と象徴天皇制 3. 平和主義 4. 基本的人権の尊重 5. 法の下での平等 6. 精神的自由 7. 経済的自由 8. 人身の自由 9. 社会権 10. 参政権・国務請求権 11. 国会 12. 内閣 13. 裁判所 14. 地方自治 15. 憲法改正 	
到達目標	日本国憲法の入門的知識（人権に関する知識）を習得し、基本的人権の尊重に関して見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。 授業中の小テストを5回ほど行う。		
テキスト	毛利透『グラフィック憲法入門』（新世社、2016年）		
参考文献	授業中に紹介。		
評価方法	定期試験 70%、授業課題 30%		

13年度以降	コンピュータ入門 a	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この講義では、コンピュータやネットワークに関連する基礎的な知識を学びます。そして、長いレポートの作成、データの集計および情報を相手に伝える際に必要となるソフトウェアであるワードプロセッサ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの利用方法を、実習により身につけます。</p> <p>授業計画の項目が扱われる順序や時間配分は、担当教員により異なることがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. コンピュータとネットワークの利用環境 2. コンピュータサイエンスの基礎 3. インターネットの利用と注意点 4. ワードプロセッサ：機能 5. ワードプロセッサ：図、表の作成 6. ワードプロセッサ：スタイル設定、数式の入力 7. 表計算ソフト：機能 8. 表計算ソフト：計算式（相対参照、絶対参照） 9. 表計算ソフト：関数 10. 表計算ソフト：グラフ、データの並び替え、目的データの抽出 11. 表計算ソフト：データ集計 1（ピボットテーブル、小計） 12. 表計算ソフト：データ集計 2（ヒストグラム、データテーブル） 13. プレゼンテーションソフト：機能 14. プレゼンテーションソフト：聞き手に伝わる資料の作成 15. プレゼンテーションソフト：効果的なプレゼンテーション方法 	
到達目標	一般的なコンピュータ知識、および、操作方法を習得し、学習等を行う際に活用できるようにする。		
事前・事後学修の内容	担当教員の指示にしたがって事前、事後の学修をおこなってください。		
テキスト	立田ルミ、今福啓、堀江郁美『実践に役立つ情報処理』 日経 BP 社		
参考文献	特になし。		
評価方法	担当教員の指定する方法によって評価します。		

13年度以降	コンピュータ入門 b	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>表計算ソフトを有効活用すると、キャッシュフロー計算や制約のある問題のような、実社会で必要となる計算の答えを容易に求めることが可能となります。</p> <p>また自分で分析して求めた情報を発信するには、ネットワークを活用することが不可欠です。講義では、そのために必要となる Web ページの構成、HTML、CSS と、コンピュータ言語の基礎について学習します。</p> <p>授業計画の項目を扱う順序、時間配分および使用するコンピュータ言語は、担当教員により異なることがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 表計算ソフト応用：複利計算 2. 表計算ソフト応用：預金の積立 3. 表計算ソフト応用：ローン返済計画 4. 表計算ソフト応用：What-If分析による利子の計算 5. 表計算ソフト応用：ソルバーによるローン返済 6. 表計算ソフト応用：年金の積立 7. 表計算ソフト応用：効率的な作業配分：0-1整数計画問題 8. 表計算ソフト応用：資源の有効活用：線形計画問題 9. Web ページ作成：Web ページの構成 10. Web ページ作成：HTML と CSS 11. プログラミング言語：概要 12. プログラミング言語：プログラミングの第一歩 13. プログラミング言語：命令の種類 14. プログラミング言語：関数 15. プログラミング言語：プログラム作成 	
到達目標	一般的なコンピュータ知識、および、操作方法を習得し、学習等を行う際に活用できるようにする。		
事前・事後学修の内容	担当教員の指示にしたがって事前、事後の学修をおこなってください。		
テキスト	立田ルミ、今福啓、堀江郁美『実践に役立つ情報処理』 日経 BP 社		
参考文献	特になし。		
評価方法	担当教員の指定する方法によって評価します。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	生涯学習概論	担当者	阪本 陽子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>私たちは、その成長・発達に応じて、人間として学ぶべき課題を持っています。また、少子高齢化、都市化、国際化など、社会の様々な変化に対応した学習が絶えず求められています。生涯学習は、私たちの教育や学習に対する考え方を大きく転換させ、現代社会のなかで重要な意味を持っています。</p> <p>本講義では、生涯学習に関する基本的な考え方を学ぶとともに、生涯学習社会における家庭教育、学校教育、社会教育の在り方や、現代社会と生涯学習の関わりについて考えます。</p> <p>受講生の人数にもよりますが、講義形式だけでなく、様々な学習方法を体験する演習を取り込みながら授業を進めていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 人間の形成・発達と学習 3. 社会の変化と学習 4. 生涯学習の理念とその背景 5. 生涯学習の学習論 6. 生涯学習と家庭教育 7. 生涯学習と学校教育 8. 生涯学習と社会教育 9. さまざまな学習方法を体験する 演習：コミュニケーションで学ぶ 10. さまざまな学習方法を体験する 演習：答えを生み出す討議法 11. さまざまな学習方法を体験する 演習：発展を生み出す討議法 12. 学習形態・技法と学習支援者の役割 13. 生涯学習施設の機能と役割 14. 生涯学習行政の現状と課題 15. まとめ 	
到達目標	生涯学習に関する基本的な考えを理解し、生涯学習社会における学校教育、社会教育、家庭教育のあり方や、現代社会と生涯学習の関わりについて分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	身近な生涯学習施設を訪れるなど、地域の教育事業に実際に関わりながら受講してください。また、授業で配布する資料を熟読し、次回で自分の考えを述べられるように準備してください。		
テキスト	テキストは使用しません。レジュメ等、資料を配布して授業を進めます。		
参考文献	授業中、トピックに合わせて紹介します。		
評価方法	70%以上の出席を学期末レポートの提出資格とします。講義中の課題と参加態度（30%）、学年末レポート（70%）を総合的に評価します。		

12年度以降	図書館概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>図書館の機能と役割の基本について学習する。図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。司書課程のなかでは入門科目になる。</p>		<p>(1)はじめに。図書館とはなにか (2)図書館の構成要素と機能。図書館の社会的意義 (3)図書館の法的基盤と図書館政策 (4)知的自由と図書館 (5)「図書館の自由に関する宣言」と「図書館員の倫理綱領」 (6)図書館の歴史 (7)地域社会と公共図書館の役割。利用者のニーズ (8)学校図書館の現状と公共図書館との連携 (9)大学図書館の現状と課題 (10)専門図書館や国会図書館の現状と課題 (11)国立図書館の役割と機能 (12)図書館員の役割と資質、資格。現状と課題 (13)図書館の類縁機関と現状と課題 (14)国際社会での図書館活動 (15)図書館の課題と展望</p>	
到達目標	<p>図書館に関する概論的知識を習得し、図書館の意義や使命、図書館の種別と役割、図書館の法的存在基盤や図書館政策、図書館司書の役割や使命などについて分析のうえ、見解を提示できるようにする。</p>		
事前・事後学修の内容	<p>テキストの当該学修単元の章を読んでおくこと。実際に公共図書館を見学しておくこと。</p>		
テキスト	<p>『図書館概論四訂版』 塩見昇編著 日本図書館協会 2015年 ISBN : 978-4-8204-1417-9</p>		
参考文献	<p>最初の授業で参考文献リストを配布する。</p>		
評価方法	<p>小課題 30%、定期試験 70%、1/3 以上無断欠席すると授業放棄とみなす。</p>		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館情報技術論	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 現代の図書館では、情報や資料の収集・組織化・保存・提供というあらゆる場面において、コンピュータやネットワークを中心としたさまざまな情報技術が利用されている。本講義では、それらの情報技術について、基礎的な概念を理解した上で、図書館においてどのように応用されているかを学習する。</p> <p>【概要】 図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するために、コンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステム等について解説する。また各種情報システムを実際に利用する演習も行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：身の回りの情報技術、獨協大学のコンピュータとネットワーク 2. コンピュータとネットワークの基礎 3. 情報技術と社会：身の回りの情報メディア 4. インターネットとウェブ 5. ウェブの基本技術：HTTP、URI (URL)、HTML 6. ウェブによる情報の発信 7. 図書館における情報技術活用の現状 8. 図書館業務システムの仕組み 9. データベースの仕組み 10. 検索エンジンの仕組み(1)：情報の収集 11. 検索エンジンの仕組み(2)：索引作成 12. 検索エンジンの仕組み(3)：結果の並べ替え 13. 電子資料とコンピュータシステムの管理 14. デジタルアーカイブ 15. 最新の情報技術と図書館；授業全体のまとめ（質疑応答を含む） 	
到達目標	図書館の業務・サービスに必要な基礎的な情報技術を習得し、これらを図書館実務において実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	指示された情報源については、次回までに入手／アクセスし、参照しておくこと。 また、前回の授業中に赤や青の文字で示されたキーワードの意味を説明できるように復習しておくこと。		
テキスト	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
参考文献	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
評価方法	期末レポート（50%）、平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館情報技術論	担当者	堀江 郁美
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>図書館に関する情報技術の理論を学び、実習する。今日、図書館では図書資料の管理だけでなく、さまざまなサービスを提供するために情報技術を用いている。また、電子図書館、電子書籍の出現など今後も情報技術との関連は深くなると考えられる。この授業では、コンピュータやインターネットの仕組みなどコンピュータの基礎や、情報検索に関する基礎理論と現状を学習し、実習する。最終的には、図書館利用者、スタッフの両視点から、現在、そして今後も通用する情報技術を習得することを目的とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 図書館の役割と歴史 3. 情報技術と図書館 4. コンピュータの仕組みと歴史 5. ネットワークの基礎知識 6. インターネットを利用した情報の発信 7. インターネットを利用した情報の発信:実習 8. 電子文書と電子出版、電子書籍 9. 図書館システム 10. 図書館のサービスとデータベース 11. ネットワーク情報資源とメタデータ 12. ネットワーク情報資源の利活用 13. 図書館システムの安全性と信頼性 14. ネットワーク社会の中での図書館サービス 15. まとめ 	
到達目標	図書館の業務・サービスに必要となる、基礎的な情報技術を習得し、これらを図書館実務において実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前：テキストや与えられた資料を精読すること。 事後：授業内容を復習すること。		
テキスト	現代図書館情報学シリーズ3「図書館情報技術論」高山正也、植松貞夫監修、杉本重雄編集（樹村房）		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業態度(20%)、定期試験(60%)、レポート(20%)を基本に、総合的に評価する。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館制度・経営論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>資料管理運営から財政管理や人事管理、スタッフ教育、さらに自己継続教育といった内容について把握し、実施のための戦略的計画や積極的な図書館活動のためのプロモーション、資金獲得のための政治的手腕などを、企業の経営管理運営理論を参考にして、実際の公共図書館の例をケース・スタディ（事例研究）として議論しながら、現状の把握と問題点、さらにどのような戦略的活動が求められているのかを学ぶ。</p> <p>前半部分は講義であり、「図書館概論」で学習した内容をおさえながら実例を確認していく。後半はグループでの議論やポスターセッション（プレゼン）などが中心となる。したがって、欠席するとグループでの授業参加ができなくなるので注意が必要。</p>		<p>(1)情報社会と図書館の情報戦略 (2)企業や公的セクターの経営理論 (3)図書館法を始めとする図書館関連法群と政策、それにもなう図書館経営の実態 (4)地方自治体の図書館関連条例と図書館政策 (5)事業計画策定と評価 (6)事例研究①図書館サービス活動にともなう事例 (7)事例研究による議論と発表 (8)財政と図書館経営：PFIや委託の問題、予算の獲得など (9)人事管理：専門職の役割と委託などの問題、図書館組織と運営 (10)事例研究②人事管理にともなう事例 (11)事例研究による議論と発表 (12)図書館の施設と設備。場所としての図書館運営 (13)事例研究③図書館サービス業務の数的・質的調査と評価 (14)事例研究④危機管理に関する事例 (15)事例研究による議論と発表</p>	
到達目標	公共図書館や学校図書館など、各種図書館の制度・経営に関する知識・技能を習得し、公共図書館の事業計画を策定・評価できるようにする。		
事前・事後学修の内容	新聞や雑誌で報道される図書館に関連する事例を読んでおく。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	授業中に配布する。		
評価方法	授業参加及びチームワークによるプレゼン 60%、各自の課題 40% 1/3 以上の無断欠席及びプレゼン等のチームワーク欠席は授業放棄とみなす。		

12年度以降	図書館サービス概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>公共公立図書館(公共図書館と公立図書館)を中心として、その図書館活動の実務を理解し、情報資料・人的資源の効率よい図書館活動とは何か、図書館活動に関わる組織・管理・運営、各種計画などについて理解する。また、その活動評価についても考えていく。特に、利用者と直接関わる図書館サービスの意義、特質、方法について解説するとともに課題解決支援、障害者支援、高齢者・未成年者向け支援、多文化サービスなど各種サービスの特質を明らかにする。利用者への直接支援活動として、担当者の接遇や利用者やボランティアとのコミュニケーション等の基本について学習する。</p>		<p>(1)はじめに。図書館サービスの意義と考え方、変遷など (2)来館者へのサービス。貸出、利用援助など (3)資料提供の基礎：場所としての図書館 (4)資料提供の展開：貸出、予約など (5)資料提供の展開：プロモーション活動 (6)情報提供：利用者のニーズへの対応、レファレンス・サービス等 (7)集会・文化活動、行事など (8)障がい者、障がい児への支援活動 (9)高齢者、未成年者、外国人への支援活動。多文化サービス (10)地域社会への支援活動：課題解決支援、ビジネス支援 (11)図書館マーケティング活動：利用者の交流の場としての図書館 (12)図書館経営：図書館サービスとマネジメント (13)図書館サービスと著作権 (14)人的資源：接遇、コミュニケーションなど (15)まとめ。図書館サービスの連携とネットワーク</p>	
到達目標	図書館サービス全般についての概論的知識を習得し、公共図書館などにおける実務、効率的な図書館活動や図書館活動に関する諸問題について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの当該学修単元にあたる章を読んでおくこと。図書館に関する新聞・雑誌記事を読んでおくこと。		
テキスト	『図書館サービス論』日本図書館協会、2010年 ISBN：978-4-8204-0917-5		
参考文献	特になし。		
評価方法	小課題 30%、期末試験 70%、無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなす。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	情報サービス論	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 本講義での情報サービスとは、図書館の情報提供機能を具体化するサービス全般のことをいうが、これにはレファレンスサービスやカレントアウェアネスサービス、各種検索サービス等、さまざまなサービスが含まれる。本講義ではこの情報サービスに関する概念の総合的な理解を目指す。</p> <p>【概要】 まず、図書館における情報サービスの意義を明らかにし、レファレンスサービスや情報検索サービス等の各種情報サービスの方法を概観する。また、情報サービスにおいて利用される情報源について解説する。そして、図書館利用教育や発信型情報サービス等の新しいサービスについて論じる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：身の回りの情報サービス、獨協大学図書館の情報サービス 2. 情報社会と図書館の情報サービス 3. レファレンスサービス 4. 利用案内、レフェラルサービス 5. カレントアウェアネスサービス 6. 情報検索サービス 7. 発展的情報サービス（読書相談、図書館利用教育等） 8. 情報サービスの意義と種類のまとめ（質疑応答を含む） 9. 情報サービスで用いる情報源の特質と利用法 10. 情報サービスで用いる情報源の解説、評価、組織化 11. レファレンスサービスの理論（利用者の情報行動、レファレンスプロセス、事例の活用、組織と担当者、サービス評価等） 12. レファレンスサービスの実践（レファレンスサービスの体制づくり・実施・普及、現状と問題点等） 13. 発信型情報サービスの意義と方法 14. 最新の情報サービス 15. 授業全体のまとめ（質疑応答を含む） 	
到達目標	レファレンスサービスや情報検索サービスなどの図書館における情報サービスの意義と方法に関する知識を習得し、図書館情報サービスのあり方について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	指示された情報源については、次回までに入手／アクセスし、参照しておくこと。 また、前回の授業中に赤や青の文字で示されたキーワードの意味を説明できるように復習しておくこと。		
テキスト	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
参考文献	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
評価方法	期末レポート（50%）、平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	児童サービス論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>子どもやヤングアダルトと称せられる10代の図書館利用者（潜在的利用者）に対する戦略的で効果をあげうるべき図書館プログラムを企画・実施し、評価に耐えうる内容を考えられる専門職としての児童・YA担当司書を養成することを目的とする。さらに幅広く、多くの児童書やYA向け資料を読み、評価し、子どもたちに伝えられるようになることを目標とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> (1)はじめに (2)図書館の意義と使命。民主主義社会・地域社会と図書館の役割。図書館サービスとは何か？ (3)地域社会における「子ども」のイメージは何か？ (4)図書館における児童・ヤングアダルト(ティーンズ)サービスとは何か？ (5)子どもの発達と読書。なぜ「読・書」か？ (6)図書館資料(フィクション) (7)図書館資料(ノンフィクション) (8)授業内演習課題A.「絵本の読み聞かせ」 (9)乳幼児サービス・学齢期サービス (10)中学校や高校など10代のヤングアダルト対象の図書館サービス (11)レファレンス・サービス (12)授業内演習課題B.「ブックトーク」 (13)子どもたちの知的自由と図書館活動をめぐる諸問題ー法律と政策、インターネットなどー (14)実際の図書館活動推進のための企画・立案、年間計画策定など (15)児童・YA図書館活動における現状と将来 	
到達目標	児童や10代の図書館利用者（潜在的利用者含む）を専門に担当する司書に必要な知識を習得し、それらの人々を対象とした図書資料収集やサービス活動に関して計画を立案できるようにする。		
事前・事後学修の内容	絵本や児童文学・YA文学、学齢期向けノンフィクションなどをあらかじめ読みなおしておいてください。		
テキスト	堀川照代編著『児童サービス論』日本図書館協会 2014年		
参考文献	最初の授業で参考文献等のリストを配布する。		
評価方法	クラスでの発表 20%、課題 50%、定期試験 30%、無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなす。		

12年度以降	情報サービス演習（前半）	担当者	高田 淳子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義目的】 利用者の情報要求を把握し、適切な情報提供ができるよう、レファレンスサービス及び発信型情報サービスの実践的能力の育成を図る。</p> <p>【講義概要】 レファレンスサービスの具体的な方法、インターネット情報やレファレンスブック（参考図書）について、事例を参考にしながら解説する。具体的な課題に取り組み、自らの調べものの役に立つ検索方法も身につけられるようにすすめる。多様な情報源を複合的に組み合わせ、適切な回答を見出し、的確に伝えられるよう、発表も含む演習を行う。</p> <p>情報サービス演習（前半）では、情報検索とレファレンスサービスの基本を中心に学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業について、レファレンスサービスとは 2. 情報サービスの設計と評価 3. レファレンスプロセスとインタビュー 4. レファレンス回答と記録 5. レファレンス事例集 6. レファレンスサービスと情報源 7. インターネット情報検索の基本 8. インターネット情報検索の実践 9. レファレンスブック：専門事典 10. レファレンスブック：言語・事物・図書 11. レファレンスブック：歴史・地理・人物 12. レファレンスサービスの案内：企画 13. レファレンスサービスの案内：作成 14. レファレンスサービスの案内：作成・発表準備 15. レファレンスサービスの案内：発表・まとめ 	
到達目標	レファレンス・ワークの実践を通じて、レファレンス・インタビューにおける利用者との適切なコミュニケーション、利用者の要望把握、利用者の求めに応じた資料や情報の提供、および課題解決のための企画提案等ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介するインターネット情報源は実際にアクセスし、紙媒体のレファレンスブックや参考文献は図書館等で直接見て、知識と理解を深めるようにする。		
テキスト	特に指定しない。毎回プリントを配布する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度（30%）、演習レポート（30%）、期末レポート（40%）		

12年度以降	情報サービス演習（後半）	担当者	高田 淳子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義目的】 利用者の情報要求を把握し、適切な情報提供ができるよう、レファレンスサービス及び発信型情報サービスの実践的能力の育成を図る。</p> <p>【講義概要】 レファレンスサービスの具体的な方法、インターネット情報やレファレンスブック（参考図書）について、事例を参考にしながら解説する。具体的な課題に取り組み、自らの調べものの役に立つ検索方法も身につけられるようにすすめる。多様な情報源を複合的に組み合わせ、適切な回答を見出し、的確に伝えられるよう、発表も含む演習を行う。</p> <p>情報サービス演習（後半）では、多様な情報源を複合的に組み合わせた主題別の調べ方と、発信型情報サービスを中心に学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業について、図書館と情報リテラシー 2. 図書を探す 3. 雑誌、雑誌記事・論文を探す 4. 新聞、新聞記事を探す 5. 「調べ方」を調べる 6. パスファインダーをWebで探す 7. 情報検索の参考になるWebサイト 8. 法律情報を調べる 9. ビジネス情報を調べる 10. 健康情報を調べる 11. 発信型情報サービス 12. パスファインダー：企画 13. パスファインダー：作成 14. パスファインダー：作成・発表準備 15. パスファインダー：発表・まとめ 	
到達目標	レファレンス・ワークの実践を通じて、レファレンス・インタビューにおける利用者との適切なコミュニケーション、利用者の要望把握、利用者の求めに応じた資料や情報の提供、および課題解決のための企画提案等ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介するインターネット情報源は実際にアクセスし、紙媒体のレファレンスブックや参考文献は図書館等で直接見て、知識と理解を深めるようにする。		
テキスト	特に指定しない。毎回プリントを配布する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度（30%）、演習レポート（30%）、期末レポート（40%）		

12年度以降	図書館情報資源概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>図書館で所蔵される資料の種別と選択、保存と更新、さらに電子資料やネットワーク情報源などの幅広い資料について理解し、図書館および資料に関する基本的な専門用語について理解して説明でき、また、図書館資料の現状と課題について知識があり、それらについて自分の考えを述べるができるようになることを目標とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館資料の定義 2-4. 印刷資料メディアと非印刷資料メディアの類型と特質 5. 電子資料メディアの類型と特質 6-7. 特殊資料や専門資料メディアの類型と特質／地域資料、行政資料、灰色文献など／人文科学・社会科学分野の基本的資料／自然科学・技術分野の基本的資料 8. 出版・流通・販売に関する基本的知識 9. 著者と著作権 10. 図書館における知的自由、検閲と焚書 11-12. 図書館資料コレクション選択と理論、コレクション形成方針策定 13-14. コレクション形成の実務 15. メディア転換と資料の保存・廃棄・更新 	
到達目標	図書館実務についての概論的知識を習得し、理論的な図書館資料の種別や選択、資料構築方針に基づく資料の保存・更新ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストを熟読してください。		
テキスト	『図書館情報資源概論』日本図書館協会、2012年 ISBN : 978-4-8204-1217-5		
参考文献	授業で参考文献リストを配布します。		
評価方法	小課題 30%、試験 70%、無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなす。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	情報資源組織論	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的</p> <p>図書・逐次刊行物など多様な図書館情報資源の組織化の理論と技術について概説し、情報資源組織演習での学習に備える。</p> <p>○ 講義の概要</p> <p>書誌コントロール、書誌記述法、分類法、主題分析などについての基礎知識を修得する。ネットワーク情報資源など多様な情報資源の組織化、書誌データの活用法を解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の進め方 2. 情報資源組織化とは 3. 目録の意義と種類 4. 集中目録作業 5. 共同目録作業 6. 目録規則の歴史 7. NCR1987 3Rの概要 8. 次世代目録 9. 主題目録法 10. 分類法の概要と種類 11. 分類法の歴史 12. NDC10の概要 13. 図書記号 14. 書誌コントロール 15. まとめ 	
到達目標	図書館における情報資源組織化の意義を理解し、また、図書館の資料やインターネット情報へのアクセスを可能とする情報資源の組織化（記述目録、主題目録、メタデータ）に関する知識を習得し、資料を分類整理のうえ管理できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業中配布のプリントで提示した参考文献などを閲覧することが望ましい。		
テキスト	田窪直規編『情報資源組織論』（樹村房、2015年、現代図書館情報学シリーズ9）		
参考文献	『日本十進分類法. 新訂10版』、『基本件名標目表. 第4版』、『日本目録規則. 1987年版改訂3版』（いずれも日本図書館協会編・刊）		
評価方法	期末試験の結果（80％）によって評価するが、平常授業における参加度（20％）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	情報資源組織演習（前半）	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的</p> <p>図書館情報資源の組織化について学習する。演習形式の授業を通じて、情報資源組織化の具体的・実践的な能力の養成をはかる。情報資源組織演習（前半）では、日本目録規則（NCR）1987年版改訂3版に準拠して、目録作成の技法を学ぶ。</p> <p>○ 講義の概要</p> <p>NCR 1987年版改訂3版の主要規則を書誌的事項ごとに解説する。その上で、NCR1987 3Rによる和資料記入の作成を中心に演習を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のガイダンス 2. 日本目録規則（NCR）記述総則 3. 日本目録規則（NCR）記述通則 4. タイトルに関する事項 5. 責任表示に関する事項 6. 版に関する事項 7. 出版・頒布等に関する事項 8. 形態に関する事項 9. シリーズに関する事項 10. 注記に関する事項 11. 標準番号・入手条件に関する事項 12. 標目 13. 和資料記入の作成演習（基礎） 14. 和資料記入の作成演習（応用） 15. 和資料記入の作成演習（発展） 	
到達目標	図書館資料やインターネット情報へのアクセスを可能とする情報資源の組織化（記述目録、主題目録、メタデータ）について演習し、パスファインダーやビブリオグラフィーを作成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	ほぼ毎回実施する目録作成の演習問題を、正確に記述すること。		
テキスト	日本図書館協会編『日本目録規則. 1987年版改訂3版』（日本図書館協会、2006年）		
参考文献	田窪直規編『情報資源組織論』（樹村房、2015年、現代図書館情報学シリーズ9）		
評価方法	演習（小テスト）の結果（80%）によって評価するが、平常授業における参加度（20%）も評価対象とする。		

12年度以降	情報資源組織演習（後半）	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的</p> <p>情報資源の組織化に関する技術について、演習形式で学習する。多様な情報資源に関する書誌データの作成、主題分析、分類作業、統制語彙の適用などの演習を通じて、情報資源組織業務についての実践的な能力を養成する。</p> <p>○ 講義の概要</p> <p>NDC10の概要・分類規程を解説した上で、NDC10による分類記号の付与の演習を行う。次にBSH4の概要・件名規程を解説した上で、BSH4による件名付与の演習を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の説明 2. 日本十進分類法（NDC）新訂10版の概説 3. 分類規程 4. 主題分析 5. 分類記号の付与 1類・2類 6. 分類記号の付与 3類 7. 分類記号の付与 4類・5類 8. 分類記号の付与 6類・7類 9. 分類記号の付与 8類・9類 10. 分類記号の付与 0類・応用問題 11. 基本件名標目表（BSH）の概説 12. 件名規程 13. 件名標目の付与（基礎） 14. 件名標目の付与（応用） 15. 件名標目の付与（発展） 	
到達目標	図書館資料やインターネット情報へのアクセスを可能とする情報資源の組織化（記述目録、主題目録、メタデータ）について演習し、パスファインダーやビブリオグラフィーを作成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	ほぼ毎回実施する分類記号の付与・件名標目の付与の演習問題を、よく考えて解くこと。		
テキスト	『日本十進分類法. 新訂10版』、『基本件名標目表. 第4版』、『日本目録規則. 1987年版改訂3版』（いずれも日本図書館協会編・刊）		
参考文献	田窪直規編『情報資源組織論』（樹村房、2015年、現代図書館情報学シリーズ9）		
評価方法	演習（小テスト）の結果（80%）によって評価するが、平常授業における参加度（20%）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館基礎特論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「図書館概論」「図書館情報資料概論」「図書館サービス論」などの内容をふまえ、図書館活動のなかで話題となったり、議論となったりしたことをテーマとしてとりあげていく。テーマごとに日本と海外と比較して、各自の調査を報告発表することで国際的視野にたった図書館資料についての議論点を整理できるようになることを目標とする。</p> <p>国際比較を行うことで、日本の図書館サービスの是非を考えていくが、事例研究として、国あるいは地域をとりあげ、さらに多様な事例をテーマとしてあげつつ、演習を中心として学習する。また、講義よりもグループでの議論を中心にすすめていく。個人での調査研究にもとづいた発表報告と、その内容に関連して教室でグループ議論していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館種別からみた図書館サービスや資料構築の概観と変化 2. 図書館資料の変化 3. 国あるいは地域ごとの出版状況・識字/教育状況の把握 4. 事例研究（受講生の報告発表） 5. 図書館資料の背景－著作権法など 6. 国あるいは地域ごとの社会と法律 7. 事例研究（受講生の報告発表） 8. 図書館資料の提供－表現の自由と知的自由 9. 国あるいは地域ごとの社会状況 10. 事例研究（受講生の報告発表） 11. 図書館資料の提供－社会での課題/利用者 12. 事例研究（受講生の報告発表） 13. 国際組織の活動 14. - 15. 受講生による報告発表 	
到達目標	司書課程の必修・基礎科目で学んだ領域について、応用的な知識・技能を習得し、図書館に関する特定課題について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	受講生各自で国あるいは地域を選んで図書館に関する状況を調べておくこと。		
テキスト	指定しません。		
参考文献	最初の授業で参考文献リストなど探索ツール等を配布します。		
評価方法	授業参加（発表・報告）50%、最終課題報告50%、無断欠席1/3以上で受講放棄とみなす。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館サービス特論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>幼稚園から高校を対象としての学校図書館での資料選択・収集・整理、調べ学習や総合学習などのレファレンス業務、さらにパスファインダーなどの作成を通じて、積極的な資料情報探索方法を司書教諭との連携によって行うことを、演習を通じて学ぶ。学校ボランティアや教師集団とのコーディネートについても考えていく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> (1)学校図書館と公共図書館 (2)学校教育と学校図書館 (3)司書と司書教諭、学校司書の役割 (4)学校内での学校図書館建築・設備、情報処理教室などの連携 (5)学校図書館のコレクション構築、ブックリスト等の作成 (6)学校図書館での資料選択・提供 (7)学校図書館における資料の分類と目録化作業 (8)貸出業務、学校図書館システム化から地域ネットワークへの参加、地域学校図書館センター (9)読書指導と学校図書館の役割、ブックトーク等 (10)情報活用教育と学校図書館の役割 (11)情報リテラシー教育と学校図書館の役割 (12)学校図書館におけるレファレンス業務、パスファインダー作成等 (13)学校図書館における知的自由を考える (14)地域と学校図書館 (15)まとめ 	
到達目標	図書館サービスに関して専門的な知識・技能を習得し、図書館活動をより発展させる方策等について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	「図書館サービス概論」内容を確認しておくこと。学校図書館活動に関する新聞・雑誌記事を読んでおくこと。		
テキスト	指定しませんが、司書課程必修科目でのテキストを読みなおしてください。		
参考文献	授業で参考文献リストを配布します。		
評価方法	授業内でのプレゼン 20%、課題 50%、試験 30%、無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなす。		

12年度以降	図書・図書館史	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的 図書館の情報資源と図書館の歴史について発展的に学習し、理解を深める。</p> <p>○ 講義の概要 図書をはじめとする各種図書館情報資源の形態、生産、印刷、普及、流通などの歴史を概説する。また、図書館の歴史的発展について解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のガイダンス・歴史的図書館建築 2. 図書館の源流 3. 紙以前の記録媒体 4. 神の発明と西伝 5. 図書の形態史 6. 図書館の発達 7. 印刷の歴史 8. 印刷技術の進歩 9. 大量印刷の時代 10. 公共図書館の誕生 11. 雑誌・新聞の歴史 12. マスメディアの誕生 13. 記録媒体の多様化 14. 近代公共図書館の発展 15. まとめ 	
到達目標	図書および図書館の歴史について知識を習得し、図書の歴史や情報変遷史、時代や社会の変化に連動した図書館の変遷について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの該当ユニットを読んでおくことが望ましい。		
テキスト	小黒浩司編著『図書・図書館史』（日本図書館協会、2013年、JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ）		
参考文献	特になし。		
評価方法	期末試験の結果（80％）によって評価するが、平常授業における参加度（20％）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

シラバス 免許及び資格課程

2018年4月1日発行

獨協大学教務課

〒340-0042 埼玉県草加市学園町1-1

電話 048-946-1663



DOKKYO UNIVERSITY

学 科	学年	氏 名
学科	年	